クラリオンアース

Crystal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラリオンアース

【Nコード】

N1626G

【作者名】

Crystal

【あらすじ】

『わたしのアバターになりませんか？』人生の目的を模索している少年“芹沢陸”は、ある日奇妙な迷惑メールを受け取った。そのメールを開いたことで、陸は世界の秘密を知ることになる。プラネットメーカーによって創造された惑星クラリオンアースの存在。現実だと思っていたのは、シミュレーションシステムによって再現された架空世界。つまり、あなたはゲームの中のキャラクター。陸の人生や世界観を完全否定する事実の数々。はたして陸は、本当の意味で生きる価値を見出すことができるだろうか

第1話 わたしのアヴァターになりませんか？（前書き）

『なんちゃらプラネット』の主人公、野乃原真菜が創造した疑似惑星を舞台に繰り広げられる物語。方向性は全然違いますが先に『なんちゃらプラネット』を読んでいただくと、より楽しんでいただけると思います。

第1話 わたしのアヴァターになりませんか？

考えたことはないだろうか。自分がいつたい何者であるかということ

一個人、一国の国民、大きく纏めると人種、そして人間……。では、人間とはいったい何だろうか。おそらく明確に答えることができる者はいないはずだ。

学名ホモ・サピエンス。文化を持っており、言葉や文字によって他者とのコミュニケーションを図ることができる。全宇宙唯一の知的生命体とされているが、それもまた完全に証明することは不可能である。

自分が何者であるかということは、自身がそれであるという概念と世間による認識に過ぎない。あなたは本当に人間であるといえるだろうか。

何をバカなことを 人間であるに決まっているではないか。ほとんどの者はそのように答えるだろう。もちろん、その答えに間違いはない。極端な話をすれば、幽霊や妖怪でもない限りあなたは人間である。自身の概念と世間の認識によって、あなたは人間であると確信できるだろう。

しかし、あなたの周りにあるもの全てが……。あなたを含めて全ての存在が幻影であったとするならば話は違ってくる。

誰も気づいてはいないが、世界は何者かによって創られた……。たとえば、コンピューターによってシミュレートされた架空現実だとしたら

あなたは、そのことに気づいていないだけなのかもしれない。

なんとなく毎日が過ぎて行く。

特に目標があるわけでもなく生き甲斐といったものもない。地元

の私立学園に通う芹沢陸は、つまらない日常の連続にある種の不安感を覚えていた。

自分は何のために生きているのだろう。最近、陸はそんなことばかり考えてしまう。

大半を学園生活に費やし、実りのない一日がただ流れて行くだけ……。何かをしているわけでもなく、実に代わり映えのしない毎日である。

芹沢陸という人間が存在しなくとも、この世の中には何も影響がないのかもしれない。いや、間違いなく世界は成り立つだろう。決して重要な人物ではない。芹沢陸の立場といえば、この国の総人口一億数千万人のうち、その他大勢の一人でしかなかった。

それなら、何か行動を起こせば良い。それは大きな行動の必要もなく、何かスポーツに熱中するのも良いだろう。生きた証。とまでは云わないが、生きている実感を持つことができる。

別にずば抜けた才能が無くとも良い。何もしないより、よほど充実できるはずだ。

しかし、考えるのと実際に行動を起こすことはまったくの別問題である。進んでスポーツを行うなど面倒以外の何者でもない。自ら身体を酷使して、どのような利があるというのだろうか

気乗りしないことを続けても苦痛になるだけ。どうせなら興味のあることに熱中したい。そのように考えてはみるが、困ったことに陸には趣味と呼べるものがまったくなかった。

このままではいけない気がする。漠然とそう考えるがやりたいこととは見つからない。

思考の堂堂巡り　　陸は気落ちしたまま机へと俯せた。

そんな陸を心配するように、一人の少女が声をかけてくる。

「陸くん、どうしたの?」

その声を聞いた陸は、面倒臭そうに頭を上げる。そこには陸の幼

馴染みである白檀びやくたんかおり薫がいた。

「なんだ薫か……」

陸は素っ気なく呟く。よくよく考えてみたら陸のことを名前で呼ぶ女子は薫しかいない。

「なんだ、とは御愛想なしね。調子悪そうだったから声をかけてあげたんじゃない」

「おまえには関係ないだろ……」

「関係ないって、わたしと陸くんは幼馴染みなんだから、心配するのは当たり前でしょ！」

「ふむ、心配してくれたのか？」

「ひゃっ！」

図星を突かれてあせったのか薫の顔が真っ赤に染まる。そんなやり取りを見ていたクラスメイト　とくに男子たちが色めき立った。

『あ……、やばっ……』

見た目が可愛く性格も良い薫は、いわゆる学園のアイドル的存在である。その薫と幼馴染みというだけで陸は男子生徒たちになにかと疎まれていた。

中等部の頃、薫から一方的に避けられる時期があった。だが、高等部になってからは以前にも増して幼馴染みを理由に関わりうとしてくる。

いったいどのような心境の変化があったのだろうか……。何にしても、今の状況は陸にとってあまり歓迎できるものではなかった。

「と、とにかく、おまえが心配するようなことは何も無いよ」

話は終わりだと言わんばかりに、陸は薫から視線を逸らす。そんな態度に薫は怒っているようだが、陸は完全無視を決め込むことにした。

「ん？」

そのとき陸は、カード型携帯端末へメールが届いていたことに気づく。カード端末を手にして親指と人差し指で挟み込むと、空中に小さな半透明のモニターが浮かび上がる。意識を集中させるとメールが起動　着信したメールアイコンが表示された。

「えっ……、このメールって？」

驚いたことに届いていたのは、映像ではなく文字メールのようであった。しかも差出人は不明でアドレスも見たことないものである。知り合いからのメールと違って陸はかなり驚いた。

個人のメール機能には強固なフィルターがかかっており、直接アドレスを交換した者でしか基本的には送受信できないようになっていいる。無作為に送られる……いわゆる迷惑^{スパム}メールなど、webネットワーク創世記時代の遺物であった。

このような怪しいメールは直ぐにでも削除すべきなのだろうが、陸はいまだき珍しい動画以外のメールに興味を覚えた。そして、なんと不用意に、そのメールを開いてしまった。

メールはいたってシンプル　二十文字にも満たない短い文章。その内容はかなり意味不明なものであった。

「え〜っと、『わたしのアバターになりませんか？』……。なにこれ？」

背後から寄りかかるように薫がメールを覗き込む。突然のことで陸は飛び上がるように驚いてしまう。そんな心境を悟られないように、陸はわざと大きな声を上げた。

「ひ、ひとのメールを勝手に見てるんじゃないやねえ！」

「って、なに怒ってるのよ……。そんなことより、このアヴァターって何？」

「そんなのオレが知るわけないだろ！」

薫は、迷惑メールが届いたことより、その内容が気になったようである。確かにアヴァターという言葉は陸も聞いたことがなかった。

「アバター……アヴァターとは、サンスクリット語で『地上に降りた神の化身』って意味だよ」

じゃれ合う陸と薫に、眼鏡をかけた知的な男子生徒が近づいてくる。それは、二人の共通の知り合い菱木健太であった。

「まあ、この場合のアヴァターとは、おそらくネットワーク上に創る自分の分身のことだろうな。ほら、ネットワークゲームなんかを始めるときにキャラクターメイキングするだろ？ その創られたキャラクターのことを昔はアヴァターって呼んでいたらしい」

無駄に知識が豊富な健太は、陸たちの疑問を簡潔に答える。

「なるほど。じゃあ、アヴァターにならないかっつのは、いったいどういう意味なんだ？」

それを聞いて健太は呆れたようなため息を吐く。

「おいおい、そんなメールを真に受けるなよ……。いいか、なにが起こるかわからないから、間違つても返信なんかするんじゃないぞ」「わ、わかつてるよ。ちよつと気になつただけだつて……」

さすがに陸もそれほど愚かではない。返信した途端、悪人に陸のアドレスが知れ渡り、大量の迷惑メールや脅迫めいた詐欺メールが届くことになるだろう。

陸は、差出人のアドレスをブロックリストに追加した後、迷惑メールを完全に消去する。念のためウイルススチエックソフトを起動させ、そのままカード端末を胸ポケットにしまった。

「それで？ おまえたちはこのまま帰らないつもりなのか？」

言われてみれば、陸たち以外、教室には誰も残っていなかった。皆、帰宅したか所属するクラブへと向かったのだろう。

「二人きりになりたい というなら、オレも失礼するが……」

健太はなにやら意味有り気に呟く。逸早く意味を理解した薫は、赤面しながら激しく抗議した。

「ちよつ、なにいつてるのよ！ そ、そんなわけ！」

いつものように騒ぎ出す薫の様子に陸はうんざりして頂垂れる。何をそんな向きになっているのだろうか

このままでは、別の内容で頭を悩ませることになりかねない。陸は話を終らせるように席から立ち上がった。

「それじゃあ 帰るか？」

号令をかけて陸が出入口へと歩き出す。すぐさま薫がその後を追った。

かなり鈍感な陸に、想いを隠しきれない薫……。二人はなんとも微笑ましい関係のようであった。

楽しそうに下校する陸たちを見つめる女子生徒がいた。

校舎の屋上に佇むのは神代菜月かみしろなつき。陸たちより一つ上の先輩でこ

の私立白鳳学園高等部の生徒会長であった。

転落防止の金網越しに向ける眼差しはどこか淋しげで、その視線はどつというわけか陸の動きだけを追っていた。

不意に、菜月は生徒証でもあるカード端末を取り出す。意識を集中させて、メーカーを立ち上げる。一つのアイコンを選んで開いてみると、映像ではない。文字だけのメールが表示された。

『わたしのアバターになりませんか？』

それは、陸に届いたのと同じ内容のメール。なぜ菜月の元にそのメールがあるのだろうか。単に同じ迷惑メールスパムを受け取っただけ、あるいは陸にメールを送った張本人

陸の姿が見えなくなると、菜月は瞳を瞑って頂垂れる。その目尻には、うっすらと涙が浮かんでいた。

ダイニングルームで夕食を済ませた陸は、二階にある自室へと戻ってきた。ここが世界中で一番落ち着ける場所である。

ベッドに身体を投げ出した陸は、今日の出来事を思い出してみる。じつに何も無い一日であった。

朝起きて学園へと向かい、放課後になったら薫たちと街へ出向いて時間を潰す。夕方になって帰宅し、食事を済ませて今に至っている。毎日同じことの繰り返し……。唯一、違いがあったとするならば、例の迷惑メールスパムが届いたことであろう。

『わたしのアバターになりませんか？』

差出人もわからない迷惑メールスパム。その内容だけははっきりと覚えている。

地上に降りた神の化身。あるいは、ネットワーク上に創る自分の分身キャラクター。アバターになるとは、いったいどういうことなのだろう。

もちろん、いまさら考えても答えが出るはずはない。すでにメールは削除され、差出人のアドレスも受信拒否に設定してあるからだ。陸は、胸ポケットからカード型携帯端末を取り出す。基本画面を立ち上げ、何気なく受信状況を確認してみると、差出人不明のメールが三通も届いていた。しかも、それはブロックリストに登録したはずの例の迷惑メールスパムを送ってきたアドレスからであった。

「う、うそだろ……」

メールが三通も届いていたにも関わらず着信にまったく気づかなかった。よくよく考えてみたら、最初の一通目のときも着信反応は無かったように思える。そんなことより、どうしてブロックリストに登録してあるアドレスからメールが届くのだろうか

一通目のメールを開いたことによって、カード端末がウイルス感染してしまった可能性もある。陸はベッドから飛び起きて、机にあるメイン端末のスロットへカード端末を差し込んだ。

その瞬間、メインモニターに奇妙な記号の羅列が映し出される。メインシステムのウイルス感染。いや、事態はそんな簡単な状況ではなかった。陸の意志とは関係なくリアルタイム型コミュニケーション

ヨンツールが起動する。強制介入　何者かが回線を無理矢理こじ開けようとしているみたいだ。

「やばい！」

ツールの終了をイメージするがフリーズしているのかまったく反応しない。本体側の電源パネルにタッチしても無駄のようである。最悪の事態　どうやらクラッカーのような存在に、メインシステムを掌握してしまったようだ。

一日が終わろうとしているこのタイミングで、とんでもないイベントが待ち受けていたものである。バックアップがあるとはいえ、システムの完全復旧に二三日はかかってしまうかもしれない。陸がそんな風に考えていると、モニター全体にノイズが走り、なにやら複雑な記号が現れ始めた。

表示された無数の記号が中央に集まり何かの形を象る。それは徐々に明確となり、最終的には人の姿へと変化した。

映し出されたのは年の頃十三四の女の子……。いまだ幼さの残る愛らしい美少女であった。

『やつと繋がった』

それが女の子の発した第一声である。

予期せぬ状況に陸は驚いてしまう。こんな小さな女の子がメインシステムに進入してきたクラッカーだともいうのだろうか。いや、感性が豊かなだけ、若い方がクラッカーとしても優秀だと聞いたことがある。こんなことを仕出かすのだ。見た目の可愛さに騙されてはいけない。

「おいおまえ……。いったい何のつもりだ？」

人のシステムに進入してくるなど、完全に犯罪行為である。陸はモニターに映る女の子を睨み付け、凄みのある声で問いかけた。

すると、女の子は陸の様子をジッと見つめ始めた。頭から爪先までを確認するように見回す。その視線は、まるで陸を値踏みしているかのようであった。

『うん、まあまあかな。見た感じも格好良いし、あなたに決めちゃおうかな。』

少女は、陸の声が聞こえないかのように無視している。そんな態度が陸を苛立たせた。

「てめえ聞いているのか！ こんなことしやがって、いったいどういうつもりだ！」

陸の怒声に女の子はびっくりした表情をする。信じられないといった様子で目を丸くした。

『そっか、確か自我ってのがあるんだよね。なんか、すっごく変な気分』

「な、何を言ってる」

会話にならない。陸と女の子の間には、何らかの壁があるようだ。

『あなた、名前は？』

「えっ！ せ、芹沢陸……」

突然の質問に陸はおもわず答えてしまう。

クラッカー相手に何を名乗っているのだろうか

『芹沢 陸、リク……。うん、リクだね』

「つて、いきなり呼び捨てかよ！」

『わたしの名前は……。あ、まだリクで決定つてわけじゃないから、名前はマズイかな……。えーっと、わたしは そう、サファイア……サファイって呼んでね』

人に名乗らせておいて、自分の名前は秘密なようである。一応犯罪者としての自覚はあるみたいだが、素顔を晒している時点で失格だといえた。

「で……。サファイはどうしてオレのシステムをクラッキングしてきたんだ？」

『クラッキングく、なにそれ？ サファイはキャラを選んでいただけだよ』

「キャラを……。選んでいた？」

につこりと微笑むサファイ。屈託の無い笑顔に陸の調子は狂いつぱなしである。どうやら、悪いことをしているという意識はまったく無さそうだ。

それにしても、キャラを選んでいたとはいったいどういう意味なのだろうか

『あのね。サファイ、リクにお願いがあるんだけど……』

サファイは、やや俯きながら見上げるような視線で呟く。なんとも可愛い仕草。おそらく当人はかなり甘え上手なはずだ。

「お、お願い……。だと？」

なんだか妹の相手をしているような気がしてくる。だが、どれほど可愛くとも相手は犯罪者。油断するわけにはいかなかった。

「ふざけるな！勝手に人のシステムへ入り込んできて、何がお願いだ！」

『うう〜。リク、なんで怒ってるの〜？』

「うぐっ……」

涙目になっているサフィを見て、なんだか陸の方が悪いことをしている気分になってしまう。いたたまれなくなった陸は、そんな状態から逃れるように一つの提案をした。

「ま……、まあ、どうするかは別にして　どんな願いかだけは聞いてやるよ」

それを聞いたサフィの表情はパツと明るくなった。

『じゃあ言うね〜。リク……、サフィのアヴァターになってください。お願いします！』

まるで片思いの相手に告白しているかのような勢いである。そんなサフィの様子に困惑していた陸だったが、聞かされた内容の一部に違和感を覚えた。

「……、アヴァター？」

『そう、サフィのアヴァター。それとも、もう他のプレイヤーと……契約しちゃったかな？』

何ともいえない空気が流れる。またしてもアヴァターである

もしかして、あの迷惑メールの内容にちゃんとした意味があったのだろうか。しかし、肝心のアヴァターについては何もわからないままである。

「ちょっと待て。だからアヴァターってのはいったい何なんだ？」

他にも気になる内容はあったが、まずはアヴァターについてはつきりさせないと話にならない。

『えっ、アヴァターはアヴァターだよ。サファイがそっちの世界で行動するための代行者　みたいな？』

「つまり、この金緑石でサファイの代わりをするのがアヴァターってことか？」

『そう、そんな感じ〜』

「ふむ……。さあサファイ、良い子は寝る時間だぞ」

『ひどっ！』

身も蓋もない陸の切り返しにサファイは愕然としてしまう。急に興味を無くした陸には、取り付く島もなさそうだ。

「だいたい何がアヴァターだ！　人をゲームキャラかなんかと勘違いしてるんじゃないか？」

要はアヴァターとなった陸がサファイの指示通りに行動する遊びのようだ。ちゃんと成立するのであれば、なかなか面白い発想の遊びである。言葉の使い方はおかしいがリアルネットゲームとでも言うべきだろうか……。立場が逆なら陸も少しだけやってみたいと考えたのは内緒であった。

『ゲームキャラ……。そうだね、まずはリクのことを　リクの住

んでいる世界のことをちゃんと説明しないといけないよね……」
「なに？」

真剣な表情で陸を見つめるサファイ……。その口からは、信じられない内容が語られた。

「リク、落ち着いて聞いて……。リクがいる場所そこは、あの有名なプラネットクリエイター野乃原真菜のほらまなが創った七番目の惑星クラリオンアースの中……。リクが現実だと思っているのは、プラネットメーカーってシミュレーションシステムによって創られた架空世界。だから、リクを含めた全てのモノは、現実には存在していない。サファイから見たらリクはまさしくゲームキャラなの……」

いったい何を言っているのだろう。このときの陸には、サファイの言葉がまったく理解できなかった。

直径三メートル・高さ四メートルほどの円柱状ガラスケース内に創造された惑星プラネット。サファイによれば、シミュレーターの過程で発生した文明こそ、陸が現実だと信じている世界なのだという。

年間を通して創造される惑星は二十個程度……。だが、生命の住める惑星が誕生するのはごく稀なこと。中でも豊かな水を湛えたブルーアース型と呼ばれる惑星は、プラネットメーカーが発表されてから二十五年経った今でも僅か三つしか創造されていない。そして、知的生命体が誕生し、文明レベルがサファイの住む現実世界に追いついた唯一の惑星こそクラリオンアースであった。

クラリオンアースが誕生したことにより、プラネットメーカーの開発者である如月優子きづきゆうこは隠されていた一つの機能を発表する。それがクラリオンアースの中へユーザーがアクセスし、知的生命体とコ

コミュニケーションすることができる特別な機能であった。

しかし、誰もがクラリオンアースへアクセスできるわけではない。クラリオンアースの中では、陸たち知的生命体が己の世界を唯一の現実だと信じて生活している。そこに外部からの接触が加われれば、パニックが起こるのは目に見えて明らかである。そのため、まずは限られた人数での試験的な接触が行われることになった。

一国につき僅か十二人　サファイはそのうちの一人である。十二人のユーザーは現地の知的生命体とコミュニケーションを行い、協力者ともいえる一人のアヴァターを選定することになる。

『わたしのアヴァターになりませんか？』

特別なメールを受け取り、開いた者こそがアヴァターの候補者……。陸も不意ながらアヴァター候補に選ばれてしまったようだ。

あなたの住む世界はコンピュータによってシミュレートされた架空現実。あなた自身も本物の人間ではない

昨晚、メインシステムに不正侵入してきた少女サファイは、陸の人生や世界観を完全否定した。

全てのはシミュレートによって創られている。人間という存在もプログラムによって生きていると錯覚させられているだけ……。つまり、目の前にいる幼馴染みの白檀薫も、0と1の電気信号の集合体でしかないというわけだ。

おもむろに、陸は薫の頬を人差し指で突いてみる。

「ふむ……。ぶにぶにゆだな〜」

こういった感覚もプログラムによって認識させられているだけなのだろうか。なんにしても、この弾力がプログラムによって再現さ

れているとは、とても信じられなかった。

「りりり、陸……くん？」

その奇抜な行動に、薫は真つ赤な顔で慌てまくる。いや、予期せぬ接触到驚いているだけなのかもしれない。そんな様子に、朝のホームルームを待っていた生徒たちは愕然とした。

薫が陸に好意を抱いていることは周知の事実である。今までは鈍感な陸が薫の気持ちを中心にスルーしていた。それは、薫に好意を寄せる多くの男子生徒たちにとって唯一の救いであった。しかし、陸が薫を意識し始めたとなると話は違ってくる。このまま一気に親密な間柄となる可能性も考えられた。

「なかなか面白い状況だな」

男子生徒たちの一触即発な感情へ割り込むように健太が現われる。すると、生徒たちの嫉妬の念は徐々に薄まった。陸と薫にとって健太はクツシヨン材のようなものである。陸たちを二人きりにするより、幾分かは好ましい状況なのだろう。

「健太か……」

人差し指から開放された薫は、極度の緊張からか自らの席に座り込む。幸せそうな表情で微笑む薫を余所に、陸は健太とある質問をした。

「なあ……、もしオレがいなくなったら どうする？」

「なんだ、どこか旅にでも出るつもりなのか？」

「いや、最初からこの世界に存在しなかったと仮定して……だな」

自分でもおかしなことを言っているのはわかる。最初から存在しなかったら、急にそんなことを聞かれても健太は困ってしまうだろう。だが、健太は陸の質問に冷静な答えを返した。

「考えるまでもない。最初からいないのなら、おまえという存在に気づかないだけだ……」

もっともな意見である。陸という人間が存在しなければ、健太の親友や薫の幼馴染みという関係は成り立たない。まさに考えるだけ無駄な行為だといえるだろう。

「ふむ、なるほど……」

「陸……。今日のおまえ、おかしいぞ」

同じことに気づいたのか、薫も心配そうな顔で陸の様子を窺う。このまま放っておけば、陸という存在が消えて無くなってしまいかもしれない。そんな風に感じたのだろうか

「薫は……オレがいなくなったらどうする？」

「い、いなくなったら……って」

その途端、薫は泣きそうな顔をする。いつもの軽いノリではなく、本当に虐めているような気分となり、なんだかばつが悪くなってしまう。陸は困ったように苦笑しながら次の言葉を慎重に選んだ。

「なんていうか……もしオレが消えてしまったら、やっぱり忘れてしまうのかな？って……」

「わたしと陸くんは幼馴染みなんだから、忘れるなんてそんなこと絶対ないよ！」

力強く宣言する薫……。そんな薫の様子に、陸はおもわず吹き出してしまった。

「ちよっ！　なんで笑うのよ〜！」

「いや、なんでもないんだ。二人とも悪かったな、変なことを聞いて〜」

「おい陸……。なにか困ったことがあったら相談しろよな。全力で協力するから」

「も、もちろんわたしも陸くんのために協力するよ！」

「二人とも……」

もし、本当に消えてしまっても、この二人なら覚えていてくれるかもしれない。陸は、なんとなくそう思えるのだった。

時刻を知らせるチャイムが鳴り響く。担任教師がやって来て、朝のホームルームが始まった。

ホームルームの間、陸はあることを思い出していた。それは、昨晚に行ったサファイとのやり取りである。

陸たちの住む世界クラリオンアースの真実を伝えるサファイ……。当然、陸はそんな与太話を信じることはできなかった。

「なにか架空世界だ　ばかばかしい」

『まあ、信じられないのは当然だよ〜。サファイが同じ立場だったら泣いちゃうもん』

泣いてどうにかなるような問題ではない気がする。陸はなんだか頭痛を感じてしまった。

「で〜、仮にサファイの話が本当だとして、この世界はゲームの中だ

とする」

『本当だもん……』

「いいから黙って聞けって！ あゝ、オレをアヴァターにしてサファイは何をしたんだ？ たとえば何かの謎を解いたり、RPGロールプレイングゲームみたいに敵と戦うことになるのか？」

普通、ネットゲームなんかだと、プレイヤーは明確な目標に向かって物語を進めていくことになる。または、他のプレイヤーたちとパーティーを組み、ゲームマスターが用意したクエストなどをこなしたりするものである。サファイが参加していると言いつ張っているこのゲームでも、そんな目的みたいなものがあるのだろうか。アヴァターになるつもりはないが、このリアルネットゲームの内容は少しだけ気になった。

すると、モニターに映るサファイが可愛い動作で考え込む。アヴァターとして契約しない限りゲーム内容は教えてもらえないのかもしれない。陸がそんなことを考えていると、サファイがとんでもないことを呟いた。

『え〜つと……、よく分かんない　かな〜』

その瞬間、陸は豪快にずっこけた。

「なつ、分かんない？ 分かんないだ〜！〜！」

『しょ、しょうがないよ〜。サファイが貰ったのはクラリオンアースでアヴァターを創る権利だよ。そのアヴァターで何をするかなんて説明されてないんだもん！』

「じゃあなにか〜？ サファイはオレをアヴァターにして、この金緑石でお散歩でもするつもりか？」

『あつ、それいいかも』

泣きたくなってきた。少しは面白そうだと考えた自分がバカみたいである。陸は気落ちしたように大きく頂垂れた。

『だいたい、最初からストーリーがはっきりしているゲームなんて無いでしょ。手探りで進めていって、最終的にクリアするわけだから……』

サフィの言うことも一理ある。RPGなんかでは、最初から明確な目的は無く、物語を進めていくことで倒すべきラスボスの存在が明らかになつたりするからだ。

このゲームも、アヴアターとして過ごしているうちに、本当の目的のような何かが判明することになるのかもしれない。なんにしても、陸の答えは最初から決まっていた。

「悪い。やつぱりオレ、アヴアターにはならないから」
『……………。そつかく、リクが嫌なら仕方ないね』

あつさりと引き下がるサフィに陸は拍子抜けしてしまう。もう少し駄々を捏ねられると思っていたからだ。

「サフィ？」
『じゃあ、サフィは別の候補者を当たってみるね。あ、それと、もしかしたら別のプレイヤーがリクにコンタクトしてくるかもしれないから気をつけたほうがいいかもよ』
「えっ？」

『アヴアターになるってことは、クラリオンアースにおけるプレイヤーの分身になること……。もともとプレイヤーはクラリオンアースには存在していないわけだから、アヴアターになつた瞬間、リクの存在は世界の理から外れてしまうことになつちゃうの』

「な、なにを言って」

『つまり、リクは最初から存在しなかったことに　クラリオンア
ースでは生まれなかったことになる。最初からいないわけだから誰
もリクのことを知らない。友達やご両親でさえも、リクのことを完
全に忘れてしまうことになるから……』

それだけを言い残し、サファイは通信回線を切断してしまった。

その内容を聞いて、陸は啞然としてしまう……。お騒がせ娘は、
最後の最後にとんでもない事実を暴露していったようである。

もし、陸が軽い気持ちでサファイのavanaughになっていたらと思
うとゾツとしてしまう。もちろんサファイの与太話が全て真実である
と仮定してのことなのだが

とにかく、生まれなかったことになるなんてお断りである。陸は、
何があっても決してavanaughにはならないと心に誓うのだった。

第2話 神代菜月と死体無き殺人事件

それに気づいたのは朝刊配達をしている青年であった。

契約宅の場所を思い浮かべながら、青年は自転車を走らせる。その途中、早朝の爽やかな空気に似付かわしくない嫌な臭いを感じた。ひとことと言えば『生臭い』であろう。中には鉄の錆びたような臭いも混じっている。

青年は辺りを見回しながら、ゆっくりと自転車を進める。すると、アスファルトに点々と赤黒い液体が連なっていることに気づいた。ぞくり……。青年は直感的にそれが何かの血であることを理解する。裏路地へと連なる血の流れ、その先にどんな光景が広がっているのかも

これ以上関わってはいけない。頭ではそう理解するも無意識のうちに自転車を止めてしまう。青年は自転車を離れ、息を潜めながら薄暗い路地へと入って行った。

恐いもの見たさであろうか、実に軽率な行動である。

ホラー映画なら真っ先に殺害される役回り。いや、もし現場に出くわしてもしたら、本当に無事では済まないかもしれない。しかし、何かが起こっているかもしれないというときに、人はそれほど冷静でいられるはずもなかった。

注意深く進みそこに辿り着く。

真っ赤な血液が辺りに飛び散り、壁や地面を真紅に染めている。血の量から考えてもこの場所で何かか殺されたのは間違いない。それなのに、そこにあるべきはずの死体はどこにも見当たらなかった。残忍な殺戮現場 忽然と消えた死体。それは、ここ最近多発している不可思議事件であることを証明するものであった。

青年はカード端末を取り出し警察へ通報しようとする。そのとき気づいてしまった。建物の陰から青年の様子を窺っている人影があることに……。

驚いた青年は手にしていたカード端末を落としてしまう。地面を滑るように転がるカード端末は、人影の足に当たって動きを止める。すると、その人影はゆらりとした動作で姿を現した。

まるでモデルのような美しい少女。額には大きな宝石のようなものが付いている。目の前にいるはずなのに実体はまるで感じられない。一瞬、青年は天使が舞い降りたのではないかと錯覚してしまう。その手に握られているソレを目にしてしまうまでは

見事な宝飾のされた巨大な剣。少女には似つかわしくない物騒な代物である。

殺戮の凶器　　青年はここで何が起こったのかを思い出した。

殺される……。恐怖に身が竦み青年は逃げ出すこともできない。

少女はゆっくりと青年に近づく。その大剣を一振りすれば青年の身体は真つ二つとなるだろう。だが、少女は青年の脇を通りすぎ、表通りへと姿を消してしまった。青年のことなど、視界にすら入らないとでも言いたげに

緊張の糸が切れたように青年はその場へ崩れ落ちてしまう。幸運にも青年は、不可思議事件の新たな犠牲者にならなくて済んだようであった。

謎の少女サファイに惑星クラリオンアースという架空世界の話が聞かされてから十日が過ぎようとしていた。その間、陸の元には例の迷惑メールが山のように届いていた。^{スパム}

このメールはセキュリティフィルターに全く反応しないようである。当然ではあるが、届いたメールは開かず削除するようにしている。開いた途端、サファイのようなプレイヤー気取りのクラッカーが、陸のメインシステムに進入して来そうな気がしたからだ。

サファイの話では、同じようなプレイヤーがあと十一人もいるらしい。連中がどんなリアルネットゲームを行おうとしているのかはわからない。なんにしても、陸がアヴァターとして巻き込まれるのは

御免であつた。

そんな迷惑メールスパムの届く数も落ち着いてきたころ、陸の通う白鳳学園では奇妙な事件の話題が持ち切りとなっていた。

死体の無い殺人事件

DNA鑑定から残された血液は人間のものである。流れ出た血液は致死量を軽く超えている。間違いなくそこで人が殺されているのだ。

しかし、肝心の死体が見つからない。ここ最近に行方不明となつた者もない。当初は愉快犯によつて輸血用の血液が撒かれたとも考えられていた。だが、そんな簡単な問題ではなさそうであつた。

犯行現場に残された物的証拠　警察による科学捜査では血痕の飛び散り方などによつてどのように殺害されたかがわかるという。

被害者は鋭い刃物によつて斬り裂かれている。しかも、何度も何度も滅多斬りにされているらしい。

殺害犯によつて死体が持ち去られた可能性も考えられる。もちろん、そのような形跡はまるでない。故に不可思議事件　報道する各メディアはそう仮称していた。

「今朝起こつた不可思議事件なんだが、どうやら犯人と思われる人影が目撃されたらしい」

どこから情報を仕入れたのだろう、健太が得意気に説明を始める。昼食中にする話題ではないと思われたが、犯人らしき人影の情報が気になった陸は黙って耳を傾けることにした。

「驚け、犯人は女性……。目撃情報によると、白鳳うぶ学園の制服を着ていたそうだ」

「なんだ、白鳳の生徒なのか？」

「いや、制服を着ていたという情報だけでは、犯人が白鳳の生徒だ

とは言い切れない」
「ふむ、なるほど……」

これまで犯人に繋がる情報はまったくなかった。人影の目撃はかなり重要な手掛かりとなることだろう。しかし、陸と同年代の女子生徒が殺人を繰り返しているとはとても思えない。いや、死体が無いのだから本当に殺人であるのかさえ謎である。

何か不思議な力 想像もつかないような未知なる力が関係しているのかもしれない。陸は漠然とそのように考えていた。もちろん、その仮説には何の根拠もないわけだが……。

「それにしても、血痕だけ残して死体が消えるなんて、ガンシューティングの敵キャラみたいだな」

「……え？」

「まあ、ガンシューティングだけに限らないが、あの手のゲームは敵を殺しても数秒で死体が画面から消えてしまうだろ。プレイヤーへの配慮 罪の意識を軽減させるためだろうが、実際に人を殺して死体が消えるなんて絶対にありえない。そう考えると、今回の事件はまるでゲームのようだな……」

その話を聞いた瞬間、陸の全身に鳥肌が立った。

健太にしてみれば軽い冗談のつもりだったのだろうが、サフィの妄想を聞いていた陸には衝撃的な内容であった。

『サフィから見たら、リクはまさしくゲームキャラなの……』

そんなサフィの言葉が脳裏に浮かぶ。

この世界はシミュレーションシステムによって創造された架空現実。そこに住む者たちは全てゲームの中での存在。もしサフィの話が真実だとすれば、不可思議事件の被害者たちはガンシューティング

の敵キャラのようにこの世界から消えてしまった可能性が考えられる。その存在と共に、生きていたという事実さえ消されてしまったのではないだろうか。

だからこそ行方不明になった者は存在しない。身近に殺害された者がいたとしても、いなくなったことに誰も気づかない。

ばかな考えだとは思う。だが、もしかするとこの不思議事件こそ、サファイたち十二人のプレイヤーが参加しているリアルネットゲームなのでは

そこまで思考が到達したとき、陸はあることを思い出した。

「アヴァターになったら、最初から存在しなかったことに……」

サファイたち十二人のプレイヤーは惑星クラリオンアースに存在していない。アヴァターとは、プレイヤーの分身キャラクターになること。すなわち、アヴァターになった者もクラリオンアースには最初から存在しなかったことになる。

最初から存在していないのだから、たとえ殺されることになっても誰も気づかない。そして、ゲームキャラだから死体は跡形もなく消えてしまう。

そう、つまりこれは

「アヴァター同士の殺し合い……殺人ゲーム？」

その仮説に辿り着いた陸は、あまりのショックに顔が真っ青となった。

条件が揃いすぎている。不可思議事件の全てに説明がついてしまっただけ……。ゲーム中の敵を倒すことに躊躇うプレ

本当にそんな恐ろしいことがあるのだろうか。可能性はある。陸たちにとって死に直結する現実でも、サファイたちプレイヤーは単にゲームをしているだけ……。ゲーム中の敵を倒すことに躊躇うプレ

イヤーなどいないはずだ。

「おい、どうした。顔色が悪いぞ……」

そんな様子に気づいた健太が心配そうに声をかけてくる。陸は微笑みを浮かべ返すことすらできなかった

そのとき、陸たちの前に一人の女子生徒が現われた。大人っぽい雰囲気的美少女。その姿を確認した陸は、飛び上がるほど驚いてしまった。

「芹沢……陸くんですね。少し、お時間をいただけますか？」

美少女はにこやかに問いかける。彼女の名前は神代菜月。この白鳳学園高等部の生徒会長であった。

昼食を終えた健太は、校舎の屋上から自分のクラスへと戻る。そこに、なぜかご立腹な様子の薫が現れた。

「まあ、どこに行ってたの。せっかく三人でお昼を食べようと思ってたのに」

「三人じゃなく、陸と だろ？」

「はうあっ！」

おもわぬ反撃を喰らい、薫は胸を押さええて後退る。凶星だったのか、まるで弾丸を撃ち込まれたような動作である。

「わ、わたしと陸くんは幼馴染みなんだから、べつに深い意味とかはなくて」

慌てて言い訳をする薫だが、続く言葉に説得力はなかった。

「で、菱木くん。陸くんと一緒にじゃなかったの？」

「結局、陸の行方を聞くんだな白檀は……。まあ、陸なら生徒会長と」

そこまで言いかけて健太は思い止まった。伝えてしまうのは簡単だが、聞いてしまえば薫の心中は穏やかでなくなってしまう。午後の授業を平静に受けてもらうためにも、ここは黙っておいたほうが得策であろう。

「そうだな。オレが言えるのは一つだけ……」

「え？」

「ま、がんばれよ」

そう言って健太は薫の肩を叩く。

相手はあの生徒会長である。薫がどれほど陸に身近な存在だとしても、神代菜月が本気を出してしまえば逆転される可能性だってある。まさに、薫にとって菜月は最大のライバルと言えるだろう。

「えっ……。わたし、何かがんばるの？」

意味がわからず呆然と立ち尽くす薫……。結局、午後の授業中、薫はその意味をずっと考えることになってしまった。

いったい何がしたいのだろう。

神代菜月に声をかけられて残ったまでは良かったが、かれこれ五分ほど会話の無い状態が続いている。菜月はというと、転落防止の

金網に寄り添い、陸に背を向けるような姿勢で遠くの方を眺めていた。陸を完全に無視して、自分ひとりの世界に入り込んでいるかのように

「え〜っと、神代……先輩？ そろそろ授業が始まってしまっんですけど……」

チャイムが鳴ったにも拘わらず菜月は黙ったまま動こうとしない。痺れを切らせた陸が確認すると、菜月からは意外な答えが返ってきた。

「授業を受けることに……、何か意味があるのですか？」

生徒会長とは思えないセリフである。一瞬、陸は菜月が何を言っているのか理解できなかった。

陸の知る神代菜月という女性は成績優秀で学園一の優等生。そんな菜月が授業をさぼってまで行おうとしている話とは、それほどまでに大切な内容なのだろうか。

徒ならぬ雰囲気を感じた陸は、真剣な眼差しで菜月を見つめる。それに気づいた菜月は、ゆっくりとした動作で振り返り、真っ直ぐな視線を陸に向けた。

どきっ！ まことにもって不謹慎ではあるが、陸は菜月に見つめられてどきまぎしてしまふ。密かに憧れていた異性に見つめられ、冷静でいられるほど陸は大人ではない。もちろん菜月は、そんな陸の心のうちに気づくはずもなく、静かに　しっかりとした口調で問いかけた。

「芹沢くんは、この世界のことをどう思いますか？」

なんとも要領の得ない質問である。菜月がどんな意味を込めて口

にしたのかはわからない。しかし、陸の脳裏には、不覚にもサフィの語った惑星クラリオンアースの設定が浮かんでしまった。

「べ、別に、深く考えたことはありませんね。それが何か……」

嫌な予感がする。陸は直感的にそう思った。

まるで、何かを試されているような雰囲気。これ以上聞いてしまえば取り返しのつかないことになるのではないか……。そんな後悔をするのに、それほど時間は掛からなかった。

「わたしのアヴァターになりませんか？ この言葉を、芹沢くんは知っていますね」

「なっ！ 先輩がなぜそれを！」

「そんなに驚くことはありません。あなたと同じ わたしもこのメールを受け取っただけです」

そう言っつて、菜月はカード端末を起動させ、モニターを陸へと向けた。

『わたしのアヴァターになりませんか？』

一言一句、陸に届いた迷惑メールスパムと同じである。

メールが開かれているということは、菜月のところにもサフィのようなプレイヤーが現れたのかもしれない。そして、聞いてしまったのだろう。この世界、惑星クラリオンアースの真相を

「あらためてお聞きします……。あなたはこの世界のことをどう思いますか？」

「つまり……、神代先輩はこの世界がゲームの中だって信じているのですか？」

菜月からの答えは返ってこない。だが、不意に見せた菜月の哀しそうな表情に、陸はなんとなく察してしまった。

「では、言い方を変えましょう。この世界が本当にゲームだとするならば あなたは何をしますか？」

「何を……ですか？」

「世界がゲームなら何をやっても無駄なこと。授業を受けること勉強をすることだっただって意味は無い。どんなにがんばっても所詮はゲームの中。わたしたちは、リセットパネルを押すだけで簡単に消滅してしまうちっぽけな存在……」

その言葉からは、真実を知ってしまったからこその哀しみが伝わってくる。陸も、なるべく考えないようにしていた。この世界がゲームの中だとするならば、生きている意味は無いのではないかと

ここしばらく、陸は生きている実感を求めようとしていた。また、何も始められない自分に苛立ちを感じていた。将来に向けて そんな大それた想いではないが、何か行動を起こしたい。今の自分を変えてみたいと真剣に悩み始めていた。そこに現れたのが謎のクラッカー少女サファイアである。

サファイアは、この世界をプラネットメーカーというシミュレーションシステムによって創造された惑星クラリオンアースの中だという。シミュレーターの過程で誕生した架空世界。芹沢陸という個体もプログラムによって創られているらしい。

あなたはただのゲームキャラクター。あなたが生きていると感じているのは、プログラムによって錯覚させられているだけ。つまりは、どんなに生きている実感を求めようとしても無駄なこと。あなたは、人間ではないのだから

湧き上がる感情は漠然とした恐怖心。自分ではどうすることもできない現実に、ただ心と身体を震わすしかないのだろうか。混乱している陸の様子を、菜月はじっと観察する。そして、ゆっくりとした動作で校舎の下に広がるグラウンドを指差した。

「たとえば、あそこにいる生徒たち……」

「え？」

菜月の言葉に陸は我に返る。菜月の指差す先　体育の授業であろう、運動服姿の生徒たちがグラウンドを駆け回っていた。

あの生徒たちがどうしたのだろうか。陸は意味もわからずに菜月の顔を見つめる。すると、菜月の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「芹沢くん。あなたは、あの子たちを殺せますか？」

じつに感情の乏しい口調である。菜月は生徒たちの様子をジッと観察している。その鋭く冷めた視線に、陸は恐怖を感じてしまった。

「な、なにを言ってるんですか。そんなことできるわけ……」

「難しく考える必要はありません。あれはゲームのキャラクターであって人間ではない。殺しても、あなたが罪の意識を感じることはないわ……」

彼女は何を言っているのだろうか。あまりのことに陸の思考は固まってしまふ。しかし、その意味を理解したとき、陸の怒りは爆発した。

「ふざけるな！」

陸は、菜月の胸倉をつかんでねじ上げる。菜月は特に驚いた様子も無く、無抵抗のまま陸を見つめ返す。その態度が、陸をさらに苛立たせた。

「人間じゃないから殺してもかまわない？ 何が罪の意識を感じることはないだ！ あいつらは……オレたちはちゃんと生きているんだぞ！」

「そういった感情もプログラムによって創られたもの……」

「いいや違う！ たとえ架空な世界であつても、そこに住む者たちには心がある。仮にゲームだからといって、簡単に殺せるわけないだろっ！」

「大丈夫……。殺しても、死体は残らないから……」

その言葉に陸はゾツとする。死体無き殺人、目撃された白鳳学園の制服を着た女子生徒

「ま、まさか先輩が……不可思議事件の犯人……」
「……………」

否定も肯定もせず、菜月は無言で微笑みを浮かべている。その凍てつかせるような笑みは、陸の想像通りであることを物語っていた。

次の瞬間、菜月は胸倉にある陸の腕を掴む。少女とは いや、人間とは思えない力で、いとも簡単に陸の腕を引き離す。そのまま捻るように回転させて、陸の身体を床へと投げ飛ばした。

予期せぬ衝撃を喰らい、陸は意識が遠くなるのを感じる。

このまま気絶すれば、菜月に殺されてしまうのだろうか……。陸は、薄れゆく光景の中で、哀しそくに佇む菜月の姿を眺めていた。

豪快にぶつ飛んだ陸は、倒れたまま意識を失ってしまう。菜月は、そんな陸に近づき、表情を窺うようにしゃがみ込む。指先で陸の頬を軽く突き、完全に気絶しているのを確認してから 自らの頭を抱えて悶え始めた。

『菜月ちゃん……。あなたは、いったい何しているのかしら？』

どこからか呆れ口調の声が聞こえてくる。その声は菜月の胸元
正確には首に提げているペンダントから聞こえてきた。

「うう……。陸くに危ない人だと思われました」

『確かに……。彼を試すためだとはいえ、完全に殺人鬼のセリフだったもんね。彼、本気であなたに怯えていたわよ』

まるで犯罪者でも見るような視線を思い出し、菜月は深く頂垂れ
てしまう。仕方なかったこととはいえ、陸に嫌われるのは菜月の本
意ではなかった。

「優子さん！ 言ったじゃないですか、陸くんは絶対に犯人じゃな
いって！」

『だ〜か〜ら〜、わたしのことを優子って呼ばないの！ 何度も言
うようだけど、クラリオンアースの中では、クリスタル……。クリス
って呼びなさい』

「じゃあクリスさん……。これでわかってもらえたと思いますが、
芹沢陸くんは例の殺人事件の犯人ではありません」

『ああ〜、そんなこと最初から知っていたわよ』

「えっ……？」

『例の事件は、アヴァターもしくはその候補者が関係しているのは
確かだけど、彼が犯人じゃないことはこの十日間の観察でわかって
いたことだし〜』

「な、なら、どうして彼を試すようなことを……わたしにやらせたのですか？」

『え〜っと、おもしろそうだった から？』

菜月は、シヨックのあまり四つん這いになって落ち込む。記念すべき初めての接触であったというのに、いったい何のためにあのような真似をしなければならなかったのだろうか。

「クリスさん……。やはりあなたのアヴァターを辞めさせてもらっても構いませんか？」

『あら、そんなこと言っちゃっていいのかな。今後、殺された人がいたとしても、管理者のアヴァターを辞めてしまったら助けることなんてできないわよ。』

「そうです！ 今朝の彼女はどうになりましたか？」

『彼女なら心配いらないわ。体組織の再生は完了しているし、殺害時の記憶消去も完璧。今はもう普通の生活に戻っているはずだから』

それを聞いて、菜月は安心したようにほっと息を吐く。油断して朝刊配達の青年に姿を目撃されてしまったが、殺人鬼によって殺害された女性は無事に助けられたようだ。

「そろそろ、犯人も気づく頃ではないでしょうか？」

『そうかな？ 相手はクラリオンアースの設定を知った上で、人殺しを楽しんでいる。死体が消えてしまっている状況も、単にゲーム上の仕様だと思っっているんじゃないかしら。死体が消えるなんて絶対にあるはずなのに……』

クリスは、無慈悲な殺人鬼に対して怒りをあらわにする。自分の開発したシステム上の設定を理由に人殺しを繰り返すなど絶対に許すことはできない。

そう、クリスの本当の名前は如月優子。擬似惑星を創造するためのシステム プラネットメーカーを開発した科学者である。そして、例の迷惑メールスパムをばらまいて、アヴァター候補者とプレイヤーを引き合わせている張本人……。陸たちにしてみれば、諸悪の根源のような人物であった。

「とにかく、近いうちに決着をつける必要があるから、菜月ちゃんも覚悟しておいてね」

「一介の女子高生に、凶悪な殺人鬼の相手をさせるつもりなんですか？」

「あははっ。ジュエルナイト 宝石騎士の力を手に入れたあなたに勝てる人間なんてこのクラリオンアースには存在しないって。まあ、相手もアヴァターになっているのなら話は別だけど……」

「それって、かなり可能性ありませんか？」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。いざとなったらアドミニストレータ 管理者権限を使って、生きていることを後悔させてあげるんだから……。うふふっ」

「優子さん……。恐いですよ」

「だからクリスって呼びなさい！」

なにやら複雑な状況のようだが、不可思議事件の犯人は菜月ではなさそうだ。むしろ、管理者である優子と協力して、犯人を捕らえようとしているようである。さらに言ってしまうえば、殺された被害者を復活させているのも菜月であった。

方法はよくわからないが、菜月は人ならざる力によって被害者を助けている。傷を完全に直し、殺人鬼に襲われた記憶も修正している。そのため被害者は、自分が殺されたという認識はない。こういった複雑な事情が絡み合って、死体の無い殺戮現場が出来上がったというわけだ。

たとえクラリオンアースの中だといえ死体が消えてしまうこと

はありえない。陸の推理した内容はまったく的外れだといえた。いや……、一つだけ正しいことがある。この不可思議事件に、アバターが関わっていることだ。

『それにしても陸くんはいろんな意味で男前だね。オレたちはちゃんと生きている。そこに住む者たちには心がある！ なぐんてなかなか言えないよ。クラリオンアースの設定、プレイヤーからちゃんと聞いているのに……』

「そうですね。あれだけ精神的に追い詰めたら、それこそ自暴自棄となつて新たな殺人鬼になる可能性もありました。でも陸くんはそれを見事に乗り越えた。とても立派です」

『そこに、菜月ちゃんは惹かれています……』

「なつ！ わ、わたし、彼のことを何とも思っていないません！」

『ふむ……。お姉さんの小さい頃、ツンデレという言葉が一部の人たちに大流行して』

「優子さん、いい加減にしてください。それと……、これ以上彼を巻き込まないでください！」

『うふつ、彼だつて』

この人はダメだ……。菜月は真つ赤な顔をしながら頂垂れる。

じつのところ神代菜月は、一学年下の芹沢陸のことをずっと前から意識していた。わけではない。こうなってしまった原因は、間違いなく優子にあった。

十日前、菜月は同じ学園の生徒によつてアバター選定メールが開かれたと優子から知らされる。顔も名前も知らなかった後輩の少年。最初の印象は、このような馬鹿げたゲームに巻き込まれてかわいそうに……であった。

その日から陸を監視する日々が始まった。

直接的な接触は避け、陰からそつと様子を窺う。最初のうちは何

事もなく監視を続けていたのだが、三日を過ぎたころから優子による執拗なからかいが始まった。

監視対象であることをわかつているはずなのに、陸を見つめる菜月は恋する乙女であるとか、偶然を装って廊下でぶつかれたとか、手作りお弁当を渡せばいちころよ などなど。

引つ切り無しにからかわれるものだから、何が自分の気持ちなのかわからなくなってしまふ。そう、まるで洗脳にでもあったかのように、菜月は陸のことをなんとなく意識し始めるようになっていた。だからといって、陸をそういう対象で見たことは一度もない。あくまでも菜月は、管理者クリスタルのアヴァターとして芹沢陸に接するだけであつた。

『まあ冗談はこれまでにして。彼、芹沢陸くんは、ジュエルナイト宝石騎士の神アヴァター乃化身になる資質を充分に備えている。サファイアの神アヴァター乃化身は彼で決まりね』

すると、陸の胸ポケットからカード端末が飛び出し、ふわふわと宙に浮かんだ。

「ちょ、ちょっと待ってください。アヴァター契約は当人同士の合意が必要です。たとえゲームマスターの優子さんでも……」

『大丈夫、これは仮契約だから。それに、これ以上待たせちゃうと、サファイがかわいそうでしょ』

「って、優子さん！」

カード端末のモニターには複雑な記号の羅列が現れ、超速で上へとスクロールする。どうやら、パーソナルカードの情報が書き換えられているようだ。書き終わった瞬間、カード端末は眩い光に包まれる。そして、光の球体となった端末は複雑に形を変えながら二つに分裂……。一つはデータ送受信のデバイスカード、もう一つは

全てのパーソナル情報を記録したペンダントとなった。

菜月の提げているのと同じ形をしたペンダント……。菜月が虹色に輝くクリスタルに対し、陸のペンダントは深い青色をしたサファリアである。変化の終えたカードとペンダントは、何事もなかったかのように陸の胸ポケットへと戻った。

『菜月ちゃんのペンダントとおそろいだね』

優子の言葉に、菜月はおもわず頬を赤くする。このペンダントはおそろいとか、そういったものではない。宝石の形をしたパーソナル端末……。単に、ジュエルナイト 宝石騎士の神乃化身であることを証明するものなのだから。

『さてと、そろそろサファイが仮契約に気づいてアクセスしてくるでしょうから、わたしたちはお暇しましょうか？』

「えっ、陸さんに説明は無し ですか？」

『菜月ちゃんが陸くんともっとお近づきになりたいのはわかる……。でも、管理者であるあなたが事細かく説明していたらあまり意味はないでしょ。自分たちで謎を解き、それを楽しむ。これ、ゲームなんだから』

「優……いえ、クリスさん。本当は、説明するのが面倒なだけなのでは？」

『……………』

その問いかけに、答えが戻ってくることはなかった。

大きなため息を吐き頂垂れる菜月……。一度だけ気絶している陸に視線を向け、名残惜しそうな表情で屋上から立ち去って行った。

第3話 なんだかんだで仮契約

意識を取り戻した陸は、大の字に寝転んだまま空を眺めていた。陸を投げ飛ばした菜月は、いつの間にか姿を消している。どうやら菜月に殺されることはなかったようだ。

全身がもの凄く痛い……。起き上がるうとしてもなかなか思い通りにはいかない。おそらく、普段は使わない筋肉などに負荷がかかったのだろう。

それにしても、あの神代菜月が不可思議事件の犯人であったとは驚きである……。まあ、実際のところ犯人ではないのだが、あのよくなやり取りがあつては、陸が勘違いするのも無理はなかった。

そのとき、カード端末に通信を知らせる反応があつた。授業をサボつたことで薫から確認の通信が入つたのだろうか……。陸は胸ポケットに手を伸ばし、カード端末を取り出そうとする。その瞬間、カード端末に触れていないにも関わらず、目の前の空間に半透明のモニターが浮かび上がった。

『リク〜。お久しぶり〜』

突然の出来事に陸は驚いてしまう……。モニターに映し出されたのは、十日前に陸のメインシステムへ不正侵入してきたお騒がせ少女 サファイであった。

『嬉しいよ〜、リクの方から仮契約してくれるなんて〜』

サファイは、感激のあまり瞳に涙を浮かべている。

『じつはね〜、あれから何人かのアヴァター候補とお話したんだけど、どうも違つていうか 気持ちがあわなくてね。やっぱりも

う一度リクとお話してみたいな〜って思ってたところなの。でも、迷惑がかかるかな〜って思ってたなかなか通信もできなくなってる……。でも、気づいたらリクとの仮契約がされたって通知が来ていてね〜」
「ちよつと待ってえーい！」

痛みを無視するかのように、陸は強引に上半身を起こす。サファイの映るモニターは、身体の動きに合わせて目の前から離れない。

『リ、リク？』

「相変わらずつつこみどころ満載だが 何なんだこれは！」

『え〜つと……、何のこと〜？』

「カード端末触ってないのに、どうして目の前にモニターがあつて通信できてるんだよ！」

『そんなの、サファイが知るわけないじゃない……』

じつに、ごもつともな意見である。

ちなみにカード端末には金属端子が付いており、そこに親指を当てることで起動するようになってる。入力などの操作は必要なく、使用者のイメージによって全ての機能が利用できる。もちろん、金属端子を触ってもいないのにコミュニケーションツールが立ち上がるはずはない。しかも、何のデバイスも無い状態で空中にモニターが出現するなど、最新の科学技術を使っても不可能な気がした。

『あ、もしかして、この前発表された第18世代の情報端末じゃないかな〜？ ほら、優子さんが開発したジュエルタイプの情報端末。アヴァターの仮契約をしたことで提供されたんじゃない？』

「ジュエルタイプ……これか！」

いつのまに入れられていたのか、陸の胸ポケットにはデバイスカードの他にサファイアのペンダントが入っていた。ロイヤルブルー

色のいかにも高そうな宝石で、後に知ったのだが約20ctの天然非加熱 純金が5kgほど買える値段であるらしい。

おそらく陸が気絶している間に、菜月によって入れられたものだろう。しかし、菜月は何のつもりでこのようなペンダントを残していったのか。殺されていてもおかしくなかったはずなのに……。

『ペンダントを身に着けているだけで全ての端末機能が使えて、現行型のシステムを使うときには、そっちのデータ送受信用のデバイスカードをスロットへ差し込むみだだよ』

「ふむ……。どういう原理なのかわからないが、確かにカード端末へ入っていたパーソナルデータはこっちに移っているみたいだな」

見た目はそれほど変わりないが、カード内にはまったく情報が入っていない。サフィの言うように、ペンダント自体が情報端末となっているようだ。

『いいな。それって、まだ市場にも出回っていない次世代情報端末だよ。アヴアターになったら、そんなの貰えちゃうんだ』

「いや、だから誰がアヴアターだって？」

『あ、あれ？ リク、サフィと仮契約してくれたんだよね？』

「仮契約？ 何のことだ？」

話の食い違い……。お互いの状況説明のため、軽く三十分は必要となった。

ひとことで例えるなら『厄日』であろう。

どうやら、知らないうちにサフィとアヴアターの仮契約がされていたらしい。これも菜月の仕業なのだろうか。とにかく、菜月とはもう一度会って話をする必要がある。非常に危険な行為であるとい

えるのだが

仮契約の方は、本契約へ移行しなければサフィのアヴァターにはならないらしい。

惑星クラリオンアースから陸の存在が消えることもなく、単にサフィとのアヴァター契約において優先権が発生するだけのようである。つまり、仮契約が結ばれている限り、他のプレイヤーは陸にコネクトできないのだという。

そのため、陸はサフィとの仮契約破棄を保留にしてある。これ以上、他のプレイヤーが干渉してくるのはなるべく避けておきたいからだ。一つ問題があるとすれば、サフィからの通信回線が陸の意志では遮断出来なくなってしまうたことだろうか

また、サフィの参加しようとしているリアルネットゲームは、陸の考えていたようなアヴァター同士の殺人ゲームではないらしい。よくよく考えてみれば、そのようなゲームにサフィのような子どもが参加できるはずもなかった。

『リク。そのお姉さん、リクの彼女？』

『やかましい……』

喋りかけてくる薫へサフィは過剰な反応を見せる。そのようなことに興味津々なお年頃なのだろう。

次世代情報端末については、モニターが空中に浮かんでいるという認識は間違いだったようで、どうやら網膜に直接表示されているらしい。たとえ瞳を瞑ってもモニターが消えることはなく、陸以外の者に見えることはない。サフィの声はペンダントから聞こえなくすることもでき、陸の鼓膜を直接震わせることもできる。また、陸の方も喋ることなく、考えるだけでサフィに意志が伝わるようであった。

なんと高機能てたらしいな情報端末である。

ペンダントをしなければ最低限のプライバシーは護られるようだ

が、今の時代、パーソナルデータを持ち歩かないと普通の生活はできない。パーソナルデータは個人を証明するものであり、それが無いと学園などにも出入りすることはできなかった。

すなわち、日常を過ごすためにはペンダントをしないといけない。ペンダントを掲げていると、常時サファイアからの通信が入ることになる。そして、アヴァターの仮契約をした陸には、サファイアからの通信を拒否する権利がないわけだ。

「陸くん、聞いている？ やっぱ授業をサボったりするのはいけないことだと思っの！」

「いや、別にサボりたかったわけじゃなくって」

普段は遠慮勝ちな薫であったが、陸が無茶をしたときなどは途端に強気となる。こうなってしまうえば、薫の機嫌が修まるのを待つしかない。珍しく別行動をしている健太がいてくれれば、この状況をなんとかしてくれたかもしれない。しかし、それも無い物ねだり……。陸は、諦めたようにため息を吐いた。

「じゃあ……、どんな理由があつて授業に出なかつたのよ？」

「そ、それは　だな」

言えない。不可思議事件の犯人と思われる菜月に投げ飛ばされて、情けなくも気絶していたとは絶対に言えない。陸は話題を変えようと必死に考え、一つの提案があつたことを思い出した。

「陸くん！」

「おい薫……。今日からオレが家まで送っていくから、勝手に一人で帰るなよ」

「ほ、ほへっ！」

『わっ、わあ〜！　だいた〜ん』

『うるさい、黙れ!』
「りりり、陸くん!」

突然の……しかも予想していなかったような提案に、薫は顔を真っ赤にして慌てまくる。朴念仁の陸がそのようなことを言い出すとは、まさに青天の霹靂であった。

「ほら、不可思議事件のこともあるわけだし、なるべく一人にならない方がいい。おまえも一応、女の子だからな」

戯けるように言ってはみるが、不意打ちを喰らった薫はそれどころではなかった。なにやら激しく表情を変えながら照れている。

『ねえ、リク。不可思議事件って 何?』

『後で説明してやるよ……』

金緑石を中心に発生している不可思議事件……。神代菜月という容疑者が判明したものの決定的な証拠は無く、いまだ解決する兆しはみられなかった。

『さて、どうするか』

コンビニに入った男は、挨拶する店員の声を聞き流し、雑誌コーナーへと向かう。幾つかの雑誌を適当にめくり、やや粗雑な扱いで本棚へ戻す。コンビニ側からしてみればじつに嫌な客である。

目的もなく商品を見回し、清涼菓子を一つ手に取りレジへと向かう。カウンターに商品を置き、男は不機嫌そうな表情で視線を外へ向けた。

「いらつしゃいませ」

店員が商品を手に取り、レジに代金を読み込ませます。支払いのためにデバイスカードを出したとき、男は初めて店員の顔を見た。

『なっ……、この女！』

予想外の事態　男は愕然と立ち尽くす。そんな様子到店員は小首を傾げる。

「どうかなさいましたか？」

そんな問いかけにも男は答えようとしない。ジッと店員を見つめたまま、微動だにしなかった。

不意に、男は身を翻して出入り口へと向かう。店員に預けた商品を受け取りもせずに……。

突然の奇行に店員は驚いてしまう。しかし、並んでいた客を待たせるわけにもいかず、未会計の清涼菓子は脇に置いてレジ操作をはじめた。

コンビニを出た男は、振り返るようにして店内を窺う。会計を行っている店員を睨み付けるようにして呟いた。

「どういうことだ……。あの女は　オレが殺したはず……」

なんとも物騒なことを呟く男である。殺したというなら、どうして生きているのだろうか。もちろん、そんなことを考えても答えが出るはずはない。男はこれからのことを考えて不気味に微笑む。生きていたというのなら、もう一度殺せば済むことだ。

そのとき、男の視界に一人の女の子が映った。学校帰りであろう

か、同世代の少年と一緒に歩いている。その楽しそうな笑顔を見て、男はあることを思い立った。

「そうだ、一度殺した女のことなんてどうでもいい。それよりも、あの可愛い女の子……。あの娘はいいってどんな声で鳴いてくれるかな？」

その言動は明らかに普通ではない。語った内容が正しければ、男は間違いなく殺人鬼

男が見つめる先には、陸と並んで歩く白檀薫の姿があった。

道を挟んで反対側から、コンビニの店内を窺う女子学生がいた。近くの私立白鳳学園に通っている神代菜月である。菜月はレジに立つ女性店員の元気な姿を見てほっと息を吐く。

「もう、大丈夫のようですね……」

『当たり前でしょ。いったい誰の力を使って治療したと思ってるのよ』

「いえ、そういうことを言ってるのでは……」

優子の呟きに菜月はおもわず苦笑してしまう。コンビニで働く女性店員。彼女は昨晚殺された不可思議事件の被害者であった。

菜月が駆けつけたとき、彼女は既に絶命していた。直ちに蘇生を試みる菜月

元々、プラネットメーカーというシステムには、時空力と呼ばれる時間や空間を操る力が使われている。時空力によって、惑星の誕生から終焉まで何億何十億年もかかるような出来事を、最短一年ほどでシミュレートすることができた。

サファイたちの文明に追いついた惑星クラリオンアースのシミュレ

「シヨン速度は現実の時間に合わせられている。しかし、シミュレーション速度を上げてしまえば、陸や菜月の命など一瞬で終わってしまうことだろう。人の一生など惑星や恒星の寿命に比べたら無いに等しいからだ。」

「そんな特別な時空力を使うことによって、不可思議事件の被害者は助けられていた。プラネットメーカーの開発者である如月優子クリスタルの神乃化身だからこそ可能な裏技である。」

「彼女の時間だけを逆行させ、身体に受けたダメージを回復……。」

「まあ、殺害時の記憶だけは書き換えが必要だったけど、いわゆるUFOのアブダクションってやつ？」

「人のことを宇宙人エイリアンみたいに言わないでください……。」

「あら、クラリオンアースで目撃されるUFOって、文明調査のためにわたしが飛ばしてるんだけど……。知らなかった？」

「……………」

それが本当なら、UFOを飛ばしている優子アヴァターの手先である菜月はまぎれもなく宇宙人エイリアン……。菜月はおもわず項垂れてしまう。せめて種類がグレイタイプでないことを祈るばかりであった。

「そんなことより、殺された人キャラを復活させるなんて離れ業、そう何度也使えるわけじゃないわよ。気づいているとは思っけど、あなたのアヴァターとしての力は格段に落ちている……。」

「はい、わかっています。」

「元々あなたは管理者として選ばれたアヴァターであってプレイヤーの分身ではない。もちろん、管理者だけあって他の十二人と比べても能力的には優れている。でも、あなたはその力を消費することで、殺された被害者たちを復活させてきた。このまま続けるとアヴァターとしての能力だけではなく、あなたの命そのものが消えてしまうことになりかねない……。」

「だからこそ、クリスさんは殺人鬼との対決を急いでくれているのですよね」

「なっ、なに言ってるのよ！ わたしはただ、このクラリオンアース内で犯罪行為をしているアヴァターに、自分がやっていることを思い知らせようと！」

「はいはい、わかっていますよ」

「って、なによその……この人本当は照れているだけなんだくみたいな反応は！」

「いいから、いいから」

「だから、話を聞けー！ー！」

普段はからかわれてばかりの菜月だが、こういった好機^{チャンス}は見逃さない。菜月は、ここぞとばかりに優子をからかい続けた。

そのとき、何かを感じ取ったのか、突然菜月の顔色が変わった。辺りを見回しながら、必死にその違和感を探ろうとしている。

「フィールドが展開された……。まさか、こんな時間から殺しを行おうっていつの？」

「性格破綻者に常識は通用しないでしょ。それに、フィールドの中に入ってしまったら、外界とは完全に遮断される。中で何が行われようとも、誰も気づきはしない……！」

急いで路地裏へと駆け込む菜月。反対側から姿を現したとき、その額には七色に輝くクリスタルが付いていた。

「菜月ちゃん。探すべきは異次元へと繋がるフィールドの入口。今度こそ、決着を付けるわよ！」

「了解です。優子さん！」

「って、わたしのことはクリスと呼びなさい！」

不意に身体を沈めた菜月は、その反動を利用して大きくジャンプする。軽々と民家の屋根まで飛び上がり、違和感を覚えた方角へ超速で駆けて行った。

ここはいつたいどこなんだ

見渡す限り岩盤が広がっている。先程まで街中を歩いていたというのに……どういふことなのだろう。まるで、異世界にでも迷い込んでしまったかのようである。

「り、陸くん……。なにが起こったのかな？」

「大丈夫、心配するな……」

薫は不安そうな表情で陸の身体にしがみつく。無理もない。その手は微かに震えていた。

『おいサファイ、これはお前の仕業なのか？』

『ちよっ、サファイこんなの知らないよ！』

『なら、いつたい……』

考えられる可能性は二つある。

一つは、サファイたち十二人のプレイヤーによるリアルネットゲームが開始された可能性……。仮契約とはいえ陸はサファイのアバターになった。サファイの知らないうちに、ゲームが始まったのではないだろうか。

そしてもう一つは、死体無き殺人 不可思議事件に巻き込まれた可能性である。

事件の真相に気づいた陸を、菜月が殺そうとしていたとしてもおかしくはない。まあ、菜月が犯人であるというのはまったくの勘違いなのだが……。

「と、とにかく薫。オレの傍から離れるなよ」
「う、うん……」

決してそんな場合ではなかったが、陸の袖をギュツと掴む薫の頬は少しだけ赤くなっていた。

がさつ……。突然、人の気配を感じた陸は、薫を庇うように前へ立つ。一瞬、菜月が現れたのではないかと身構えてしまう。しかし、どうやらそうではなさそうであった。

「よ、良かった。人がいた……」

現れたのは二十歳ほどの青年である。青年は、へろへろになりながらも陸たち近づき、乱れた呼吸を整えた。

「はあ、はあ、はあ。え〜っと……。きみたち、水、持ってないかな？」

笑顔がやたら爽やかな青年は、呆然としている陸たちに情けない様子で問いかけた。

よほど喉が渴いていたのか、青年は渡された飲料水を一気に飲み干す。そして、やっと落ち着きを取り戻し、苦笑しながら陸たちへ視線を向けた。

「いや〜、生き返った。本当にありがとう。で〜、きみたちは高校生かい？」

この異様な状況で質問する内容ではないように思われたが、否定する必要もなかったため陸はこくりと頷く。もちろん、相手の正体かわからないため警戒は怠っていない。そんな陸の様子に気づき、青年は困ったような表情をした。

「あゝ、ボクは藤永哲也^{ふしながてつや}。きみたちと同じように、この変な世界に迷い込んだ大学生だよ」

「迷い込んだって……、いったいここはどこ　　なんですか？」

藤永の動きに注意しながらも、陸はその話に耳を傾ける。自分たちが今どんな状況に置かれているのか、情報は少しでも多い方が良からい。

「それはボクにもわからない……。でも、この場所をきみたちは見たことがあるかい？　どこだって質問するくらいだから当然無いとは思いつけど、おそらくこの場所はボクたちの知っている世界ではない。つまり、不可思議……なんだよ」

「ふ、不可思議　　」

途端に薫の顔色が真っ青となる。不可思議と聞いて真っ先に思い浮かべるのは、例の死体無き殺人事件のことであろう。ある意味予想通りであると言えたが、どうやら本当に不可思議事件に巻き込まれてしまったようだ。

『せ、先輩の仕業なのか……』
『リク』

『だとしたら、先輩の狙いは正体に気づいてしまったオレ……。このまま一緒にいたら薫まで危ない。それなら薫をこの人に任せて、オレが先輩を引き付けければ　　』

『ちよっとリク、聞いてよー！』

『だああああつ、うるさいなあ！ 考え事しているんだから少しぐらい静かに……』

『あのフジナガって人……、気をつけた方がいいかもよ。カオリのこと、すっごい視線で見てたもん』

『な、なに？』

サフィの忠告に陸はハツとする。確かに、名前しかわからない正体不明な男に薫を預けるわけにはいかない。このような状況であれば尚更なことである。薫は不安そうな表情で陸の傍から離れようとしない。そんな薫を一人にすることはできなかった。

『もしかしたらあのフジナガって人、カオリのこと狙っているのかもしれない……』

『そ、それは、ヤツが危険人物ってことか？』

『危険人物……っていうか、カオリに一目惚れしちゃったんだよ。フジナガさん』

「……。さて、いつまでもここにいるわけにはいかない。どこか身を隠せる所でも探して、しばらく様子をみてみよう……」
『ひどっ、リクひどっ！』

緊張感の無いサフィは置いといて、陸は場所の移動を提案する。

このような目立つ場所では、直ぐにでも菜月に見つけられてしまう。そのことは陸たちの死を意味していた。

「ボクが調べた限りこの世界には全く人がいない。だから、身を隠すとすれば　あの岩山かな？」

そう言っつて藤永は聳え立つ岩山を指差す。確かにあの岩山なら隠れるのにちょうど良いかもしれない。さらに言えば、菜月が近づいてきたとしても直ぐに気づけるはずだ。

陸は大きく頷き、薫の手を引いて歩き出す。そんな様子を見て、藤永は微笑みながら陸たちの後を追った。

現実空間とは違う異次元のことをフィールド またはバトルフィールドという。

主に現実空間へ影響を及ぼさないために展開されるもので、戦いに利用されることが多い。また、術者を倒さなければ脱出することができず、決戦の場として展開されたりもする。

そんなフィールドを展開できる者は、惑星クラリアンアースには存在していない。故に、フィールドを展開する不可思議事件の殺人鬼は、アヴァター候補でしか有り得なかった。

「見つけた！ フィールドの入口！」

『菜月ちゃん、気をつけて……。犯人はおそらくアヴァターの仮契約をしている。それに、相手はあなたを殺すつもりでくる。油断していたら返り討ちに合うかもよ』

「はい！ 殺しなんて 絶対に止めてみせます！」

人気のあまり無い路地裏に浮かぶ小さな光の塊。菜月が触れた瞬間、眩い光に包まれて、目の前の光景が一変する。大きな岩山の聳えるフィールド世界。今まさに、殺人鬼による不可思議事件が発生しようとしていた。

「この先に岩盤の裂け目があるんだ。そこなら安全だと思うよ」

藤永を先頭に、陸と薫は岩盤の裂け目へと入って行く。細長い通路を抜けて奥まで辿り着くと、そこには隠れるのに十分なスペースがあった。

確かにここなら安全かもしれない。たとえ菜月が襲ってきたとしても、スペースを利用して回り込み、通路から逃げ出すことができるだろう。しかし、いくつか気になる点もあった。

岩壁や地面の所々に赤黒い染みのようなものが残っている。まるで何かの血が染みついた跡のようである。そして、何ともいえない嫌な臭い……。陸はふと悪い予感を覚えてしまった。じつは、この場所こそが不可思議事件の殺戮現場ではないだろうか。

何も無い世界では身を隠す場所も限られてくる。また、こんな世界に迷い込んだ者の考えることは似通っており、今の陸たちと同じようにまずは安全と思われる場所へと逃げ込むはずだ。

それこそが殺人鬼の思惑ではないだろうか……。無闇に逃げ回られるより、獲物を一箇所に集められた方が効率的に狩ることができる。この状況は、まるで罠にかかった獲物のようではないか

「藤永さん、急いでここから逃げたほうが良いかもしれない！」

すると、振り返った藤永が小首を傾げながら近づいてくる。

「おそらく犯人は、この空間のことを知り尽くしている。オレたちがどこへ逃げるのかも簡単に予想できるはず。それなら、こんな逃げ場の無いところじゃなくて、もっと広い……」

『リク、危ないっ！』

とすつ……。なにやら鈍い音が聞こえ、胸に激しい痛みが走る。

目の前にはにやついた顔の藤永がいて、陸の胸に向けて腕を伸ばしている。その手にはサバイバルナイフが握られており、刃先は陸の右胸に深く突き刺さっていた。

「じぶじぶっ！」

陸は咳き込むように口から大量の血を吐き出す。傷ついた肺は焼けるように熱く、呼吸すらままならない。なぜこのような状態になったのか　陸の思考は完全に停止してしまった。

サバイバルナイフを強引に引き抜くと、傷口からは血しぶきが吹き出る。返り血によって真っ赤に染まった藤永は、人が変わったかのように大きな声で笑い始めた。

「おいおい、真っ赤だな」

『う、うそ……』

「いやああああー！ー！」

目の前で起こった最悪の出来事に薫は悲鳴を上げる。崩れ落ちようとした陸の身体を支えながら、薫は必死になって傷口を手で押さえる。しかし、溢れ出る血液を食い止めることはできなかった。

「陸くん、陸くん！」

薫は陸の身体を引きずるようにして藤永の脅威から逃れようとする。だが、激痛によって硬直した陸の身体は、女子の力によってどうこうできるものではなかった。

「ほお……。普通、彼氏を捨ててでも逃げるよな」

刃先をチラつかせながら、藤永は不機嫌そうに呟く。次の瞬間、サバイバルナイフが陸の右肩に突き刺さる。恐怖で悲鳴を上げる薫の反応に、藤永は満足気に微笑んだ。

「ふ、ふざけるな……よ」

気を失いそうな激痛に耐えながらも、陸は藤永を睨みつける。そんな態度が癪に障ったのか、藤永は手にしたナイフの刃先を動かす。その度に陸の意識は飛びそうになった。

「はあはあ、薫に手を出し……たら、てめえをぶつ殺す……」
「へえ、こんな状態で、いったいどうやってぶつ殺すっていうのかな……」

突然、藤永は薫の腕を掴んで陸から引き離す。凄まじい勢いの蹴りを陸の腹部に喰らわせ、ニヤニヤした表情で薫を羽交い締めにする。サバイバルナイフを薫の首筋に当て、平伏している陸の視線を確認しながら静かに呟いた。

「気が変わった……。邪魔者を始末してからと思っていたが、先にこの女を殺す」

「いや、いやあああ……!」
「おまえはこの女が引き裂かれる瞬間を、そこでじっくり見ているんだな……」

藤永は、締め付ける力を弱めて、わざと薫を逃がす。必死に逃げる薫を追い詰めるように、じりじりと近づいていった。

『かお……り……』

もはや意識が朦朧としている陸に薫を助ける術はない。さきほどまでの激痛も薄れ、徐々に身体が冷たくなっていくのを感じる。身体中の血液が少なくなっているのだろう。

死が近づいている感覚……。これは決して錯覚ではない。以前、サフィに陸はゲームの中のキャラクターであると知らされたが、そのことは絶対に間違いであると確信できた。

『リク……』

『さ、サファイ……か？』

『このままじゃリクが死んでしまう……。だからお願い……。真剣に聞いて』

『なに……を……』

『サファイの わたしのアヴァターになりませんか？』

それは、これからの運命を決定付ける選択である。陸の選択により全てが決まってしまう。そして、陸がそれを選んだとき クラリオンアースの物語は、更に加速しながら突き進むことになるのだ
った。

第4話 全てを失った少年

フィールド世界に降り立った菜月は、瞬時に人の気配を感じ取る。岩山の方向に生命反応が三つあり、その一つが今にも消えそうな状態だ。菜月は悔しそうに歯を食いしばりながら、気配に向けて走り出す。新たな不可思議事件の犠牲者が出てしまったに違いない。

『菜月ちゃん落ち着きなさい……。そんなに怒気を放っていたら相手に気づかれてしまう。まずは、隠れて様子を窺い、相手の戦力を量ることが大切よ』

言われなくてもわかっている。しかし、今にも死にかけている人がいるというのに落ち着いてはられない。理解はできるが納得できない。菜月はそんな感情を制御できるほど大人ではなかった。

細い通路を駆け抜けて奥へと辿り着く。

優子の忠告に従って、菜月は近くの岩陰から現場の様子を確認する。いかにも危ない感じの青年が女の子を追い詰めていた。手にはサバイバルナイフを持ち、全身は返り血で赤く染まっている。間違いないく殺人事件の犯人であろう。

早くなんとかしなければあの女の子も殺されてしまう。菜月は岩陰から飛び出そうと身構える。そのとき、近くで何か動く気配を感じた。視線を向けてみると、そこには一人の少年が倒れていた。

流れ出る血液の量から考えても致命傷を受けているのは間違いない。もはや虫の息である。数分後には少年の生命活動が完全に停止してしまっただろう。だが、尽きかけている命に気をとられていたら新たな犠牲者が増えてしまう。管理者の能力を使えば、心肺停止となっても二十分以内であれば完全に蘇生することができる。それなら、まずは殺されようとしている女の子を助けることが先決だ。

菜月がそんなことを考えていると、少年は腕を伸ばしながら起き

上がろうとする。瀕死の状態で動こうとするなど、死までの時間を短くするだけである。できれば犯人との決着がつくまで大人しくしてほしい。そんな菜月の願いとは裏腹に少年はゆっくりと顔を上げた。

「う、うそ……」

それが誰であるのかを確認して、菜月はショックのあまり頭の中が真っ白となる。

引き裂かれ……死にかけている少年は、ここ十日間、菜月が陰ながら監視していた芹沢陸であったからだ。

「どうして……、陸くん？」

『待ちなさい菜月！』

おもわず駆け寄ろうとする菜月に、優子が心の中で一喝する。ここで騒ぎを起こせば犯人に気づかれてしまう。いや、この際、殺人鬼のことなどどうでも良い。優子の狙いは、全く別なところにあったからだ。

『な、なぜ止めるのですか優子さん！ このままじゃ陸くんが陸くんが死んでしまう！』

『大丈夫……。彼はあなたが何もしなくても助かる。あと、あの女の子を助けるのも禁止だから』

『え……？』

いったい何を言っているのだろう。優子は、陸や殺されそうになっている女の子を見殺しにしろとでもいうのだろうか。しかし、菜月は助けたいという気持ちを押し殺す。菜月がアヴァターである以上、プレイヤーの命令は絶対だからだ。

わたしのアヴアターになりませんか？ 再び出てきたその言葉は
瀕死の陸を驚かせる。

『ば、ばかやろう……。そんなこと、言っている場合じゃ……。ねえ』
『だってアヴアターにならないと、リク 死んじゃうよ！』
『ははっ……。人間、そう簡単に死なないんだよ……。』

とは言うものの、直ちに治療を始めないと手遅れになってしまう。
だが、わけのわからない空間にいるのだから助けを求めることも叶
わない。瀕死の陸が助かる唯一の方法。それがサフィのアヴアター
になることだというのだろうか

「げげふっ」
『り、リク！』

激しく咳き込んだ陸は大量の血を吐き出す。そのまま力を無くし
たように地面へと崩れ落ちた。

何も見えず何も聞こえない……。すでに五感が失われつつあった。
そんな中で、サフィの声だけが頭の中に響く。

『リク、しっかりして！ このままじゃカオリも殺されちゃうんだ
よ！』
『か……。かおり……。？』

その瞬間、殺人鬼が薫を追い詰めている光景が脳裏に浮かんだ。
まるでモニター越しに映画でも見ているような感覚……。薫は泣
きながら必死に何かを叫んでいる。その声までは聞こえない。しか
し、間違いなく陸の名を叫んでいることだろう。

『ち、ちきしょう……』

薫が助けを求めているというのに何も出来ない……。陸は不甲斐無い自分に苛立ちを覚える。

まだ死ねない、死んでなるものか。薫を助けることが出来るのはこの空間で自分しかない。薫を泣かしたあいつを絶対に打ん殴つてやる。瀕死の状態だった陸はなんとか気持ちを持ち直す。その瞬間、身体感覚が戻ってきた。

「い、痛え……」

再び感じ始める激痛に陸は表情をしかめる。痛みによって硬直した身体はまともに動こうとしない。このままでは、薫を助けることなど絶対に不可能であった。

『リク。お願いだからわたしのアヴァターになって！』

『まだそんなことを』

『わたし……、リクやカオリが殺されるところを見るために　ク
ラリオンアースにアクセスしたんじゃない！』

そして、ついにサファイは泣き出してしまった。

プラネットメーカーで創造された惑星クラリオンアースにアクセスできる権利。サファイは未知なる世界に心をときめかせていたことだろう。それは、十日前にサファイと通話したときの様子から窺い知ることが出来る。あのときのサファイは本当に嬉しそうだった。

それなのに、仮とはいえ初めて契約した者とその友人が殺されたのでは悲惨過ぎる。下手をすれば、一生消えないトラウマが残ってしまうだろう。それではあまりにもサファイがかわいそうであった。

サファイは言った。陸たちはゲームの中の存在であると

本当にゲームだとしたらキャラが死んでも悲しむ必要はない。もう一度、開始からやり直せば済むことである。それでもサフィはアヴァターになれという。アヴァターになったら、この状況を打破することができるかもしれないだろうか。

『リク、お願い……。お願いだからアヴァターに……。』

『わ、わかった……。薫を助けられるなら アヴァターでも何にでもなつてやるよ!』

『リク!』

『そのかわり……。あの殺人鬼を絶対にぶつ飛ばすぞ!』

『うん』

無意識のうちに陸はジュエルタイプの情報端末を握り締める。その瞬間、はめ込まれている宝石から眩い光が溢れ出し 陸の全身を包み込んだ。

ペンダントを握りしめた瞬間、瀕死の陸は光の空間に浮かんでいた。

自分以外には何も無い空間 まるで光の宇宙を漂っているようであった。そこに、陸とは違う意識体が現れる。ひときわ眩く輝く発光体。陸はそれがサフィであると直感的に理解した。

発光体は何かを確認するかのようにふわふわと漂う。そして、陸の存在に気づき、複雑にその形を変化させながら少女の姿となった。

『直接会うのは初めてだね。リク……。』

眩い光によって輪郭しかわからないが間違いなくサフィである。サフィは陸の意識に近づき、そっと両の腕を伸ばす。すると、ナイフで刺された傷跡はそこだけ時間が巻き戻ったかのように塞がって

しまつ。まるで刺された事実すら無かつたように消え失せてしまつた。

『アイテム使つて回復したからもう大丈夫だよ。まあ、マニユアルによると、感じる痛みが数倍になって実際に自然治癒する期間は続くらしいけど……』

『うぐつ、痛つてええええ！』

サファイの説明通り、肺を抉られたような痛みが陸に襲いかかる。

あのまま死んでしまつた方がましと思えるような激痛であつた。それでも、これで身体が動くようになったのは事実である。痛みにのたうち回っている場合ではない。一刻も早く薫を助けなくてはならなかつた。

『リク……』

『さ、サファイ？』

不意にサファイが抱きついてくる。思わぬ行動にどぎまぎしてしまつたがその変化に陸は啞然としてしまふ。サファイを形取つていた光が粒子状に四散して 陸の身体へと吸い込まれてしまつたからだ。

その途端、陸は身体に違和感を覚える。自分の身体であるはずなのにそつで無いような……。意識が身体を一步後ろから眺めているかのような、そんな奇妙な感覚である。

さらに、陸は額が熱くなつたのを感じた。自分のものではないよつな感覚の手を持って行くと、額には硬い何かがへばり付いていた。それはジュエルタイプの情報端末。そして、ジュエルナイト宝石騎士サファイアのアヴァター神乃化身であることを証明するものであつた。

なぜこんなことになったのだろうか……。薫は己の運命を呪わずにはいられなかった。

目の前にはサバイバルナイフを逆手に持った殺人鬼が迫ってきている。薫は逃げることも叶わず、ただ悲鳴を上げるだけしかできない。間も無く、薫も死体無き殺人事件の犠牲者となってしまうだろう。

恐怖に泣き叫ぶ薫の様子を見て、殺人鬼は満足そうに嫌味な笑みを浮かべている。じつに腹立たしいことである。

「嫌っ、誰か助けて！」

薫は必死に助けを求める。しかし、それは無駄な行為だと言えるかもしれない。このような不思議空間では、薫と殺人鬼の他に誰もいるはずがないのだから。

「そろそろ死ね……」

殺人鬼は薫を捕まえて馬乗りとなり、サバイバルナイフを高く振り上げる。それからの光景はまさにスローモーションであった。

ナイフの切っ先がゆっくりと薫の胸元へ迫ってくる。薫はおもわず殺人鬼の顔へ視線を向ける。感情が高揚した様子でナイフを振り下ろす殺人鬼……。薫はもはや死を覚悟するしかなかった。

その瞬間、殺人鬼のにやついた顔が真横にぶれる。いや、頭にもの凄い衝撃を受け、身体ごと薫の上から弾き飛ばされた。殺人鬼はそのまま優に十メートルはぶっ飛んでしまう。

「薫、大丈夫か！」

「えっ……？」

突然のことに薫は啞然としてしまう。薫の危機を救ったのは同じ

年ぐらいの 額に大きな宝石サファイアを付けた不思議な雰囲気サファイアの少年であった。

どうやら殺人鬼は、この少年の横蹴りを喰らって吹き飛ばされてしまったようだ。

薫の無事を確認して陸はほっと息を吐く。そして、よろよると起き上がるうとしている殺人鬼をギツと睨み付ける。怒りによって腸が煮えくり返りそうな いや、既に煮えくり返っていた。

一方の殺人鬼は、突然の反撃に愕然としてしまう。先ほどまで虫の息だった陸が、人とは思えない力で攻撃を仕掛けてきた。普通では考えられないことである。だが、陸の姿 その額に付いた宝石を眼にして納得したように呟いた。

「なるほど、アヴァター契約者……ねえ」

その言葉に陸の身体はピクリと震えた。つまり、この藤永哲也も、陸と同じように外界からのアクセスを受けた者のようである。もちろん、シミュレーションシステムによって創造された惑星クラリオンアースの存在を 世界の秘密を知っているのだろう。

藤永は口から流れ出た血を指で拭い、納得の出来ないといった表情で陸を睨み返した。

「なあゝにゲームキャラに感情移入しているんだか……」

「うるさい」

「相手はただのプログラム。デリートして何が悪い？」

「黙れ……」

「ああ、そうか。自分の獲物を横取りされそうになって怒っているんだな。それは悪いことをした。でも、基本的にゲームは早い者勝ちのはずだろ。のんびりしていたら誰に横取りされたって文句は…

「……
「やかましい！」

陸は雄叫び共に感情を爆発させる。その途端、陸の身体から陽炎のような光がゆらゆらと発生する。怒りの炎　押さえきれないエネルギーが具現化しているかのようであった。

「それ以上喋ると、今すぐにお前をぶっ殺す……」

あまりの迫力に藤永は生唾を呑み込む。神乃化身アヴァターとなった陸なら藤永を消去するなど簡単なことであろう。だが、いくらアヴァターとはいえ相手はただの高校生。殺しに関しては、覚悟も経験も違う。口では凄んでいても、本当に殺されるなどまず無いはずだ。

「なら殺やつてみるよ……。本当に殺す度胸があるのならな！」

歩を進めた藤永は、両手を広げながら陸の前に出る。案の定、陸の動きは固まった。

そんな一瞬の隙を見逃さず、藤永は素早い動きで陸との距離を詰める。低い体勢で地面を蹴り、一気に陸の目の前へと移動した。藤永は懐に隠されていたもう一本のサバイバルナイフを抜き出す。両手に二本のナイフを構え、呆然と立ち尽くす陸に襲いかかった。

顔面に突き刺さる勢いで刃が迫る。辛うじて交わすも頬が裂けて血が吹き出す。同時に胸も大きく裂かれてしまう。眼にも止まらぬほど素早い攻撃に、陸は面を喰らってしまった。

さすがは殺人鬼というべきか、敵は刃物の扱いに長けているようである。今の陸には切っ先を交わすことすら難しい。さらに、相手を傷つけることに未だ躊躇いがあるため、反撃することも出来ない。これでは、いかに強大な力を手に入れたとしても、万に一つの勝機も無いだろう。逆に、藤永は己の勝利を確信していた。

『やれやれ、見てられない……かな』

突然、陸の口から女の子の音が発せられた。そんなギャップに藤永は慌てて陸から距離を取る。陸自身も己の変化に驚いて目を丸くした。

『リク、ここはサファイに任せてよ』

「さ、サファイ？」

それはサファイの声である。アヴァター契約の時に陸の身体へ吸収された光の粒子、それはサファイの意識そのもの。サファイは陸の身体の中に存在している。

身体の共有。惑星クラリオンアースにおいて陸はサファイの分身……。アヴァター化した陸は、サファイの身体でもあるのだ。

真実を知らない者に見えてしまいかもしれない。陸が声色を変えて一人芝居しているように見えてしまうかもしれない。陸をメインに行動させるだけなら、サファイは心の中で語りかければ済むことである。しかし、今はサファイの意志で陸の身体をコントロールしようとしていた。

『要は相手を行動不能にすれば良いんでしょ』

「って、簡単に言うな！ 相手は武器ナインを持つてるんだぞ！」

『大丈夫 サファイ、対戦格闘ゲーム 得意だから』

対戦格闘ゲーム。向かい合ったキャラクターを戦わせる半世紀ほど前に創られたレトロゲームのジャンルである。コントローラと呼ばれる入力デバイスを駆使して、超人的に強いキャラクターを操って勝敗を決する。

現在でも同じようなシステムは存在しているが、あれは己の身体にセンサーを付けて動きを入力させる本格的な いわゆる格闘技

シミュレーションである。当然、人間を超えるような動きができるわけもなく、ある意味スポーツであり一般的な娯楽ゲームとはいえない。おそらくサフィの言っているのは、昔の対戦格闘ゲームのことだろう。だから尚更のこと、陸にはサフィの言っていることがよく理解できなかった。

「おまえ、なに言ってる……」

『じゃあ、ちよっとコントロールをこっちにもらうね』

「はあ？」

すると、唐突に意識と身体の接続が遮断した。眉一つ指一本動かせない。陸の意志では呼吸することすらできない。だが、陸の身体は何事も無かったかのように生命活動が持続されている。そう、言葉通り、陸の身体のコントロールがサフィに持っていていかれてしまったようだ。

こうなってしまうえば、陸は自分の口を使って喋ることもできない。陸とサフィのクラリオンアースでの立場が完全に逆転してしまったのだ。

『ちよつ、サフィ！ これはいったいどういう……』

「よつと 接続具合はまあまあかな」

サフィは陸の身体で動作を確認する。視線の高さ、腕や脚の長さ……。サフィと陸の身体では、違うことだらけであろう。しかし、それも束の間なことである。サフィは軽くジャンプして体勢を整え、気合いを高めて藤永と向かい合う。そして、半身の状態でしっかりと腰を下ろし、両手首を合わせて手を開く。身体を捻るような動作で両手を腰の位置まで引き寄せ、力を込めるようにして一気に藤永めがけて突き出した。

「波動——拳！」

なんか出た

叫びと共に、陸の両手から光り輝くエネルギーの固まりのような何か放たれた。それには陸の動きを警戒していた藤永も驚いた。まるで漫画かゲームのようである。人の身体からこのようなエネルギーが放たれるなどとても信じられないことだ。

「波動、波動、波動——拳！」

なんちゃらの一つ覚えのようにエネルギー弾を連射するサファイ。だが、その威力は凄まじく、藤永が交わしたエネルギー弾は、岩壁の側面に着弾して大爆発を起こす。連射できる対兵器用ミサイルのようなでたらめな破壊力があつた。

「ふざけ！」

さすがに藤永の顔色が変わる。ナイフではとても太刀打ちできない。さらに、さきほどまであつた攻撃に対する躊躇いが陸から完全に消えてしまっている。こうなってしまうえば藤永に勝ち目は無い。ひたすら非常識で強力な攻撃を避け続けるしかなかった。

その戦いの勝敗を遠くから呆然と眺めている少女がいた。優子クリスの
アヴァター
神乃化身、神代菜月である。

「な、なにあれ……」

なぜか、陸の手からエネルギー弾が連射されている。ナイフを持

った殺人鬼がそれを避けながら陸に接近し、エネルギーが凝縮する隙を突いて飛ぶように襲いかかる。それを待ちかまえていたかのようには、陸は身体を捻りながらしゃがみ込み ジャンプしながら天空めがけて拳を突き上げる。なにやら、女の子の声で『しょーりゅーけん！』とか叫んでいるように聞こえるのは気のせいなのだろうか。

陸の拳は見事空中に浮かぶ殺人鬼の顎を捉えた。いわゆるジャンピングアッパーカット。殺人鬼は豪快に吹き飛ばされて顎を押さえながら地面で悶絶している。まるで何かの寸劇コントでも繰り広げられているような馬鹿馬鹿しさがそこにはあった。まあ、実際は殺人鬼との命を掛けた戦いの最中であるわけだが……。

『サファイ……。この前、貸してあげた『スト2』、よほど気に入ったみたいね……。』

優子が意味不明なことを呟く。よくわからなかったが、菜月は決して深く聞こうとはしなかった。

そうこうしている間に、どうやら決着がついたようである。殺人鬼の動きがピタリと止まり、周りの景色が一変する。殺人鬼が気絶したことで、フィールド空間が崩壊し 元の世界へと戻ってこられたようだ。

突然出現した惨状の現場に、たまたま裏路地を通っていた男性は驚愕してしまう。

ぼろぼろの姿で倒れている青年に、衣服が所々裂けてうずくまっている少女。そして、全身が傷だらけで血まみれの少年……。あきらかに普通の状態ではない。さらに、フィールド空間内で流れ出した血液が一ヶ所に集まり壁や地面を真っ赤に染めている。これで誰の姿も無かったら、死体無き不可思議事件の発生となっていたはずだ。

しかし、今回は毛色が違っていた。被害者になりかけた少女の存在。犯人と思われる人物がそこにいたからだ。

辺りは一気に騒然となる。今、この街一番の話題である不可思議事件が目の前に発生したのだ。無理もないことだろう。

「さてと、あとの事はリクに任せるね〜」

そういつて、陸の中からサファイアの意識が離れる。すると、額に付いていた宝石が外れ、ペンダントとなって陸の首にぶら下がった。

その瞬間、身体のパーツが引き裂かれるような　言葉にならない激痛が走る。両手足に縄を結ばれ、それぞれを牛に引つ張らせて身体が引き千切られる。そんな感覚がぴったりと当てはまる気がする。普段使っていない筋肉を酷使したとかそんなレベルの話ではない。サファイに身体をコントロールされていた時、はたして人間に再現出来る動きだったのか……。そのうち、腕や脚が伸び縮みするようにならないかと、陸はとても不安になってしまった。

あまりの激痛にそのまま地面へ倒れそうになってしまいが、陸は辛うじて踏み止まった。そんなことより、こんな馬鹿げた事件に巻き込まれてしまった薫のことが心配だった。

「か、薫……。大丈夫か……」

腕を押さえながら、脚を引きずりながら、陸は震える薫に声をかける。その声に我に返った薫は、ゆっくりとした動作で陸の顔を見つめた。

「は、はい……。助けてくれて　ありがとうございます……」
「……………」

ちょっとした違和感を覚えた陸は、おもわず小首を傾げてしまう。

まるで、初対面の相手に御礼を言っているような態度である。

「どうしたんだ薫……。頭でも打ったのか？」

「えーっと……。どうしてわたしの名前を知っているんですか？」

えも言われぬ不安感が陸の心を覆い尽くす。目の前にいる薫は、普段からこんな感じの女の子だったのだろうか。

「な、なに言ってるんだ。オレだよ……。陸だ！」

「り、陸……。さん、ですか？ はじめまして……。ですよね？」

後頭部を鈍器で強打されたような、全身に感じている激痛のことすら忘れてしまいそうな衝撃を覚える。容姿は確かに薫なのだがまるで別人のような。陸の知っている彼女とはまったく違った印象であった。

「かお……。り？ しっかりしろって！ オレだ、幼馴染みの 芹 沢陸だよ！」

陸は薫の両肩を掴んで激しく揺さぶる。そのあまりの勢いに薫の顔色が青くなる。

「や、やめてください！ わたし……。あなたなんて知りません！」
「なっ！」

決して陸のことをからかっているようではない。本当に陸のことを知らないだけのようである。いったい何が起こったというのだろうか

『り、リク……。あのね、リクはサフィとアヴァター契約しちゃっ

たから……」

「アヴァター……契約？」

その言葉に陸はハツとしてしまう。

アヴァターになるということは、惑星クラリオンアースにおいてプレイヤーの分身になること……。プレイヤーはもともとクラリオンアースに存在していないため、アヴァターになった瞬間、陸の存在は世界の理から外れてしまうことになる。つまり、陸は最初から惑星クラリオンアースに生まれなかったことになる。

最初から存在しないわけだから誰も陸のことを知らない。友達、そして、家族でさえも陸のことを完全に忘れてしまう。それはサイと初めて会話したときに聞かされた内容であった。

そんな馬鹿げた話、現実には起こり得ないと思っていた。己の存在が消えるなど、普通では考えられないことである。だが、薫の反応を見ていると、どうやらそんなあり得ないことが起こってしまったようだ。陸は、胸ポケットからデータ送受信用のデバイスカードを取り出す。金属端子を親指と人差し指の側面で挟み込み、陸の存在を証明するパーソナルデータを表示させた。

No Data……

そんな表示が僅かな期待をも打ち砕く。それを見た途端、陸はその場から逃げるように走り出した。

後方から陸を呼び止める叫び声が聞こえてくる。通報によって駆けつけた警察官のようだったが、今はそれらに関わっている場合ではない。陸には、何を置いてでも確認したいことがあった。

激しい痛みを感じるものの身体の動きはとても軽い。これもアヴァターになった効果なのだろうか。

全力で市街地を駆ける陸……。そして、一つの民家に辿り着き、その歩みを止めた。

表札には『芹沢』とある。そう、陸がこの世界で一番落ち着くことのできる我が家であった。

大きく息を吸い込んでから陸は玄関に手をかける。当然、鍵がかかっているため開くことはない。デバイスカードをかざしてロック解除しようとしたが、パーソナルデータがクリアされている状態ではどうすることもできない。そこで陸は、チャイムを鳴らして内側から開いてもらうことにした。

チャイムを鳴らしてしばらくすると、通話用のモニターに女の子の顔が映し出される。二つ年下の 陸の妹であった。

『はい、どちらさまですか？』

「……………」

妹にもモニター越しに陸の姿は確認できているはずである。それなのにこのような反応をするということは やはりそういうことなのだろうか……………。

『あの〜？』

「す、すみません。この近くに白檀さんのお宅はありますか？」

咄嗟に陸は薫の家を訪ねるふりをする。もちろん、陸が薫の家を知らないはずもないため、妹の反応を見るための口実である。

『あつ白檀さんなら、道を挟んだ向かい側のお家ですよ』

「そう……………ですか。ありがとうございます……………」

疑念は確信に変わった。どうやら、本当に陸のことがわからないようである。つまり、この惑星クラリオンアースにおいて、陸が存在

していたという事実は完全に消えてしまったようだ。

陸はモニター越しに微笑む妹を神妙な面持ちで見つめる。もしかすると、これが見納めになるかもしれない。

「じゃあ、さようなら……」

後ろ髪を引かれる思いで 陸は最後の別れをする。もはやここは陸の居場所ではない。いや、この世界に陸の居場所など何処にも存在しなかった。

日も沈んで既に一時間が経過していた。

行き場の無い陸は一人公園のベンチに座っている。陸は、これからどうすれば良いのか、途方に暮れてしまった。

まずは住む場所を考えなくてはならない。部屋を借りるにはお金が必要となる。パーソナルデータの消失によって陸の預金はゼロである。お金を手に入れるためには働かなくてはならない。

明日になったら日払いのアルバイトを探そう。だが、パーソナルデータも存在しない、履歴もわからない少年を雇ってくれるところがあるのだろうか。雇ってくれたとしても、給金の受け取り方法はどうにかしなければならぬ。雇い主がわざわざプレミア付きの現物紙幣を支給してくれるとは思えないからだ。

そうなると、やはりパーソナルデータを復旧させる必要が出てくる。しかし、陸はこの惑星クラリオンアースに存在していないため戸籍も無く、パーソナルデータの復旧を依頼することはできないだろう。

いわゆる八方塞がりである。このままでは生きていくことすら難しい。

『リク、ごめんなさい……。まさか、こんなことになるなんて……』

「気にするな。サファイの所為じゃないって……」
『で、でも……』

自宅を離れてから、サファイは陸に謝り続けていた。

わたしのアヴァターになりませんか？ その言葉の意味やそれによつて陥る結果を、サファイは軽く考えていたのだらう。現状はこうである……。ゲームの中とはいえ、陸という人間の存在を完全に消してしまったのだ。

もちろん、サファイだけに責任があるわけではない。サファイは最初から存在が消えてしまうことを説明していたし、アヴァターになると決めたのは陸である。

あのときアヴァターにならなければ、陸や薫は間違はなく死んでいただらう。不満はあつて納得も出来ないが二人は生きている。ただ……誰一人陸のことを覚えていない現状があまりにも哀しかった。そのとき、陸は何者かの気配を感じて、俯いていた顔を上げた。ゆっくりと陸の方へ歩み来る人影。外灯に照らされて姿を現せたのは、陸が不可思議事件の犯人と疑っていた神代菜月であった。

おもわず声をかけそうになるが、陸はすんでの所で思い止まる。どうせ陸のことを覚えていないのだから、声をかけても無駄な行為である。下手をするとナンパと勘違いされて、菜月も自分も嫌な思いをするだけだらう。

そんな心の葛藤も知らずに、菜月は陸の前へ立ちジツと見つめてくる。そして、にっこりと微笑みながら、まるで握手でも求めるかのように右手を陸へと突き出した。

「やっと見つけた。芹沢、陸くん」

なぜだらう……。名前を呼ばれることで、全身に電撃が走ったかのように感じた。ただ、名前を呼ばれただけに涙が溢れてきた。それは、芹沢陸という存在が　この世界で再び誕生した瞬間だ

ったのかもしれない。

第5話 それは新たな人生の始まり

金緑石の郊外に大きな洋館があった。人気のほとんど無い場所に建っており、誰が住んでいるかもわからない。地元の学生たちの間では、幽霊屋敷として有名な場所である。そんな不気味な屋敷へ、菜月に連れられた陸はやって来ていた。

いったい何の冗談であろうか。陸はおもわず顔を引きつらせてしまう。少しだけ時期の早い肝試し、いや、今はそんなことをして遊んでいる場合ではない。なぜなら、不思議少女サフィのアヴァターになったことで、この世界から芹沢陸という存在が消えてしまっていたからだ。

「神代……先輩。先輩は、どうしてオレのことを 覚えているんですか？」

己の居場所を失い、夜の公園で途方に暮れていたところへ菜月は現れた。菜月は陸の名前を呼び、捜していたと伝える。そして、戸惑う陸の手を取り、強引にこの屋敷まで引つ張ってきたのだ。

その事実から考えても、菜月が陸のことを覚えているのは間違いない。問題は、どうして菜月だけが覚えているかということだった。陸の問いかけに菜月が振り返る。しばらく陸の顔をジッと見つめ、未だ手を握っていることに気づき 顔を赤くして飛び退いた。

「こほん……。え、詳しい内容を説明する前に、まずは中へ入りましょう」

そう言って、菜月はポケットから扉の鍵を取り出す。キー情報の入ったパーソナルカードではない。錠の穴に差し込んで開閉する金属製の鍵である。菜月はその鍵で重厚な扉を開け、真っ暗な建物の

中へと入って行く。間も無く、玄関の照明が灯された。

「どうしたの？ はやく入ってきて」

「は、はい！」

急かされた陸は慌てて扉をくぐる。想像していた幽霊屋敷とは違って、普通に人の生活している様子が窺える。もちろん、外観と同じく、広くて立派な 長い歴史を感じさせる内装であった。

物珍しそうに辺りを見回す陸。そんな陸を見て、菜月は可笑しそうに微笑みを浮かべた。

「そのうち慣れるでしょう……。なにしろ、今日からあなたも、ここで暮らすことになるのだから」

「えっ！ ちよっ、神代先輩。それってどういう……」

菜月は意味有り気に微笑みながら奥へと入って行く。陸は戸惑いながらも菜月の後を追うことにした。

「待ってくださいよ、先輩……。って、えっ？」

驚いたことに、部屋の中には菜月の他に見慣れぬ少女の姿があった。同い年ほどの少女で、科学者のような白衣を羽織っている。そして何より驚いたのは、顔の半分を覆い隠そうかというぐりぐりメガネをかけていることであった。あだ名はおそらく博士はかせだろう。

「よっこそ、芹沢陸くん……。わたしの名前はクリスタル……。クリスって呼んでね」

そう言って、少女は手にしたジュエルタイプの情報端末を見せる。

陸のとは違い、そこには七色に輝く水晶がはめ込まれていた。

「なるほど……。あんたもアヴァターか……」

宝石名、そしてジュエルタイプの情報端末。まさしく、サファイの
ような外界からのプレイヤーと契約してアヴァター化した人物なの
だろう。

おもわず身構えてしまう陸。相手がアヴァターなら、あの藤永哲
也のように襲いかかってきても不思議ではない。そんな陸の様子に
少女は苦笑する。どうやら、直ちに襲いかかってくることはなさそ
うだ。

「勘違いしないで芹沢くん。この人はアヴァターじゃない。彼女の
アヴァターは神代菜月……。優子さんは、あなたが契約したサファイ
さんと同じ世界 エターナルアースの住人よ」
「サファイと同じ……。っていつか、先輩がこいつのアヴァター！」

かなり失礼な物言いに、菜月は優子の顔色を窺うようにおろおろ
している。一方の優子はというと、不機嫌になることもなく陸の反
応を楽しんでいた。

そこに、成り行きを見守っていたサファイが信じられないといった
声で呟く。

『どうして……。どうして優子さんがそっちに クラリオンア
ースの中にいるんですか！』

「あらサファイ。お久しぶりね」

「なんだ？ サファイ、こいつを知っているのか？」

『知ってるもなにも……。如月優子さんは、疑似惑星を創造するた
めの装置プラネットメーカーの開発者で、十二人のプレイヤーがク
ラリオンアースへアクセスできるシステムを創った人だよ。たしか、

『わたしのアヴァターになりませんか？』って選定メールも、優子さんが送っていたんだと思うけど……』

「つまり、こいつが諸悪の根源」

『あははっ……。で、おんとし四十三歳……』

「こちらら、年のことは言わないの」

『う、ごめんなさうい』

「……………、よ、四十三……！」

若作りがどうかというレベルを遙かに超えた幼さ……。陸は驚愕の声を上げてしまった。

まるで、十代後半で全ての成長が止まっているかのようである。もしかすると、クラリオンアースとサファイたちの住むエターナルアースでは、人間の寿命や成長速度が根本的に違っているのかもしれない

「ってことは、実はサファイもオレより年上……だったりするのか？」

『サファイは十三歳だよ。そっちの暦が一年で三百六十五日と過程しただけ』

「ふむ。見た目通りってことだな」

それを聞いて、陸はほつと息を吐く。もしサファイが年上なら、これまでの口調を改めねばならないと考えていたからだ。

何にしても優子の容姿は異様である。そんな優子を前にして、陸は底知れぬ恐怖を感じていた。

ちなみに、なぜ優子が年齢に見合わない姿をしているのかというと、単に種族の違いで寿命が長いからである。しかし、このクラリオンアースの物語にはまったく関係ないことであるため、陸が知る必要は無かったりする。今のところ

「え、優子さんの非常識さを語り出したら、時間がどれだけあっ

ても足りないからその辺にしておいて……」

非常識という言葉になにやら騒いでいるようであったが、菜月は聞き流して話を続けることにした。

「芹沢くんは、アヴァターになってからの自分の立場　ちゃんと理解している？」

「それは、オレの存在が惑星クラリオンアースから消えてしまったってことですか？」

「そう……。芹沢くんはサフィさんがこのクラリオンアース内で活動するための分身アヴァターになった。その結果、陸……芹沢くんは最初から生まれていなかったことになる……」

わかっていたことだが改めて聞かされるとかなりショックである。やはり、陸の存在は完全に消えてしまっているようだ。それならどうして菜月だけが覚えているのだろうか……。陸はそのことについて質問をした。

「なぜわたしが芹沢くんのことを覚えているのか……。それは、わたしもあなたと同じアヴァターだから……」

「なるほど、存在が消えた者同士、お互いのことを覚えているわけですね。あれ？　でも、昼休みにはまだアヴァターの仮契約もしていなかったけど、オレ、先輩のことを知っていましたよ。先輩も、あの後にアヴァター契約したんですか？」

アヴァター契約をして存在が消えるのなら、陸が菜月のことを覚えていないはずはない。陸がアヴァターになったから菜月のことを思い出したのだろうか。いや、そうではないだろう。あのとき一緒にいた菱木健太も菜月のことを知っていたからだ。

「それについてはわたしから説明します。菜月ちゃんがわたしのアバターになったのは、クラリオンアースの時間でいうところの約二年前……。高等部へ上がる前に契約したわけだから、あなたが知っている神代菜月はアバターになった後の存在になります。だから、みんなが菜月ちゃんのことを忘れてしまうことはありません」
「でも……、それなら先輩の家族は……？」

陸は、聞いてしまっただけから後悔をする。それは、自分に当てはめればわかること。菜月は二年も前に、家族との哀しい決別を体験しているのだろう。

「わたしの家族は今海外にいるんだけど、仕事の関係で元から放任されていた方だから、それまでの暮らしと大差無いかな……。もちろん、再会しても気づいてもらえない寂しさはあるけど」

軽い感じで答えてはいるが、何となく哀しさが伝わってくる。そんな気配を悟られないようにするため、菜月は大きな声で話題を変えた。

「と、とにかく、芹沢　　いいえ、陸くん！」

憧れの先輩に名前と呼ばれて陸はどきまぎしてしまふ。冷静になつて考えれば、こんな時間に菜月と会っていること自体が信じられない。だが、そんな戸惑いも大したことではないと思ひ知らされる。次に菜月から出た言葉は、心臓が口から飛び出るほど陸を驚かせたからだ。

「今からあなたの名前は神代陸^{かみしろりく}。わたしの一つ下の弟^{かみしろりく}にすることにします」

「……って、ええー！ー！ー！」

驚愕の叫びが響き渡る。

突然ではあるが、憧れの先輩は どういうわけか陸のお姉さん
になってしまった。

「リク、起きて。ねえリクったら」

遙か遠い意識の外側で陸を呼ぶ声がする。深い眠りの中、陸はそんな声をまるで子守歌のように聞いていた。また、揺らされる身体が何とも心地よい。

ああ、このままいつまでも眠っていたい。間も無く、そんなふう
に考えてしまったことを、おもいつきり後悔する羽目になった。

「リク、いい加減に起きろー！ー！」

声の主が寝ている陸の上に飛び乗ってくる。その瞬間、殺人鬼に
刺された傷跡へ塩水をかけられたような激痛が走った。

「うぎゃわあああー！ー！」

あまりの痛さに身体が痙攣を起こしてしまう。殺人鬼との戦いから三日は経過していたが、回復アイテムの後遺症によって数倍となった痛みは未だ引いていなかった。

「って、サファイ！ 頼むからその起こし方は止めてくれー！ー！」

「だって、リクったらなかなか起きないんだもん……」

「起きないじゃねえ、痛いんだよー！」

陸の上に乗っかっているのは、お騒がせクラッカー少女サファイ……。幻や立体映像の類ではない。本物の肉体を持った真正正銘のサファイであった。

ここは陸に割り当てられた一室。なぜそこにサファイが現れたのか、どうして陸と同じ空間に存在できているのか、まずは説明せねばなるまい。

その原因は、三日前に連れられて来たこの洋館にあった。

じつはこの洋館、サファイたちの世界エターナルアースにも存在している。どういう理屈なのかはわからないが、クラリオンアースの世界と繋がっているらしい。つまり、陸はクラリオンアース側から、サファイはエターナルアース側から入ることで、同じ洋館の中に存在できているようだ。

理解不能のめちゃくちゃな現象ではあるが、実際に陸とサファイが同じ部屋に存在しているのだから納得するしかない。優子の説明によると、この洋館はプラネットメーカーの次世代システムの実験施設であるらしい。

ユーザーが疑似惑星へアクセスするとき、現在試験運用中のシステムではアヴァターを通してしか行動することができない。しかし、将来的には、アヴァターなどを必要とせず、ユーザー自身が疑似惑星の中へ直接入り込むことができるようになるのだという。

今はまだこの洋館限定の機能だが、いずれはクラリオンアースのどこへでも行くことができるようになる。サファイたちユーザーにとっては、まさに夢のようなシステムであった。

まあ、クラリオンアース側のプログラムである陸たちにとっては、まったく意味の無い。はた迷惑な機能だといえなくもないが……。話は変わるが、この洋館から少し奥へ行ったところにサファイの実家がある。サファイは、洋館のシステムを聞いた直後にここへ現れた。そして、陸がこの洋館で暮らすことになったのを聞いて、自分も一緒に住むと騒ぎ始めた。

いくら近所とはいえ、年端も行かぬ少女が他人の家に居候するな

ど、そんな無茶ができるはずもない。最初はなんとかサファイに諦めてもらおうとしていたが、知らないうちに優子が彼女の両親と連絡を取って一緒に暮らせるように手配してくれていた。

どうやら優子は、サファイと家族ぐるみの付き合いであったようだ。おそらく、プラネットメーカーの次世代システムを開発するためにサファイの協力が必要だ。とでも保護者を言いくるめたのだろう。

そんなたたばたを経て、昨日から家族がもう一人増えてしまった。その結果が今回の悲劇である。

ありがたいことに、アヴァターである陸をプレイヤー自らが起こしにきてくれた。いや……、どちらかといえば、デジタルペットの仕付け感覚で起こしにきただけなのかもしれない。なんにしても陸の平穩は、遙か彼方へと遠ざかってしまったようだ。

『陸、はやくしないと遅刻しちゃうよ』

下の階から菜月の声が聞こえてくる。漂ってくる香りから察すると、もう朝食の準備はできているようだ。すると、陸のお腹がぐうと鳴る。陸は、乗っかっているサファイを押し退け、素早く白鳳学園の制服を着込む。机に置いてあったジュエルタイプの情報端末とデータ送受信のデバイスカードをポケットに押し込み、背後で叫んでいるサファイを無視しながら一階へ駆け下りた。

洗面所で最低限の身形を整え、そのままダイニングルームへと向かう。陸の予想通り、ダイニングルームでは制服にエプロン姿の菜月が朝食の用意をしてくれていた。

菜月は、陸に気づいて満面の笑みを浮かべる。

「陸くん、おはよう」

「あっ、神代先輩　おはようございます……」

その途端、菜月は不機嫌な表情となる。それに気づいた陸は、慌てて挨拶をし直した。

「え〜っと……。おはよう、菜月姉え……」

「はい、よくできました」

そう言つて、まるで幼い弟を褒めるように、陸の頭を撫でてくる。三日前のあの日、世界から存在が消滅してしまった陸は、神代姓を与えられ菜月の弟になってしまった。そして、菜月は自分のことを姉と呼ぶように強要してきたというわけだ。

最初こそ頑なになっていた陸だったが、優子の言葉を聞いて断れなくなつてしまった。

『菜月ちゃんは二年間も家族が居なかつたんだから、大人しくお姉ちゃんつて呼んであげなさい』

菜月にとつて久しぶりにできた家族……。口にはしていないが菜月もどこか嬉しそうである。考えてみれば当然のことだろう。菜月はアバターとなつてからずっと一人で暮してきた。誰にも頼ることなく、ずっと一人で

そこに、仮初めとはいえ家族ができたのだ。嬉しくないわけはないだろう。

だが、憧れの先輩をいきなりお姉ちゃんと呼ぶには抵抗がある。妥協した結果、菜月姉えという呼び方に落ち着いたわけだ。

「サフィちゃんも陸くんを起こしてきてくれてご苦労さま……。陸くんは、今日が転入初日なんだから、もっとしっかりしないといけませんよ」

「転入初日……。つて言われてもね〜」

食卓に着いた陸は、複雑な表情で頭を掻く。今日から陸は、菜月が生徒会長を務めている白鳳学園高等部へ転入することになっていた。そう、つい三日前まで芹沢陸が通っていた学園に、神代陸として転入するというややこしい状況になっているのだ。

普通に考えればもの凄く馬鹿らしいことなのだが、芹沢陸という存在が消滅しているためこのような手続きを踏まないといけならしい。もちろん、もう一度学園に通えるわけだから、文句を言えるような立場ではなかった。

陸はおもむろにデバイスカードを取り出してみる。指で金属端子を挟み込み、情報端末に記録されているパーソナルデータを表示させた。

「うん。間違いなく神代だね」

隣に座って食事しているサファイが、陸へもたれかかるようにしてモニターを覗き込む。優子に復元してもらったパーソナルデータは、完全に神代姓となっていた。

プラネットメーカーの開発者であるからこそ、消えてしまった陸のパーソナルデータを復元・改竄といった離れ業が出来るのだろう。どうせなら、アヴァター契約によって消えてしまった陸の存在を復活させて欲しいと思うのは贅沢なのだろうか

モニターを見ながら、陸は大きなため息を吐く。これからいったいどうなってしまうのか、今の陸には想像することすらできなかった。

朝食を終えた陸たちは、それぞれの学校へ向かうため洋館を出た。すると、同時に玄関を出たはずのサファイの姿が忽然と消えてしまう。なんとも不思議な現象である。おそらくエターナルアース側では、陸と菜月の姿が消えてしまったことだろう。

程なくして、陸の目の前にサファイの映ったモニターが現れる。例
ジュエルタイプ
の次世代型情報端末によるハンドフリー通信である。

『うう、リクだけ何もしないで通信できるなんてずるい……。今
度、優子さんに頼んでサファイもジュエルタイプの情報端末を創って
もらおう』

そう、ジュエルタイプの情報端末を持つのは陸たちアバターだ
けで、サファイはいまだにカード型携帯端末を使っている。そのため、
通信できるのは端末を操作しているときだけで、四六時中回線が開
いているわけではない。だが、サファイがジュエルタイプの情報端末
を手に入れたら状況は変わってくる。間違いなく回線が開きっぱな
しになるはずだ。

それだけはなんとしても避けなくてはならない
菜月と一緒に学園へ向かいながら、陸はそんなことを考え続けて
いた。

見慣れた校舎、変わらない教室、いつものクラスメイトたち……。
唯一違っていることがあるとすれば、陸が転入生として教壇に立っ
ていることであつた。

「え、せ……神代陸です。よろしくお願いします……」

挨拶を済ませると一気にざわめきが大きくなる。

皆、転入生である陸に興味津々のようだ。特に、女子が色めき立
っているように思える。なにやら眼が血走っているようで微妙に恐
い

そういうことに疎いたため本人は気にしていないようだが、陸はな

かなか整った容姿をしている。以前は普段から薫が側にいたこともあってそれほどでもなかったが、今はただのかっこいい転入生であり、平等にチャンスがあると考えられているのだろう。

「みんな、仲良くしろよ。それじゃあ神代……、おまえの席は一番後ろの空いているところだ」

「は、はい」

陸は苦笑しながら指定された席を目指す。そこは三日前まで陸が座っていた場所である。何もかもが同じでやや拍子抜けしてしまう。やはり陸一人の存在が消えただけでは、世の中なんの影響もなさそうだ。

「あああああーーーーー！」

突然、ホームルーム中に似つかわしくない叫び声が響く。驚きながら叫び声のあった方を見てみると、そこには立ち上がって陸を指差している白檀薫の姿があった。

「ど、どうしたんだ白檀……？」

担任教師の問いかけに、薫はハッと我に返る。

「はひっ！ な、なんでもありません……」

顔を真っ赤にしながら着席する薫に、クラス中がどっと沸いてしまふ。薫はますます顔を赤くして頂垂れてしまった。

何をやっているんだか……。陸はおもわず微笑んでしまふ。そんな様子を見て、健太は不機嫌そうに視線を背けるのだった。

授業までの小休止に入ると、陸はクラスメイトたちに囲まれてしまう。お決まりの質問タイムである。そこへ、クラスメイトたちを掻き分けるように薫がやって来た。薫は陸をジッと見つめ、確認するように頷きを繰り返す。

「やっぱり……。ねえあなた、わたしのこと覚えてる？」

覚えているもなにも、陸にとっては小さい頃から知っている幼馴染みである。忘れるはずがない。だが、薫の反応はどういうことなのだろう。もしかすると、少しでも陸に関する記憶が残っているのだろうか。

湧き上がる期待感……。陸は、どのように返答すれば良いか、必死になって考えた。

「え？ 白檀さん、彼のこと知ってるの？」

「知ってるもなにも……。不思議事件の犯人からわたしを助けてくれたのが彼なのよ！」

「ええーーーーー！」

それには遠巻きに話を聞いていた生徒たちも驚いた。

薫が不可思議事件の被害者になりかけたのは周知の事実であり、彼女を殺人鬼から助けた謎の少年のことはニュースでも大きく取り上げられていた。正体不明の謎のヒーロー。それがこの神代陸だというのだ。

「あ……………」

そういえば、アヴァターとなって殺人鬼を倒した後、いの一歩に薫と接触していたことを陸は思い出した。薫は、芹沢陸を覚えていたのではなく、アヴァター化した神代陸のことを覚えていたようだ。

「あのときは本当にありがとうございました。あなたが助けにきてくれなければ、わたしも殺されちゃうところでした」

「い、いや……、あれは……だな」

三日前に解決した不可思議事件では、アヴァター化した菜月が被害者たちを生き返らせていたため、実際に死亡した者は存在していない。しかし、藤永哲也が殺人を犯していたのは紛れもない事実である。そのため管理者である優子は、不可思議事件の被害者の数だけ藤永が殺人を犯したという情報操作していた。

これにより、藤永は七件の殺人、一件の殺人未遂を起こしたとして警察に逮捕されている。これほどの凶悪事件を起こしたのだ。裁判にもよるが極刑になることは免れないだろう。

また、藤永はアヴァターの仮契約中ではあったが、エターナルアース側のプレイヤーの指示ではなく独断で犯行に及んだことが判明していた。そのため、仮契約をしたプレイヤーが罪に問われることは無いという。

何にしても、今回はプレイヤーからの情報を受けて事件が発生したことになる。優子は現在、対策と解決法の構築に駆け回っているらしい。

「ほんと、神代くんってばかつこ良かったのよ。なんていうか、こう拳法……みたいな、格闘技？ そんな感じで、ナイフを持った犯人に立ち向かっていった」

「おお……」

こうなると薫の独断場である。なにやら大袈裟な動作で陸の活躍を皆に説明し始めた。

あまりの恐怖に記憶が曖昧となってしまうのか、あるいは優子によって記憶操作がされているのか……薫は、陸が人間離れしたゲ

ーム技で戦ったことを口にしていない。それは、陸にとって幸運なことであった。

人間とは、自分と違った存在を極端に恐れる節がある。転入初日で人間扱いされなくなるのはなるべく避けておきたい。アヴアター化した能力のことは、絶対に知られてはならないだろう。

それにしても、以前の薫に比べると、どこか雰囲気が変わったように思えてしまう。陸という幼馴染みが存在しなかったことで、また違った成長をしてきたのかもしれない。

目の前の少女は、決して陸の幼馴染みではない。姿形は同じでもまったく異なつた存在……。陸は淋しさを覚えずにはいられなかった。

そのとき、陸の情報端末にメールが届いた。まだ誰にもアドレスを知らせていないというのに、いったいどうということなのだろう。アドレスを確認してみると、どうやら学園の端末網を使って転送されてきたメールのようであった。

差出人は菱木健太　三日前までは一番仲の良かった親友である。辺りを確認してみると、健太の姿はどこにも見当たらない。おそらく、メールを送信した後、教室から出て行ってしまったのだろう。陸は、意識を集中させて、目の前に半透明のモニターを出現させる。網膜に直接表示される陸にしか見えない次世代型モニターである。メールを開いてみると、文字だけで『屋上まで来い』と簡潔にあった。

神代陸となつてからは、まだ健太と面識が無いはずである。それなのに、どうして健太からメールが送られてきたのだろう。謎は深まるばかりである。

なんにしても、健太とは早いうちに話をしたいと考えていた。もう一度仲良くなるためには、好いチャンスなのかもしれない。

いまだ事件の詳細を公演している薫に苦笑しながら、陸は健太の待つ屋上へと向かうことにした。

授業の開始を知らせるチャイムが鳴り響く。だが、そんなチャイムも御構い無しに、校舎の屋上では健太が陸の到着を待っていた。腕を組みながら、健太は金網越しに街並みを眺めている。そして、陸の気配を感じ取り、どすの利いた声で呟いた。

「おい転入生……。白檀さんに気に入られたからって、いい気になつてるんじゃないぞ……」

「……………。はあ？」

一瞬、陸は健太が何を言っているのかわからなかった。内容はさて置き、健太がこんな荒っぽい言葉を使うなど信じられないことである。いったいどのような心境の変化があったというのだろうか

「不可思議事件が近くで起こっていたら、彼女を助けていたのはオレだったはずだ！ おまえは、たまたま現場にいて、偶然彼女を助けたにすぎない。これ以上、白檀さんに近づくな！」

「ふむ……。少し落ち着け……」

「あぁー！」

「おまえ……。彼女のことが　好きなのか？」

「ななっ！」

それを聞いた途端、健太の顔が真っ赤になる。

これは面白い……。まったくもって予想外の展開であった。

以前はそんな素振りを微塵も感じさせない健太だったが、まさか薫のことを好きだったとはじつに驚きである。これからどうやって二人をからかかってやるのか……。陸はにやけ顔を隠そうともせず、うんうんと頷きを繰り返した。

「そうか、おまえが薫のことを好きだったとは」

「てめえ、からかつてるんじや……」

「よし、そういうことなら協力してやろう！」

「な、なに？ …… 本当か」

僅かなやり取りではあったが、薫と健太の関係は理解できた。今の二人はまったく親しくなっていないようである。

考えてみれば当然のこと……。二人は陸を通じて知り合いになっていたからだ。

すなわち、芹沢陸が存在していないこの状況では、薫と健太に接点はまるで無い。自らが行動を起こさない限り、親しくなりようがないのだ。

陸は、薫との関係も早々に修復したいと考えている。そうならば自然に健太との接点も出てくるだろう。その後は、健太のがんばり次第で何とでもなるはずだ。

とにかく、この一件が影響して陸と健太は再び仲良くなった。人間の関係って意外に単純なものなんだなと、陸はしみじみ思ってしまうのだった。

第6話 平穩とは程遠い学園生活

金緑石に門を構える私立白鳳学園は、初等から高等までの総合教育機関である。

教育機関としては古くから有名で、地元はもちろん遠方からも生徒が集まってきている。この時代としては珍しく、一所に生徒たちを集めて、時間割りに従って授業を行っている施設だ。

その最上課程である高等部の生徒会長こそ、天下無敵の完璧超人と賞される第二学年の神代菜月であった。

容姿も然る事ながら生徒たちの人気も高く、教職員からも絶大な信頼を得ている。無理難題とおもわれるような仕事もそつなくこなし、それでいて威張ることもなく誰にでも優しい。性別年齢を問わず憧れの対象で、まさに白鳳学園のアイドル的存在である。

だが、それらも客観的な評価で、誰一人として彼女の深層心理へ入り込めた者はいない。彼女には他者に対してある種の壁がある。よほど身近な者でない限り気づくことはないかもしれないが確実に存在している。それは、世界の真実を知るからこそその拒絶なのかもしれない

そう、菜月にはもう一つの顔がある。クリスタルの神乃化身として、惑星クラリアンアースの管理者アトミニストレタとしての顔であった。

「神代、いつもすまないな……」

「いいえ、ついでのことでしたから」

昼休み。担任教師に頼まれた仕事を終わらせ、菜月にはにっこりと微笑みを浮かべた。何かと忙しい教職員のサポートするのは学生として当然のこと……。菜月は普通にそう考えていた。

段取りの良い菜月に頼めば困難な仕事もスムーズに完了する。しかも、嫌な顔一つもせず手伝ってくれる。そのため、教職員側も

菜月を頼ってしまうことが多かった。

菜月は本当に良い子である。彼女に困ったことがあれば立場とかを超えてでも手助けしてあげたい。担任教師は普段からそう考えていた。いや、この学園に集まる殆どの者がそのように考えているのではないだろうか

もちろん、菜月は純粹にお手伝いをしているだけであつて、見返りを期待しているわけではない。

それに、もし本当に困ったことが起こったとしても、菜月は一人で解決してしまうだろう。菜月が誰かを頼るなど、なかなか想像することもできない状況であつた。

「そういえば、今日転入してきたおまえの弟だが……」

「はい」

突然、担任教師がそんな話題を振ってくる。他人の口からでも弟のことを聞くのは嬉しいものである。菜月はにこにこ笑顔で担任教師の言葉に耳を傾けた。

「さつそく、一時間目をサボったらしいぞ」

ぴしっ！ 何かひび割れるような音が響いた。徐々にはあるが菜月の表情が引きつってくる。いつも笑顔を絶やさない菜月にしては珍しいことである。

担任教師にしてみれば軽い話題のつもりであつたが、菜月にしてみればそうではなかったようだ。弟の失態は姉の責任……。菜月は言葉を無くしたように項垂れてしまった。

「お、おい、神代……？」

その変化に担任教師は慌ててしまう。菜月を哀しませることなど

本意ではないからだ。

「いや、サボったといってもだな、二時間目からはちゃんと顔を出していたようだし……。何より転入試験の成績を考えても彼は優秀な方だ。それほど心配しなくても　　って、神代、どこへ行く？」
「先生……。わたし、急用を思い出しましたので、これで失礼しますね。」

振り返った菜月の表情はこれまでに見たことのないような笑顔であった。しかし、その満面の笑みにどこか違和感を覚える。担任教師は、職員室から出て行く菜月の後ろ姿を見て、ゾツと身震いを感じてしまうのだった。

本日最大のイベントといえば、このクラスに転入生が来たことである。だが、昼休みともなればそんな騒ぎも落ち着きを取り戻していた。

皆、転入生を構うのに飽きてしまったのだろうか。いや、そうではない。転入生の転入生らしからぬ態度……。ずっと以前からこのクラスにいたかのように溶け込んでいる。その一つの原因として考えられるのが、クラス委員長でもある菱木健太の存在であろう。

「あの二人、急に仲良くなったよね。」

楽しそうに対談している二人を見て、白檀薫はそんなことを呟く。
一時間目が終わったところ、陸と健太は意気投合して戻ってきた。まるで、離ればなれになっていた親友同士が再会したかのように……である。

二人が知り合いだったという事実はない。薫と同じような疑問を持ったクラスメイトの一人が、健太に確認をしたからだ。しかし、

お互いの気さえ合ってしまったえば時間など必要ないのかもしれない。自然に惹かれ合い、いつの間にか仲良くなっている。陸たちが良い事例といえるだろう。そんな二人の様子を見て、薫はなんともいえない淋しさを感じていた。

できることなら自分のあの中に入って行きたい。なぜだかわからないが、そうすることが当然のように思えてしまう

もちろん、それほど親しい間柄でないため、実際に行動を起こすには躊躇いがある。異性と関わる気恥ずかしさもあるが、何より彼らと共通の話題がない。薫から話しかけたとしても、すぐに会話が途切れてしまっただろう。何かあるとするなら不可思議事件のことだが、三日前の話をしたがない陸には、下手をすると逆効果になる。仲良くなるための決め手が無い。それこそ、再会した幼馴染みとかであれば無条件で仲良くなれるのだが、有り得ない関係を求めても意味はないだろう。

何か切っ掛けでも無いだろうか……。そんな切っ掛けは、おもわぬ方向から現れた。

ざわっ！ 突然、教室内がざわめきに包まれた。いったい何事だろう……。教室の出入り口へ眼を向けてみると、そこにはこの世界でただ一人、過去の陸を知っている神代菜月がいた。

「げっ！ 神」

泣く子も黙る生徒会長の登場に教室は騒然となる。菜月はこの学園の有名な人であるが、学年も違えば出会う確率も当然低くなる。中には生徒総会などでしか菜月を見たことのない者もいるだろう。誰もが憧れる美人な生徒会長。そんな菜月が一学年下の教室に現れるなど信じられないことであった。

そういった周りの戸惑いも関係なく、菜月はつかつかと教室の中

へ入ってくる。唾然としている陸の前までやって来て、にっこりと微笑みを浮かべた。

「神代先輩……？ 先輩がどうして……」

クラス委員長でもある健太は菜月と面識があるのだろう。しかし、菜月は健太の問いかけに反応しようとしなない。目の前の陸から視線を反らそうとしなかった。

そして 笑顔を崩さずに陸へ語りかけた。

「陸くん、ちょっと小耳に挟んだのだけど〜」

「な、菜月姉え……？」

「一時間目の授業……サボったそうね〜」

「……え？」

笑顔であるはずなのに眼が笑っていない。陸は菜月の剣幕に冷や汗をかく。彼女は陸が授業をサボったことをわざわざ怒りに来たようだ。

「ちよつ菜月姉え！ 結果的にサボることになったけど、それには深い事情があつて」

「授業をサボるなんて、あなたをそんな子に育てた覚えはありません！」

「つて、育てられた覚えはねえー！」

知っているとは思うが、陸は菜月の本当の弟ではない。それどころか、実際に知り合ったのは三日前のことである。しかも、その出会いのとき、菜月はこう言っていたはずだ。

『世界がゲームなら何をやっても無駄なこと。授業を受けること

勉強をすることだって意味は無い』

まさに正反対ではないか

もちろん三日前のやりとりは、陸の性格を確かめるためのものであつて、菜月の本意ではない。それでもこの変わりようには陸も驚かずにはいらなかった。

「だいたい、授業をサボった程度でいちいち来ることないだろ！」
「そ、そんな……。わたしはただ　陸くんのが心配で……」

菜月の瞳に涙が浮かぶ。その瞬間、明らかに場の空気が変わった。やばい……。陸は全身に冷や水を浴びせられたような感覚がした。これは怒りの気配。しかも、薫をからかっていたときに感じた嫉妬よりも数段やば気である。陸は、大汗を掻きながら、ゆっくりと辺りを見回した。

「か、神代先輩が泣いてる！」
「先輩を泣かせた……」
「転入生……、信じられねえ」

クラスメイトたちの背後に怒りのオーラが立ち昇る。こうなつてしまえば、どんなに言い訳をしたところで、怒りが治まることは無いだろう。

「菜月姉え……って、もしかしておまえ、神代先輩の　」
「いや、まあ……、そういうこと　　なんだが……」

唯一、健太だけが二人の関係に気づいたようである。だが、そのことを詳しく説明している余裕はなかった。

陸は瞬時に人の配置を確認する。クラスのみんなは菜月の周りに

集まっている。人の密度が少ないところ……。そう、教壇を經由して前の扉から飛び出せば、この殺気の中から逃れられるはずだ。

「健太……。生きていたらまた会おう……」

「つて、陸！」

別れの言葉を残し、陸は脱兎のごとく走り出す。素早い動きで人々を交わしながら、陸は教室を飛び出した。

続いて、怒れる生徒たちが陸を追って教室を飛び出す。男子生徒だけではない。健太や薫を除いた殆どの生徒が、陸の後を追いかけてきた。

「転入生、待ちやがれー！ー！」

怒濤な勢いで追いかけてくる生徒たち……。菜月を泣かせた噂は瞬く間に学園中へ広がり、陸を追う生徒の数はねずみ算式に増えってしまう。

まさに生命の危機である。陸は殺人鬼と対峙したとき以上の恐怖を感じていた。

人生とは何が起こるかわからない。だからこそ面白いといえるのかも知れないが、中には遠慮しておきたい出来事が発生することもある。この世に生まれ出でて約十六年　今がその時なのだろう。神代として再出発をしたその日、陸は謂れの無い非難によって人生の終焉を迎えようとしていた。

まさに集団パニック……。学園中の生徒が血眼になって陸を捜している。奴らに見つかればただでは済まない。決して捕まるわけにはいかなかった。

もちろん、皆の気持ちも良くわかる。もし陸が当事者ではなく、菜月が泣かされているのを見かけたら、たとえ相手が誰であろうと理由も聞かずにぶん殴っていたはずだ。

菜月にはそれだけの魅力がある。その必要があるかは別にして、菜月にはか弱いオーラが発せられていて、護つてあげなくてはいけない気分になってしまう。陸もそんなところに惹かれてはいるわけだが、今回のことは明らかに理不尽な仕打ちであった。菜月が不用意に涙を見せたことで、陸は学園全体を敵に回してしまったからだ。

既に昼休みは終わっているにもかかわらず陸を捜している生徒の数は少なくない。そのため、教室へ戻るわけにもいかず、陸は再び授業をサボることになってしまった。このことを知ったら菜月はまた哀しむだろうか……。しかし、結局のところ菜月の所為なのだ。これは完全に不可抗力である。

それにしても、いまだ陸を捕まえようとしている連中は、菜月がどうして泣くことになったのかを知らないのかもしれない。自分たちも授業をサボっていたら本末転倒であろう

とにかく、熱りがさめるまでどこかに身を隠さなければならぬ。陸がそんなことを考えていると、二階から人が降りてくる気配を感じた。慌てて引き返そうとするが、校舎の出入り口や奥からも陸を捜し求める声が聞こえてくる。闇雲に捜し回るのはなく、人手を使ったローラー作戦に出たようだ。

困まれてしまった陸は、完全に逃げ場を失った。

そのとき、陸の真後ろに気配が現れる。

まさか、階段の死角に敵が潜んでいたのだろうか……。陸はおもわず身構えてしまった。

「神代くん、こっち！」

突然そんな声が聞こえ、陸の腕が引つ張られる。驚いた陸が確認すると、そこには授業に出ているはずの薫の姿があった。

「か、薫！ おまえ、こんなところで何やって……」

「いいからこつちに来て！」

小声で囁く薫に、陸は素直に従った。追っ手を倒して無理矢理逃げ出すことも可能だが、ここは薫を信じてみることにしよう。

とはいうものの、この先は行き止まりのはずである。死角になっているとはいえ、人の姿を完全に隠せるほどのスペースは無い。まして、怪しい場所であるため真つ先に調べられ見つかってしまうのがオチであろう。選択を間違えてしまったか……。陸が後悔したとき、薫はスチール製ロッカーの扉を開いた。そう　いわゆる掃除用具入れである。

「え〜つと、薫……さん？」

薫は、問答無用に陸を掃除用具入れに押し込む。そして、何を思ったのか、自らもその中へ入り込み、内側から扉を閉めてしまった。ほぼ同時に追っ手らの声が聞こえてくる

『こつちにはいないみたいだな……』

『よし、次は旧校舎を捜すぞ！』

そう言い残し、追っ手の気配は遠ざかっていく。すると、辺りは急に静寂となる。その途端、陸は己の置かれている状況を改めて意識せずにはいられなくなった。

なんてベタな展開なのだろう。陸は今、暗くて狭い密室　実際には掃除用具入れだが　の中で、薫と抱き合うような体勢になっていた。

どきどきどき……。薫の心臓が激しく鼓動しているのを感じてしまう。

やゝめくく〜れ〜れ〜。なるべく動かないように様子を確認すると、薫は耳まで真っ赤になって俯いていた。そんな様子を見せられたら、おもわず意識してしまうのではないか……。陸は、赤面した顔を悟られないよう、視線をそらせながら呟いた。

「いった……。ようだな……」

「そ、そうみたい　だね……」

「再びの沈黙、会話が続かない

密着して伝わってくる体温や、なにやら漂ってくる甘い香りに陸の頭はくらくらしてしまう。追っ手もいなくなって外へと出れば問題ないのだが、緊張のためか身体が硬直して思ったように動いてくれない。薫も同じ状態なのか、固まったまま動こうとしなかった。

「あの……。神代　くん」

「ひゃっ、ひゃいっ！」

てんぱっているため、陸は意味不明な奇声を上げてしまう。そんな陸の様子も気にせず、薫はゆっくりと喋り始めた。

「神代くんはあまり話したがらないけど……。三日前のあのとき、神代くんが助けてくれなければ、わたしは間違いなく殺されていた……」

それは、サフィのアヴアターとなって、芹沢陸の存在が消えてしまったときのこと。陸にしてみれば襲われている幼馴染みを助けただけなのだが、薫にとっては見ず知らずのヒーローに命を救ってもらったことになるのだ。とても嬉しかったのだろう。

「あのときは、本当にありがとう。わたし、ちゃんとしたお礼がしたくって」

不意に顔を上げたため、陸と薫は見つめ合うような形となった。事實は違っているが、身体を寄せ合って今にもキスしそうな体勢に薫は慌てふためいてしまう。視線が泳いで焦点が定まらない。そのパニックった様子を見て、陸は逆に落ち着きを取り戻した。

いつもの薫だ

芹沢陸という幼馴染みが消滅して雰囲気までも変ってしまったと思われていたが、どうやらそれは勘違いだったようである。人間の本質はそう簡単に変わらないようだ。

白檀薫は、菜月に負けないほど可愛いと評判になっている。そんな薫に見つめられたら、大抵の男ならどうにかなってしまっだろう。しかし、陸にとっては手のかかる幼馴染みに過ぎない。そういった特別な感情は持ち合わせていなかった。

「そうだな……。どうしてもお礼がしたいというのなら　これが
らオレのことを陸って名前と呼んでくれないか？」

「え？　それってどういう……」

「つまり……だな。お礼なんてこの際どうでもいいんだよ。オレは、おまえと仲良くなりたいたいんだ！」

一瞬、薫は陸が何を言っているのかわからなかった。だが、その意味を理解したとき、これまで以上に真っ赤になってしまった。

こんな状況でそんなことを言われたら、愛の告白だと勘違いしてもおかしくはない。いや、実際に薫は、それに近い意味合いで受け止めてしまっていた。もちろん、陸はそんなつもりで言ったわけではない。ただ、これまでと同じように、薫と仲良しな関係に戻りたかっただけである。

「あの、あのっ！　じゃあ……、陸……くん？」
「おう」

陸は嬉しさのあまり満面の笑みを浮かべる。健太に続いて薫との関係も修復することができた。とにかく散々な一日ではあったが、成果としては上々ではないか

それにしても、陸はなんとも罪作りな男である。幼馴染みとしての関係を修復させるため、少女の純情を奪ってしまったのだから。

まあ、このことが無かったとしても、薫が陸に惹かれ始めるのは時間の問題だったはずだ。なにしろ出会いの印象が強烈過ぎる。薫にしてみれば、運命の出会いであったといっても過言ではないだろう。そんな運命の人から仲良くなりたいと宣言されて薫は舞い上がってしまう。できればもう一步、陸との関係を深めてみたい。薫は意を決して、とある提案を口にした。

「り、陸くん……。良かったら今日、一緒に帰らな……」

がちやっ！　そのとき、何の前触れもなく掃除用具入れの扉が開かれた。驚いた陸と薫が開かれた扉の方を見ると、そこには不機嫌そうな表情を隠しもしない菜月が立っていた。

「ななな、菜月　姉え……」

「か、神代先輩！」

「……。あなたたち、いったい何をしているの？」

授業も終わり、ジュエルトタイプ携帯端末の特殊な波動を辿ってきたのだらう。菜月は迷うことなく陸の所在をつきとめた。

最初は、騒ぎに巻き込んでしまって申し訳ないといった気持ちがあつたかもしれない。そんな気持ちを吹き飛ばすほどの衝撃的な光

景……。狭くて暗い掃除用具入れの中、陸が女の子と抱き合いながら、見つめ合ってキスをしようとしていた。そのことはまったくの勘違いであったが、誰が見たとしても菜月と同じことを考えてしまっただろう。

菜月は、身体をびくびくと震わせながら、普段は押さえている感情を爆発させるように大きく叫んだ。

「陸くん！ ちょっとここに座りなさい！」
「は、はい！」

突然、大声で説教を始めた菜月。周りにはどんどん野次馬が集まってくる。陸が言い訳を試みるも、菜月はまったく聞く耳を持たない。

普段は優しい菜月だが怒ると怖い……。後に神代菜月伝説の一つに数えられる『神代菜月の御立腹』はこうして発生したのだった。

放課後、長い説教を聞き終えた陸は、菜月に連れられて生徒会室へやって来ていた。ちなみに、説教からかなりの時間は経っていたが、菜月の機嫌はいまだ直っていないかったりする。

「だから、あれは菜月姉への勘違いだって言ってるだろ？」

「陸くん、みつともない言い訳はお止めなさい」

「み、みつともないって……」

そもそも、何をそんなに怒る必要があるのだろうか。陸が誰とどうなるうと菜月には関係ないことである。まるでやきもちを焼いているような いや、家族として不純異性交遊に過敏となっているだけなのかもしれない。まったくの見当違いではあるのだが……。

「陸くんは、もっと女の子関係をしっかりすべきです！ もしサファイちゃんが見ていたらどうするつもりだったんですか？」

「まあ、サファイに見られるのはちょっとまずいかな」

三日前、薫と一緒に帰っていただけであんなに騒いでいたぐらいだ。男女が身体を寄せて見つめ合っている姿など、ちびっ子のサファイには刺激が強すぎる。

また、そういうことに興味を持つ年頃であるため、下手をすればいろいろと質問されることになるかもしれない。しかし、質問されても陸自身がそれほど詳しくないため答えようがない。それでは、お兄ちゃんとしての沽券に関わってくる。ここは質問される状況を作らないほうが得策であった。

「それだけではありません！ あんなところを優子さんに見られてもしたら、わたしまでからかわれることに」

「……………？　なんで菜月姉えがからかわれるんだ？」

「いやっ！　そ、それは」

少なからず陸のことを意識している菜月は、そのことで優子にからかわれることが多かった。

優子は忙しい合間を縫って菜月にアクセスしてくる。この好機チャンスに告白しちゃえ　とか、サファイちゃんはわたしが預かることにするから二人つきりで暮らしてみる？　など、いろんなことを言うだけ言って消えてしまうのだ。その度に菜月は陸を意識してしまうことになる。

この調子ならそう長くない未来、本気で陸のことを好きになってしまうかもしれない……。そんな考えに辿り着いた菜月は、恥ずかしさのあまり頭を抱えて悶絶してしまった。

菜月の奇行を目の当たりにして、陸はおもわず唾然としてしまう。その視線に気づいた菜月は、恥ずかしそうに頬を染めながら 平静を装って陸と向かい合った。

「え、こほん……。それでは本題に入りますね」

「人払いまでしているんだから、クラリオンアースの管理者としての話だろ？」

そう、今この生徒会室には陸と菜月だけしかいない。菜月が他の役員になんだかんだと用事を言いつけて誰も残らないようにしていたからだ。

しかも、優子やサファイがアクセスしていないタイミングを見計らった話である。エターナルアース側のプレイヤーには聞かせたくない内容なのだろう。

「そう、サファイちゃんを抜きにして、陸くんに話しておきたいことがあったの……」

「ふむ、つまりはオレたち神乃化身アヴァターについての話というわけか」「理解の早い子は好きですよ」

自分で口にしておいて、なぜか頬を染めて照れてしまう菜月……。しかし、鈍感な陸は何一つ気づくことはなかった。

「で、ユーザーを抜きにして話すことって何なんだ？ まさか、いまのシステムが気に入らなくて、ユーザーに反旗を翻そうって相談か？」

「うーん、そんな過激な考えはどうかと思うんだけど……。それに、このクラリオンアースが創られた世界だっていうのなら、わたしたちにはプレイヤーをどうすることもできない。どうにかできるのは、

わたしたちの世界　　クラリオンアースに関することだけ……」

たしかに陸たちゲームキャラクターがモニターの向こう側にいるプレイヤーをどうにかできるとは思えない。まあ、一緒に住んでいるサファイならなんとかできるかもしれないが、陸が彼女に危害を加えることは絶対にありえない。また、彼女に危機が迫るものなら、陸は全力で阻止するだろう。陸にとってサファイは妹のようなものだからだ。

「それで、菜月姉え……。結局は何が言いたいんだ？」

「そうね。優子さんの創ったこのアヴァターシステムは、多少の問題があるのは間違いないことだけど、わたしはプレイヤーたちがクラリオンアースへアクセスしてくることはとても素晴らしいことだと思っているの……」

かなり意外な発言である。どうやら菜月は、このアヴァターシステムを肯定しているようだ。

そうでなければ、このリアルネットゲームが始まる二年も前にアヴァターとなっていなかっただろう。菜月は、優子から世界の真実やゲームシステムを聞かされて、納得したうえで管理者となっていたのだから……。

己の存在を消滅させてまで管理者となった菜月の気持ち　　陸にはまったく理解することができなかった。自分と同じような犠牲者が出る前に、このような理不尽なシステムは無くなったほうが良いのではないか。それが陸の正直な考えであった。

「素晴らしいこと……。ねえ」

「陸くんの言いたいこともわかる。でも、わたしたちが反対したとしても、このゲームが無かったことになるわけじゃないでしょ。わたしたちの知らないところでゲームは確実に進行していく。その過

程で何があつたとしても関係の無い者は蚊帳の外」

「それは　不可思議事件のことを言っているのか？」

その問いかけに菜月はこくりと頷く。アヴァターの仮契約者が起こしたあの事件。菜月の言うように、陸がアヴァターとならなければ解決しなかつた事件である。

「ゲームの進行が止められない以上、アヴァターによる事件はこれからも続くはず。アヴァターに対抗できるのは同じアヴァターだけ……。アヴァターだったからこそ不可思議事件の犠牲者を生き返らせることができた。わたしは自分がアヴァターであつて良かったと考えているわ」

「ふむ、なるほどね。菜月姉えの言いたいことはだいたいわかつたよ。まあ、オレはもうアヴァター契約しているわけだから、いまさら騒いだところでどうすることもできないしな」

仮契約の時点でなら考え直すこともできただろうが、陸はサファイとアヴァター契約して既にリアルネットゲームへ参加していることになっている。このリアルネットゲームがいつたいどんな遊びなのかわからないが、もはや後戻りすることなど出来ないのだ。

「そこで陸くん……。わたしの手助けをしてもらえないかしら？」

「菜月姉えの　手助け？」

「プレイヤーがクラリオンアースにアクセスしてくるのは賛成よ。でも、そのことで発生するであろう様々な厄介ごとを黙認することはできない。誰かが不可思議事件のような厄災を止めなくてはならないの……」

「ちよつ、それって菜月姉えの　管理者としての仕事じゃないか！　どうしてオレが……」

「わたしの管理者としての能力は、不可思議事件の被害者を助ける

ためにほとんど消えてしまった。相手がアヴァター契約者であった場合、戦いになっても勝つことはできない……。だから陸くんにはわたしの代わりに　クラリオンアースの人間としてこの世界の秩序を護ってほしいの」

管理者としての能力は、他のアヴァターに比べて強めに設定されている。だが、死者を蘇らせるといふ離れ業を繰り返した結果、管理者としての能力はほとんど消失してしまった。このままでは、アヴァターが事件を起こしたとしても、止めることすら難しいわけだ。

「陸くんも言っていたように　この世界がたとえプログラムで出来ていたとしても、それが好き勝手をして良いという理由にはならない。この世界の人たちは、ちゃんと生きているのだから……」

「それで、オレに他のアヴァターと戦えと？」

「いいえ、絶対に戦うといった必要はありません。でも、相手の出方によつては戦いになる可能性もある……」

互いの意見がかみ合わない場合、争いになってしまうことも考えられる。もし相手の主張がクラリオンアースの平和を脅かす内容であれば、倒してでも止めなくてはならないだろう。

それにはまず力が必要となる。そして、同じジュエルナイト宝石騎士のアヴァター神乃化身であればこそ、元となる人間の能力によつて強さが決まってくるわけだ。

「陸くん、何か格闘技をしている　わけないよね。それなら、陸くんにはこれを渡しておくことにしましょう……」

そう言つて、菜月は右手を前方に突き出す。その瞬間、目の前の空間に波紋のような揺らぎが広がる。菜月はその波紋に手を入れて、巨大な何かを引っ張り出した。

それは宝石のような美しい刀身を持った大剣である。菜月は刃先を回転させて、大剣の柄を陸へ差し出した。

「光竜アレキサンドライトの精霊力を結晶化させた　かつてエターナルアースに存在していたアウインの勇者シヨウが持っていたとされる聖剣クリソベリルよ」

「せ、聖剣クリソベリル……」

あまりの美しさに陸は息を呑んでしまう。そつと柄に手を触れてみると、まるで生き物のような暖かさが感じられた。

陸は両手でしっかりと柄を握りしめる。それを確認した菜月は、徐に聖剣から手を離す。その途端、聖剣クリソベリルは信じられない重さとなった。

「ぬおおー！」

なんとか持ち上げることができているが、これを振り回すことなど不可能であろう。重さに耐えきれなくなった陸は、おもわず聖剣クリソベリルを落としてしまう。聖剣クリソベリルは、床に到達する前に何もないう空間へと吸い込まれていった。

「聖剣クリソベリルはアウインの勇者でしか扱うことができない。でも、持っているだけでその恩恵にあやかることができるから、しばらくは陸くんに預けておきますね」

「預けるっていったって、消えてしまったんだけど……」

「ただ消えたわけではありません。陸くんの私的空間に移っただけで

す

プライベート

「私的……空間？」

「わたしも詳しく知らないけど、アヴアターにはそういった特殊空間が用意されているみたいなの。私的空間には武具などを保管して

おいて、有事の際にはジュエルタイプの携帯端末を通じて、自由にそれらを取り出すことができるそうよ」

「なんか、おもいつきり戦闘を想定したシステムだな」

「あははっ、その意見は否定できませんね……。あと、聖剣クリソベルル以外にも巨大口ポットを呼び出せる牙龍鳳翼剣がりゅうほうよくけんつて大剣もあるんだけど、ジュエルナイトを相手に超鳳神グランソルでは勝てないでしょうし」

意味不明の単語もどんどん飛び出してきたが、陸は決して深く聞こうとはしなかった。

聞いてしまえば、さらに取り返しがつかない状況へ追い込まれそうで怖い。これ以上厄介ごとに巻き込まれるのはさすがに遠慮したい。そのためには、あまり詮索しない方が得策であろうと陸は考えるのだった。

第7話 結晶幻想曲 〈クリスタル ファンタジー〉

陸たちの住む洋館から少し進んだ森の奥に古い神社があった。サ
ファイの実家で管理している金緑石の樹神神社である。

そんな神社の敷地内。社の裏側を少し進むと、これまた古いプレ
ハブ小屋が見えてくる。倉庫代わりの物置であろうか。いや、そう
ではない。このプレハブ小屋の中には貴重なお宝が隠されていた。
そのお宝とは、いまや全世界で一千万台以上も稼動しているプラネ
ットメーカーの原点 開発段階の試作機であった。

しかも、ただの試作機ではない。発売から二十五年が経過してい
るにもかかわらず、創造された数は僅か三つ。ブルーアース型と呼
ばれる満々と水を湛えた奇跡の惑星『ブループラネット』 『プラネ
ット・マナ』 『クラリオンアース』。それら三つを創造した装置こ
そ、この試作機であった。

プラネットメーカーで擬似惑星創造を行なっているユーザーにと
ってはまさに超一級のお宝である。一度で良いから、この試作機で
惑星創造をしてみたい……。プラネットメーカーのユーザーなら誰
もが考えることだろう。もちろん、現在はこのシステムを使って世
界的なイベントが進行中なため、絶対に初期化リセットすることはできない
のだが

プレハブ小屋に入ると、機材や接続ケーブルの剥き出しなプラネ
ットメーカーが設置されている。その中央に直径三メートル・高さ
四メートルほどの円柱状ガラスケースがある。そして、そんなガラ
スケースの中に浮かぶ青く美しい惑星こそ、陸たちが唯一の現実と
信じて疑わない この物語の舞台でもあるクラリオンアースであ
った。

やたらアナログ的な入力装置を駆使して、モニター上のシステム

ログを確認している美少女がいた。人の動きとは思えないほどのスピードで入力装置を操作し、下から上へと超速で流れる記号の羅列を信じられないスピードで読み続けている。時折、唸りながら小首を傾げるが、その手が止まることはまったく無かった。

素顔を晒しているためわからないかもしれないが、この美少女は擬惑星を創造するための装置プラネットメーカーを開発し、現在クラリアースで展開されているリアルネットゲームを組み上げたあの如月優子であった。

そしてもう一人、背後から優子を見守っている女性がいた。見た目二十歳前後で、優子にも負けないほど美人な女性……。惑星クラリアースを創造した世界で一番有名なプラネットクリエイター。名前を野乃原真菜という。

「優子さん。少しお休みになられたらどうですか？ 徹夜の作業は身体に良くないですよ」

真菜は一向に休もうとしない優子を心配する。しかし、集中しているためか、優子はまったく反応しようとしなない。のめり込んだら回りのことが一切見えなくなる性格は相変わらずのようである。そんな様子に真菜は大きなため息を吐く。優子の後ろに立ち、両手でそつと目隠しをした。

「だ〜れだ」

その瞬間、優子は手の動きを止め、辺りは静寂に包まれた。

「……………」
「え、え〜つと……………」

優子は電池が切れたおもちゃのようにピクリとも動かない。こん

なとき、相手が何の反応もしてくれないと気恥ずかしいものである。真菜はおもわず顔を赤らめて、何事も無かったかのように優子の視界を解放した。

「真菜ちゃん、いったい何のつもり？ いまは遊んでいる場合じゃないのよ」

「いやっ、その……」

ジト目で振り返る優子にどきまぎしてしまつ真菜だったが、当初の目的を思い出し慌てて進言した。

「ですから、優子さんは少し休憩すべきです。システムチェックなら わたしがやりますから」

「でも、真菜ちゃんは古代精霊文字を読めないでしょ？」

「うっ、それは……」

じつにもっともな意見である。プラネットメーカーは異世界の技術が数多く取り入れられている。なかでもメインシステムには時間や空間を操ることのできる時空石が埋め込まれており、その制御には古代精霊言語で組まれたプログラムが使われていた。純粹な人間族である真菜には、モニターに表示される文字も意味不明な羅列しか見えないだろう。

〈リオドル アウター

「だいたい、あなたがちゃんと自分の神乃化身を選んでくれていたら、菜月ちゃんとの管理者二人体制でゲームが進行できていて、こんなに苦労することもなかったはずなのよ」

「いや、そうなんですが……、今までの人生を無かったことにして管理者になつてくれ クラリオンアース だなんて、なかなか言えなくって」

「管理者になれば『世界の半分をそなたに与えよう』とでも言えば、何人かは契約してくれるんじゃない？」

「あなたは、どこの魔王ですか……」

真菜は大きなため息を吐く。優子が言うと冗談に聞こえないから恐ろしい

「でも、このイベントクリスタルファンタジー結晶幻想曲には、十二人の神乃化身の他に二人の管理者アトミニストレータが必要となる。二人の管理者がそれぞれ六人の神乃化身アウターの行動を監視して、必要があれば強制力を発動させてゲームから除外させなくてはならない……」

「たしかに、今回の不可思議事件は大変でしたからね」

「その犯人は、あなたの管轄じゃなかったかしら？」

「ほうあっ！」

「まあ、いまの真菜ちゃんは二人同時に告られて、イベントどころじゃないかもしれないけど……」

「ちよっ！ どうして優子さんがそのことを知ってるんですかー
ー！」

「あら、ちよっと前からネットに情報うわねが流れているわよ。五年前の事故に関わった神倉くんトウジと健介ちゃんケンケイだっけ？ わたしとしては、健介ちゃんがお勧めかな」

おもわぬ攻撃を喰らった真菜は、両手両膝を地面について頂垂れる。私生活プライベートがネットに丸流れとは、いったいどういう状況なのだろうか……。まあ、いつものことであるため、半分諦めてはいるのだが

「そうそう。その情報うわねを見た映画会社スタジオが『プラネット・マナ』の次回作に着手したって記事も載ってたわよ。三作目が公開されて間もないのに、気が早いわよね」

「あははっ、もう勝手にしちゃってください……」

野乃原真菜は何かと有名人である。五年前の事故を皮切りに真菜の人生が二度も映画化されていた。第四作目は、数ヶ月前に誕生させた惑星クラリオンアースを題材にした作品になると噂されていたが、この様子なら神倉昴かみくらすばると遠野健介とほのけんすけを交えた三角関係が展開されそうだ。それこそ、有ること無いこと本人の都合はお構いなしに

「あ、そうだ。二人にも結晶幻想曲クリスタルファンタジーのライセンスを特別に発行するから、そのアヴァター同士に勝負させて勝ったほうと付き合うつてのはどうかな？」

「なっ！」

「うん、そうしよう。どうせ真菜ちゃんのことだから、ずっっと好きだった初恋の先輩と、気になり始めている幼馴染みのどちらも選べそうにないでしょ。それなら、二人のアヴァターに勝負させて、その勝者と付き合うつてことにしたら面白いかも」

「ちよっ、優子さん！」

「これは激しい戦いになりそうね。そうになると、映画五作目のために勝負の様子を録画きくわしといった方が良いかしら？」

そう言つと、優子は新たなイベントを組むために複数のプログラムウインドウを表示させる。凄まじいスピードで、なにやら複雑な言語を駆使して、イベント制作に取り掛かった。

「まずい……。このままでは本当に昴と健介を巻き込んだイベントが始まってしまうことになる。」

慌てた真菜は、ノリノリでプログラムを組む優子の身体にしがみ付く。そして、やや大げさな動作で腕を振り上げ、勢い良く操作パネルを平手打ちした。

「バシッ！ 小気味の良い音が響き渡る。若干、手の平が痛かったものの、真菜は大声を張り上げて抗議した。」

「優子さん、いい加減にしてください！ 二人に迷惑をかけるとい

うなら、今後一切、クリスタルファンタジー結晶幻想曲には協力しません！」

きつく言い過ぎただろうか 優子は言葉も無く固まってしまふ。だが、優子の暴走を見逃せば、とんでもない事件に発展するのは明白である。ここは、心を鬼にしても、優子の悪乗りを止めるべきだ。

しかし、なにやら優子の様子が変わる。優子は騒いでいる真菜にはまったく反応せず、モニターに映し出される古代精霊言語へと意識を集中している。小刻みに身体を震わせて顔色はやや青ざめていた。

不思議に思った真菜は、優子が凝視しているモニターへと視線を向けてみる。相変わらず意味不明で理解できない記号の羅列が下から上へと流れている。いや、一瞬ではあったが 真菜にも理解できる文字が眼に入った。

Blue Spinel set up……

どうやら、操作パネルを平手打ちしたときに、何らかのプログラムを起動させてしまったようである。

「……………あ、あれ？」

「ああああー！ な、なんてことを！」

我に返った優子が叫びながら入力装置を操作するも時既に遅し……。操作中のプラネットメーカーには、これまでに無かったような変化が現れた。

ガラスケースの中に浮かぶ惑星クラリアス。その衛星軌道上に小さく眩い光が現われた。

未確認飛行物体UFOか、はたまたプラズマ生命体クリッターか……。光はまるで生体のようにうごめいて、程無くして人の形となる。

長髪をなびかせた十六歳ほどの少女　いや少年の姿で、手には蒼い長槍が握られている。そして何より眼を引くのが顔の上半分を覆い隠そうかというその仮面であった。

無機質な仮面によって少年の表情まではわからないが、口元が僅かに上がっているところを見るとどうやら微笑んでいるようだ。

青く美しい奇跡の惑星を、少年はジツと見つめる。不意に長槍を振り回したかと思うと、切っ先を真上に突き上げて大きな声で叫んだ。

『来い、リーンウィック！』

その瞬間、目の前の空間に魔方陣のような大きな紋様が現われる。紋様からは龍の形をした巨大な聖獣機がゆっくりと出現した。

龍の額に飛び乗った少年は、光に包まれながら内部へと吸い込まれていく。すると、龍は命の炎が灯ったかのように動き出し、惑星クラリオンアースの大気圏へと突入して行った。

少年の目指す先は結晶幻想曲の行われている金緑石……。この少年が何者なのか今はわからない。だが、菜月に代わって管理者となつた陸と関わってくることは、まず間違いないだろう。

生徒会の仕事がある菜月だけを学園へ残し、手持ち無沙汰な陸は新しい我が家へと帰ることにした。生徒会室を出る直前、菜月は待っていてほしそうな顔をしていたが　そんな心情を察することができるほど陸は鋭くなかった。

学園の敷地から出ると、途端にサファイからの通信が入る。どうや

らサファイは、既に洋館へと戻っていて、自分の部屋のメイン端末からアクセスしているようだ。

『ねえリク。今日、学園で何かあったの？』

網膜へ直接映し出されたサファイがそんなことを聞いてくる。

『何かって、どうしてそんなことを聞くんだ？』

『うん……、リクの能力値ステータスが今朝見たときから信じられないほど跳ね上がっているのよね』

『って、ちよつと待て！能力値ステータスって何だ！』

あまりの驚きに、陸はおもわず声に出して叫んでしまいそうになる。何も無い道端で突然叫び出したら、危ない人に間違えられてしまいそうだ……。

『ほら知らない？レベルやHPヒットポイント、生命力なんかは数値で表示されるやつ』

『いや、それは知ってるけど……』

ますますゲームな感じである

まさか、自分の身体能力が数値化されて、監視モニターされているとは思ってもしなかった。ちよつとだけ、自分の能力値ステータスを見せて欲しいと思っただけの内緒である。

『でも、ほんとうにどうしちゃったの？ノーマル状態から、スーパークラリオン星人になっちゃったみたいだよ』

『なんだよそのスーパークラリオン星人ってのは……？』

説明によると、陸たちの住む惑星は、サファイたちの住む地球から

太陽を挟んで反対側にある　という設定らしい。太陽の陰に隠れているため観測もできないが、昔からその存在が囁かれ続けている『反地球クラリオン』である。

こういった説は、陸たちクラリオンアース側にも同じように存在している。陸から言わせれば、サファイたちこそ反地球の住人　クラリオン星人であった。

そんなどうでも良いことは置いて……。サファイの言う能力値ステータス大幅アップとは、菜月から聖剣クリソベリルを受け取ったことが影響していると考えられた。

菜月は、聖剣を持っているだけで恩恵にあやかることができると言っていた。その恩恵が何なのかわからないものの、聖剣を受け取ったことで陸の基本能力値がパワーアップしたのは間違いなさそうだ。

『リクってそのうち、髪の毛が逆立って金髪になるんじゃない？』

突拍子も無い内容にリクは深いため息を吐く。おそらくエターナルアース側の漫画か小説のネタなのだろう。

『まあ、なんにしてもサファイには関係ないことだよ』

『ちよっ！　リクはサファイのアヴァターなんだから関係なくはないよー！』

つれない言葉にサファイは向きになってしまふ。しかし、陸がクラリオンアースの管理者代行となったことは、しばらくの間、内緒にしておいた方が良くかもしれない。話してしまうことで、サファイにいらぬ心配をかけさせてしまうからだ。

少し前の　生徒会室での会話を陸は思い出していた。

自分の代わりにクラリオンアースの秩序を護ってほしい……。菜月からそんなことを頼まれた陸は、ふと疑問に思ったことを口にした。

「発生するであろう厄災を阻止するにしても、どうしてサファイには伝えないんだ？ オレがサファイのアヴァターである以上、やっぱり知らせておくべきじゃないのか？」

「これから大変な事件が起こるから、犯罪者と戦ってちょうだいとでも言っつもり？」

「ふむ、なるほど……」

説明してしまえばサファイも協力してくれるはずだ。しかし、陸たちの都合でサファイを巻き込むわけにはいかない。それに、必ずしも事件が起こるとは限らない。やはり、いらぬ心配をさせるだけである。

「さつきも言っただけど、プレイヤーは何も考えずにこのクラリオンアースの世界を楽しんでほしいの。もちろん、ゲームの過程において、正義の味方になるという選択もあるでしょうけど、それを選ぶのはあくまでもプレイヤー。わたしたちキャラクターがプレイヤーの行動を強制することはできないわ……」

先日、成り行きで不可思議事件を解決してしまったが、それはサファイの参加しているリアルネットゲームクリスタルファンタジー結晶幻想曲の目的ではない。アヴァター仮契約者の陸とその友人が襲われたため、サファイも仕方なく戦っただけなのだ。

「サファイちゃんには、もっと自由にクラリオンアースでの状況を楽しんでもらわないと……。だから陸くんには、何か事件が起こった場合でもサファイちゃんには目的を悟られないよう 偶然を装って

対処してほしいの……」

つまり、サフィには管理者代行であることを気づかれるな　そういうことである。

プレイヤーとアヴァターの関係を考えるとかなり難しい注文であった。いずれはサフィにも知られてしまうことになるだろう。だが、そのときが来るまでに、サフィがクラリオンアースで本当にやりたいことを見つけられる手助けをしてあげたい。菜月の話を聞いているうちに、陸はそう考えるようになっていた。

このクラリオンアースでサフィがやりたいこと……。以前にも聞いたことはあったが、陸は再びそれについて質問してみることにした。しかし、陸はその機会を逸してしまうことになる。質問しようとした瞬間、何者かが勢いよく陸の身体に飛びついてきたからだ。

「って、何だー！ー！」

他のアヴァターが攻撃してきたのだろうか……。いや、どうやらそうではなさそうである。

激しい息遣い。ねちよりとした生暖かい何かが陸の顔を撫で回してくる。伸し掛かる巨大な何かは全身が白い毛で覆われていた。そう、古くからペットとして飼われている動物の代表格　いわゆる犬であった。

しかも、グレート・ピレニーズやピレニアン・マウンテン・ドッグと呼ばれている超大型犬で、そう簡単に押し戻すことはできない。陸は顔を舐め回されながら、伸し掛かってくる犬を必死になって支えていた。

「って、おまえもしかして、ユーク……ユークレースなのか？」

「はっはっはっ、ばっつっ！」

名前を呼んだ途端、ユークレースは激しく尻尾を振りながら陸にじゃれついてくる。そう、陸はこの犬に見覚えがあった。

『えっ、何？ リク、このわんちゃんのこと知ってるの？』

『ああ、芹沢ちん家で飼っているユークレースだ』

『へえ、ユークレースか。いいな、サフィもさわってみたい……。ねえリク、今からその子、神代つち家に連れてきてよ』

『そんなわけにはいかないだろ……。つていうか、なんでユークがこんな所にいるんだ？』

頭を撫でながら、陸はユークレースの身体を確認する。胴輪とリードが付いているため、どうやら散歩中のものであった。

まだ芹沢姓であった頃、ユークレースを散歩させるのは陸の役目だった。陸がいなくなった今、この時間帯に散歩させることができないのは一人しかない。

「ユーク！ どこ、どこにいったの〜！」

どこからかユークレースを呼ぶ声が聞こえてくる。その声にユークレースはのっそりと振り返る。視線の先には、突然走り出したユークレースを捜している女の子の姿があった。

『ねえリク、あの子って……』

『ああ、芹沢せりざわ美優。オレの本当の妹だな』

『本当の 妹……』

なぜか複雑な表情をするサフィだったが、そんな僅かな変化を鈍感な陸が気づくはずもない。その鈍さが原因で、この後サフィがと

んでもない騒ぎを起こすことになるうとは、このときの陸には想像もつかなかった。

「あつ、ユーク！　こんなところに　　つて、だ、大丈夫……ですか？」

ユークレースのよだれでべちよべちよな陸を見て、美優は瞬時に状況を把握したようである。

「ん、ああ、大きい犬の扱いには慣れているから大丈夫だよ」

「ご、ごめんなさい！　普段は大人しいんですが、今日はどういうわけか急に走り出しちゃって……」

しっかりとリードを掴み直し、美優はぺこりとお辞儀する。たとえ温和な性格の犬だとしても、知らない人に見れば巨大な獣が襲いかかってきたことになる。故意ではなかったとはいえ、散歩中にリードを放してしまったのは美優である。怒られても仕方のないことだ。

もちろん、陸が美優を怒るなんてことはありえない。陸にしてみても、今回のユークレースの行動はもの凄く珍しいことだと思えたからだ。

「もしかして、このユークって子、陸のこと　覚えてるのかな？」

「はあ？　そんなはずないだろ……」

「でも、この喜び様は初めて会った人に対してじゃなくって、久しぶりのご主人様に甘えてるような感じだよ」

「まあ、いわれてみれば　　そうなんだが……」

それが証拠に、ユークレースは陸から視線を外さずに、お座りを

して激しく尻尾を振り回している。遊んでくれオーラがひしひしと伝わってきた。

アヴァター契約したことで、芹沢陸の存在はクラリオンアースから消滅している。最初から生まれていなかったことになっていた。だから、陸とユークレースとの接点は何もない。ユークレースが陸のことを知っているはずはないのだ。

「あ、あの……。服、汚れちゃったから……。クリーニング代を……」

ぼくっとして陸を見て、美優は恐る恐る声をかけてくる。サイと心の中で通話して無言だったため、怒っているのだと勘違いしたようだ。

すると、何を思ったのか、陸は困り顔の美優にゆっくりと手を伸ばす。叩かれるとでも思ったのか、美優はビクッと身体を竦ませる。そんな様子に苦笑しながらも、陸は美優の頭を優しく撫でた。

「なあゝに子どもが気を使ってるんだか……。クリーニング代なんていらないよ」

突然、頭を撫でられて驚いたのか、美優は陸の顔をジッと見つめる。照れているのか、その頬は僅かに赤らんでいた。

「こ、子どもじゃありません……」

「あははっ、悪い悪い」

子ども扱いをされて、怒ったように頬を膨らませる美優……。そんな態度が子どもっぽくて可愛いなど、口が裂けても言えなかった。謝りながらも、陸は撫でる手を止めようとしなない。美優もまた、陸の手を払いのけようとはしなかった。

なんともいえないほのぼのした空気が流れる。その状況はサファイにしてみれば面白くなかったようだ。

『ねえリク〜。リクにしてみれば妹の頭を撫でているだけだけど、ミユにしてみれば 初対面の男の人が馴れ馴れしく触ってることになるんだよ。これってまずいんじゃない?』

『なんだサファイ、やきもちか?』

『なっ!』

『しょうがないな〜、家に着いたらサファイも撫でてやるから……』

『ちよっ! サファイはそんなこと言ってるんじゃない!』

顔を真っ赤にして否定するサファイに陸はおもわず吹き出してしまった。陸が笑い出したため、美優は何事かと小首を傾げる。その様子に気づいた陸は、少しだけ強めに美優を撫でて、頭からそっと手を放す。美優は名残惜しそうにしていたが、当然、陸が気づくはずもなかった。

「それじゃあ、今度から気をつけるんだな……。ユークも、ご主人様を困らせるんじゃないぞ」

「ばっ!」

ちゃんと理解できているのか謎ではあるが、ユークレースは気持ちの良い返事をする。それに満足した陸は、軽く手を振って挨拶しながら歩き出した。

そのとき、立ち去ろうとしていた陸を引き留めるように、美優の叫び声が聞こえてくる。

「あっ! お、お兄さんのお名前を聞いても いいですか!」

なにやら美優の必死な様子を不思議に思ったが、陸は普通に返事

をする。

「オレの名前は神代陸……。今日から、おまえん家の向かい側に住む白檀薫のクラスメイトだよ」

「神代陸　陸さん……。あっ、そうか。どこかで見たことがあるって思ってたけど、この前薫お姉ちゃんの家を探していたお兄さん！」

「えっ、一分も話していなかったのに……。覚えていたのか？」

「えーっと、かつこいいお兄さんだったな〜って」

「ふむ。かつこいい……。のか？」

「いやっ、その〜！」

自分の容姿にさっぱり興味のない陸にとって、かつこいいと言われてもピンとこない。しかも、相手は実の妹である。これ以上、何かが発展する可能性はまるでなかった。

「なんにしても、褒めてくれてありがとうな。そういう美優こそ、めっちゃめっちゃ可愛いよ」

「はうあっ！　そ、そんな〜」

身体をくねらせて照れまくる美優に、サフィはなぜかムツとする。

『つて、リク！　なに、妹を口説いてるのよ！』

『は？　口説くって　なにがだ？』

『うう……。無意識だからよけいに質が悪いよ。この調子なら、学園でも何かあったんじゃないかな〜？』

サフィの予想はズバリ的中していた。もつとも、薫の場合は出会いが運命的であったことも影響しているわけだが……。

『とにかく、さっさと家に帰ってきなさい!』
『だから、なに怒ってるんだよ……』

かなり機嫌が悪そうなので、なるべく逆らわないほうが良いだろう。陸は、まだ話していたそうな美優に別れを告げると、金緑石の郊外にある洋館へ向かって歩き始めた。

洋館に戻ると、出迎えてくれたサファイがまずはお風呂へ入るよう勧めてくれた。

言われてみればユークレースに顔を舐め回されていたので、先にさっぱりしたほうが良いかもしれない。こうなることを予想してお風呂を沸かしてくれていたサファイには大感謝である。

着替えを取ってきて、陸はそのまま風呂場へと向かう。洋館であるにも関わらず、この家の風呂は和風で 浴室も広めな檜風呂である。どうやら、この洋館の家主である優子の趣味のようだ。

実のところ、陸はこの檜風呂がかなり気に入っていた。大きなお風呂は気持ち良いこともあったが、この洋館の中で唯一陸がゆっくりできる場所だったからだ。

自室にいてもサファイや菜月が何かとちょっかいを出してくる。直接部屋に訪れたり、メイン端末へ通信してきたり……。なかなか気の休まることはなかった。しかし、この風呂場では状況が変わってくる。さすがの二人も風呂場へ乱入してくることはなく、ジュエルタイプの携帯端末を外すことで通信もできなくなる。本当の意味で陸が一人になれる場所であった。

そのため、ついつい長湯になってしまう。陸は大きな湯船に浸かりながら、今日一日の出来事を思い返していた。

神代陸としての転入初日……。実に様々なことが起こった。

健太との関係が無事に修復して、昼休みには菜月に泣かれて全校

生徒を敵に回し、それを切っ掛けに薫とも再び仲良くなれた。放課後になつて、生徒会室で菜月にクラリオンアースの管理者代行を頼まれた。そして、帰宅途中には、妹の美優と愛犬ユークレースに再会した。

これほどまでに騒がしい一日を過ごしたのは陸も初めてのことがある。

そんな新たな人生再出発の日も、これでようやく終わろうとしていた。いや、じつはまだ終わっていなかったりする

本日締めくくる最後のイベント……。ある意味、これまでの人生の中で、最大級の危機がゆっくりと迫っていたからだ。

陸がのんびり湯船に浸かっていると、脱衣所の方に何者かの気配を感じた。ガラス越しではあったが、影の大きさからするとどうやらサフィのようである。

「リク、お湯加減はどう？」

「おお、おかげでちょうど良い温かさだ」

「そう？ 良かった」

ガラリ……。突然、脱衣所と浴室を仕切っている扉が開かれる。

唖然とする陸を他所に、身体にバスタオルを巻いたサフィが浴室の中へ入ってきた。

「なっ——！ ちょっと、サフィ！ おまえいったい何やって！」

「なについて……、リクと一緒に風呂入ろうかなって思って」

「ふ、ふざけっ！」

とんでもない展開に陸はパニックしてしまう。しかし、何はともあれ、まずは隠さないといけない。陸はタオルを手に取り、慌てて腰

に巻いた。

そうこうしている間にもサフィはゆっくり近づいてくる。恥ずかしくはないのか、サフィは平然とした様子で微笑みを浮かべていた。

「ほら、妹さんと再会して淋しい想いしたでしょ。だから、今日はサフィが代わりに　お兄ちゃんの背中を流してあげるね」

「って、余計な気を使ってるんじゃないかねえええ！　それに、美優の代わりってなんだー！」

「え、いつも一緒に入ってたんじゃないの？　お風呂……」
「入るかー！ー！」

羞恥心が無いのか、はたまた感覚がずれているだけなのか……。なんにしても、サフィは間違いない一人っ子である。いや、今はそんなどうでも良いことを考えている場合ではない。なんとかサフィを追い出す方法を　あるいは陸自身がこの風呂場から脱出する方法を考えなくてはならなかった。

「サフィ、おまえ恥ずかしくないのか！　いくら自分のアヴァターだといっても、赤の他人に裸を見られることになるんだぞ！」

「うん、最初はリクになら良いかなって思ってたんだけど……、さすがにまだ恥ずかしいかなって気がしてきて」

「じゃ、じゃあー！」

「だから、今日　だけは水着を着てきました」

バサツと勢いよくバスタオルを取り去ると、どこから仕入れてきたのか、サフィは年代物のスクール水着を着ていた。

「これでなんの問題もないよね」

「そんなわけあるかー！　たしかにサフィはそれで恥ずかしくないかもしれないが、オレは裸なんだぞ！　やっぱり問題あるだろ

「！」

「いや、それはそうなんだけど」

「ん？」

「じつは、サフィもちよこつと男の人の身体について興味があつてね」

「なああああーーーーー！」

「で、ちょうど良い機会だから……、リクにいろいろと見せてもらおうかなつて……」

じりじりと、獲物を追い詰める肉食獣のように サフィが近づいてくる。そして、興味津々に湯船へ浸かっている陸の身体を観察し始めた。

「だあーーーー、見せてもらおうかなつじゃねえーーーー！ サフィ、ちよつと待て、落ち着いて考えてみる！ 普通は立場が逆 いやいやそうじゃなくなつて……。こんな状況、絶対にありえねえつだろ！」

「あははつ、大丈夫だよ」

「ななな、なにが大丈夫なんだ！」

「だつてこれ、ゲーム……なんだから」

「つて、ええーーーーー！」

きゅぴーん！ サフィの瞳が不気味な光を放つ。その妖しげな動きと得体の知れないプレッシャーに、陸は殺人鬼に襲われたとき以上の恐怖を感じた。

たしかに、サフィにしてみれば陸はゲームキャラクターである。つまりは人間のように見えていても、0と1の電気信号の固まりではない。それなら、今後のためにも、陸に協力してもらおうと考えてしまったようだ。

いやはや、陸にとつては、まったくはた迷惑な話である。

とにかく、直ちに逃げなくてはやられてしまう。何をやられてしまうのかはわからないがとにかく危険だ。陸は浴槽の端へと移動しながら飛び出すタイミングを見計らった。

「さぁリク」。大人しく観念しなさい！」

不意に空中へ身を投げ出したサフィは、そのまま湯船に飛び込んでくる。

ざばーん！ 凄まじい水しぶきをたてながら、サフィは引きつった表情の陸に飛びついた。

「ばっ、サフィ！ くつつくな！」

「よいではないか、よいではないか」

「って、お前はどこの悪代官だー！」

悲鳴にも似た陸の叫びが浴室に響き渡る。今のサフィには何を言っても無駄なようだ。

もちろん、水着を着ているとはいえ、サフィと一緒に入浴するなどできるはずがない。下手をすると、今後もサフィによるお風呂場乱入が増えてしまい、陸が唯一楽しみにしている入浴タイムまで侵略される可能性も考えられる。それだけはなんとしても阻止しなければならぬ。

水着姿のサフィに抱きつかれながら 陸はパニックって回転しない頭を必死に働かせていた。

やはり家族の待つ住居とは良いものである。菜月は、照明の灯つた我が家を見ながら、そんなことを考えていた。

二年前、優子の神乃化身アウターとなった菜月は、惑星クラリオンアースから存在が消えてしまう。そのときから、菜月はこの洋館で暮らす

ことになった。

洋館の家主である優子は、基本的に忙しい人であるため、戻ってきて直ぐに出かけてしまうことが多い。そのため、菜月は一人暮らしのような状態が続いてしまっていた。

玄関を開けるのも、廊下や部屋の照明を点けるのも、やはり菜月が行う必要がある。しかし、陸と暮らすようになってから、そんな状況もガラリと変化した。

学園から帰ってきたら、ちゃんと明かりが点いている。いちいち鍵を出さなくても玄関は開いている。なにより、家全体から人の生活している気配が感じられるようになった。今の洋館なら、誰が見ても幽霊屋敷だなんて思わないだろう。

それに、菜月自身の考え方も変わってきた。これまでとは違い、今では家に帰ってくるのが一番の楽しみになっていた。新しい家族……ということもあるのだが、学年が違う陸と一番長く過ごせるのはこの自宅であつたからだ。

そう、この扉を開けば、陸が出迎えてくれる。にっこりと爽やかな笑顔を浮かべて、『菜月姉え、おかえり〜』と声をかけてくれるだろう。

そう考えるだけで菜月の胸は弾んでしまう。菜月は、逸る心を抑えながら ゆっくりと玄関の扉を開いた。

「って、いい加減離れやがれー！ー！」

「リク〜、ちよつとでいいから。だから ねっ」

「ねっ……じゃねえええー！ー！」

いったいどういう状況なのだろう。その光景を見た菜月は頭の中が真っ白になった。

風呂場へ繋がる廊下で陸とサファイがなにやら絡み合っている。しかも、腰にずれ落ち気味のタオルが巻かれているものの陸はほとんど真っ裸……。サファイの方はというと、水着姿のずぶ濡れ状態であ

る。そして、陸の後ろから首筋にしがみつき、背中に布越しの素肌を密着させていた。

まさか、菜月のいない間を見計らって、一緒にお風呂へ入っていたのだろうか……。そんなうらやましいもとい、破廉恥極まりないことが許されるはずはない。嫉妬とかはこれっぽっちも関係なく、白鳳学園生徒会長として、決して許すことができない行いだ。

「あ、あなたたち……」

「な——！ な、菜月姉え……」

「あつ、お姉ちゃん、おかえり〜」

菜月の姿を確認した瞬間、陸の顔から血の気が引く。サフィは悪気もなく笑顔であったが、菜月のただならぬ気配を感じておもわず息を呑んだ。

ずごくごくごっつ！ 菜月の背後に怒りのオーラが立ち昇る。例えるなら噴火前の活火山。まあ、結局は怒りが爆発することになり変わらないのだが

「陸くん！ ちょっとここに座りなさい！」

「は、はい————！」

見事な勢いで正座する陸……。サフィもそれに倣って正座した。昼間に続いて再びのお説教。野次馬がいないこともあって、優に一時間は続けられることになるのだった。

第8話 新たなアヴァター契約者

どす、どす、どす……。暗闇の中、鈍く嫌らしい音が辺りに響く。硬いモノを何かで叩くような音。狭く小さな部屋の壁に一人の男が拳を打ち付けていた。

当然ではあるが、男の拳は皮がめくれて血も滲んでいる。それでも男は何かに取り憑かれたかのように拳を打ち続けていた。

壁を何かに見立てているのだろう、男は憎しみを込めて拳を叩きつける。怒りによって痛みが麻痺しているのか、血が飛び散るのも構わず何度も何度も……。男の名前は藤永哲也。金緑石を恐怖に陥れた死体無き連続殺人。不可思議事件の犯人であった。

藤永は、クリスタルファンタジー結晶幻想曲に参加しているエターナルアース側のプレイヤー『ペリドット』からクラリオンアースの真実を知らされ、仮契約中のアヴァター能力を使って七人もの命を絶つという暴拳に出た。クラリオンアースがシミュレーションシステムによって創られた世界であるなら、そこに住む人間などいくら消去しても問題がないと考えたからだ。

しかし、八人目の殺人を起こす際、サファイアのアヴァターとなった芹沢陸に倒されてしまう。まさに圧倒的な力の差……。仮契約中の藤永では本契約をした陸に手も足も出なかった。しかも、わけのわからないゲーム技でこてんぱんにやられており、自身を強者と考えていたプライドはずたずたに引き裂かれてしまった。そのため藤永は陸を心の底から怨んでいた。

「あのガキ……ぜってえ殺してやる！」

自分の悪行を棚に上げて、今の立場へと追いやった陸を憎む……。いわゆる逆怨みである。

なんとか陸に仕返しをしたいが、逮捕されたときからエターナル

アースより通信が繋がることはなくなっていた。そして、仮契約の際にペリドットから渡されたジュエルタイプの携帯端末も消えていた。おそらく、管理者のアヴァターに回収されてしまったのだろう。こうなってしまうえば、藤永は何の特殊能力も持たないただの人間プログラムである。取り調べの後、形式的な裁判が行われ、極刑となるのは間違いない。そのことについて、藤永はなんの感情も持たなかった。

所詮、このクラリオンアースは、シミュレーションの過程によって誕生した擬似現実……。刑が執行されて、藤永哲也という存在がデータ消去されたとしても、単にそれだけのことである。消滅することは一向に構わなかった。

だが、自分の消えた後も芹沢陸という人間プログラムが存在しているということは気に喰わない。なんとかこの手でデータ消去してしまいたいが、今の藤永にはその手立てがまるで無かった。

『ならば、アヴァターになればいい……』』

突然響いた声に藤永はギョツとする。それは看守の声ではない。まして、藤永と同じように警察の留置場へ入れられている犯罪者のものでもなかった。

クリスタルアンタジー
言葉の内容から結晶幻想曲に関わっている存在だと考えられたが、通信手段の無いこの状態で声が聞こえるなど有り得ない。藤永は声が聞こえた方、何も無い空間を凝視した。

「誰だ……。いや、そんなことはどうだっていい。もう一度、アヴァター能力を与えてくれるのならな」

『ふっ、面白い奴だ……』』

その瞬間、暗闇の空間にノイズが走る。ガガガッ。断続的に不快な音が響き、ゆっくりと何かが浮かび上がってきた。

それは、十六歳ほどの少年の姿。まるで、立体映像が映し出され

たような いや、決して映像ではない。そこには、実体を持った少年が確実に存在していた。

『オレの名はブルース……。惑星クラリオンアースの アドミニストレータ 管理者と
いえば、理解できるだろう』

白い陶器のような仮面を付けた少年は、ジュエルナイト 十四創神には含まれない新たな宝石名を持つキャラクター。惑星クラリオンアースの衛星軌道に出現した規格外のプログラム『ブルースピネル Blue Spinel』であった。

新たな管理者の登場に藤永は歓喜する。目の前にいる少年こそ藤永が待ち望んでいた 陸を八つ裂きにするため、必要な力を与えてくれる存在であったからだ。

この日を境に、藤永哲也という存在は惑星クラリオンアースから消滅することになる。その結果、藤永が仮契約中に起こした不可思議事件も、犯人や詳細すらわからない謎に包まれた怪奇現象へと逆戻りすることになった。

管理者代行になったとはいえ劇的な変化があるわけではない。エターナルアース側の住人サファイアのアヴァターとなった神代陸は、何かと騒がしくもある日常を淡々と過ごしていた。

サファイたちの参加しているリアルネットゲームクリスタルファンタジー 結晶幻想曲は、いまだ目的といったものがはっきりしていない。既にゲームが始まっているのか……。あるいは十二人のアヴァターが揃って初めてスタートするのか それすら謎のままである。

どうやら、管理者であるはずの菜月にも詳しく知らされていないらしい。

逆に言えば、わざわざ説明する必要が無いのかもしれない。プレイヤーであるサファイには、ゲームを始める前にちゃんと知らされて

いたからだ。このクオリオンアースでは、アヴァターを使ってどんなことを行なっても良いのだと

もちろん、倫理を護ることは最低限の条件である。だが、中には不可思議事件のようにアヴァター能力を利用して犯罪に関わる者も現われる。それらを監視するため、十二人のアヴァターとは別に二人アドミニストレータの管理者が存在していた。

管理者の能力は他のアヴァターを遥かに凌駕している。有事の際、アヴァターの悪事を止めるのは管理者の役目であった。

そんな重要な仕事を菜月から引き継いだ陸……。最初はその大役プレッシャーに精神的重圧を感じていたが、蓋を開けてみれば何かが起こるわけでもなく、ただ平穏な日常が続いていた。とは言っても、陸が管理者代行となつてからまだ二日も経っていないわけなのだが

なにやら肩透かしの感が無くもない。いや、騒ぎなど起こらなければそれが一番である。不可思議事件のように、心を引き裂かれるような想いは二度と御免であった。

しかし、物事とはそうそう思い通りにはいかないようである。昼食を終えた陸は、突然現われた菜月によって、他には誰もいない生徒会室へ連れ込まれてしまった。

「菜月姉え……。別に呼び出すのは構わないんだけど、わざわざ教室まで来るのは止めてくれないかな？」

「あら、どうしてそんなことを？」

「さすがに、みんなの視線が 凄く痛い……」

「そんなの気にすることないでしょ。だってわたしたち姉弟なんですから」

「まあ、そうなんだけど……」

最近の菜月は、やたら幼馴染みを強調していたころの薫のようである。その薫はというと、まるで中等部時代に戻ってしまったかのように陸を避けている ような気がする。仲良くなれたと思った

のは陸の勘違いだったのだろうか……。いや、今はそんなことを悩んでいる場合ではない。陸は、わざわざ呼び出した理由を菜月に確認した。

「うん……。来週から白鳳学園に教育実習生が来ることは陸くんも知ってるよね。高等部には三人が来る予定になってるんだけど……」

「ああ、あれだろ。教師を目指している学生が実習に来るってやつ」

「簡単に言えばそういうことね……。それで、学園内での教育実習生のお世話は毎年生徒会が任されているんだけど、その中の一人を陸くんにお願したいの」

「なにぃー！ ちよっと待て、なんで生徒会でもないオレが そんな面倒なことを！」

「いまから当選したときに向けて慣れておくのも悪くないと思うけど」

「って、立候補するの前提なのかよ！ だいたい菜月姉は、いつもオレに断りもなく勝手なこと……」

「陸くん！」

菜月は一喝して陸を黙らせる。あまりの迫力におもわず息を呑む陸……。どうやら、いつものおちゃらけた感じではなさそうだ。

「それでは、言い方を変えます。惑星クラリオンアースアドミニストレータの管理者として 教育実習生の一人を監視してください」

「なっ、まさかその実習生ってアヴァターなのか？」

「ええ……。偶数月八月の宝石騎士ジュエルナイトペリドット、その神乃化身である藤永哲也……」

「藤永哲也？ どこかで聞いたことのある名前だな」

「はあ……。あれだけ騒がれていたのに、殺されかけた本人がこ

れでは、誰も覚えていないのは当然よね。」

「こ、殺されかけたって まさか……」

「そう、陸くんがサファイちゃんと契約する切っ掛けを作った人。キャラクター 不可思議事件の殺人鬼が教育実習生として白鳳学園へやってくるの。」

そう言っつて、菜月は生徒会に回ってきた教育実習生のデータをモニターに映し出す。そのデータを そこに映っている顔写真を見て陸はぞつと身震いした。

間違いない。陸たちをバトルフィールドに引き込み、薫を殺そうとしたあの藤永哲也である。

「な、なんでこいつが教育実習生に……。っっていうか、こいつは連続殺人の犯人として、警察に捕まっているはずじゃ！」

「陸くん、気づいていた？ 昨日から、不可思議事件のニュースに彼の名前が一切出てこなくなったことを……。それどころか、犯人はまだ捕まっていない 事件は解決していないことになっている」

「な、なんだよそれ……」

「これはわたしの想像なんだけど、何らかの方法でアヴァター契約して、彼の存在がクラリオンアースから消滅してしまった。だから不可思議事件の犯人は存在していないことになる……。でも、アヴァター仮契約者が起こした事件だから、全てが無かったことにはならなかった ってどこかしら？」

「アヴァターになったら完全に存在が、パーソナルデータが消滅するはずだろ？ だったら、どうして教育実習生として白鳳学園に来ることができるんだよ！ 菜月姉えみたいに、何年も前からアヴァターだったわけでもあるまいし……」

「それは今の陸くんと同じ。管理者によって新しい存在を与えられるからでしょうね」

「ふむ。菜月姉えがそんなことするはずないから、やっぱり優子のあいつ 仕業か……。いったい何を考えてやがるんだ！」

「いえ、優子さんではなく、もう一人の管理者ヘリオドルが行ったことでしょう。実際、偶数月であるペリドットはヘリオドルの管轄なわけだし……」

「だあああつ、わかんないことを考えていても何も解決しねえ！とにかく、あの藤永つて奴がまた事件を起こさないように見張ればいいわけだな？」

「でも陸くん、充分に気をつけてね……。本契約をしたアヴァターは、仮契約のときとは比べものにならない強さだから」

「わかつてるよ。なんにしても、管理者代行としては殺人鬼を放っておけないからな」

やっと巡ってきた管理者らしい仕事なのだが、因縁めいた相手だけにできれば遠慮したいというのが本音である。藤永は陸の所為で悪事が暴かれ警察に逮捕されていたのだ。陸のことをもの凄く怨んでいるだろう。もちろんそれは逆怨みであつて、陸に非があるわけではない。万一、同じように殺人を繰り返すようなら、陸も全力で相手をするだけだ。

「できれば二人きりにはさせたくないんだけど、わたしも生徒会長としての仕事があるからそれも難しい……。でも、バトルフィールの気配を感じたら、すぐにでも駆けつけるから」

「心配しなくても大丈夫だつて。別に、こっちからケンカを売るつもりは無いから」

心の内を悟られないよう、陸はわざと明るく振舞ってみせる。

そんな陸の様子に、菜月は底知れぬ不安を感じてしまった。陸に管理者代行を任せたのは間違いだつたのだろうか。管理者代行でなければ、藤永哲也から遠ざけることもできたはずだ。

もちろん、過ぎたことを言っても仕方がない。菜月には、陸の身に何か悪いことが起こらないよう　祈ることしかできなかった。

放課後の教室は何かと騒がしい。

慌てて部活へ向かう者もいれば、集まってお喋りに華を咲かせる者たちもいる。ある意味、身柄を拘束される授業から解放されて、皆、精神的自由を満喫しているのだろう。そんな中、部活に所属していない陸は、特に学園でやることも無いため帰宅の準備をしていた。

そこへ、ここ二日ほど様子のおかしかった薫がやって来る。薫は顔を赤らめながら、なにやら挙動不審気味に視線を泳がせている。そして、しっかりと陸を見据え、覚悟を決めたように大きな声で叫んだ。

「りりり、陸くん！ 一緒に 帰りませんか！」

ざわわっ！ 突然、教室内に大きなざわめきが起こった。普段は誘われることの多い もちろん断っている 白檀薫であったが、自ら進んで男子に声をかけるなどこれまでは無かったことである。明らかに、陸に対して好意を寄せているのだと考えられた。

「ん〜？ じゃあ帰るか〜」

決死の覚悟でお願いした薫と いつも通り幼馴染みと帰るつもりで答えた陸との間には、決定的な温度差があった。しかし、理由はどうあれ薫にしてみれば大きな第一歩である。薫はにやけてしまふ表情を必死に抑えていた。

その様子に焦ったのは菱木健太である。陸の方にその気は無くとも、薫の態度は不味いものだといえる。早いうちになんとかしなければ、気づいたところには手遅れになっているかもしれない。健太は、

急いでカード型携帯端末へ情報を書き込み、帰宅の準備を整える。あくまでも自然を装って、陸たちに合流しようとした。

「あつ、オレも一緒に……」

「はいはい、菱木くんはこっちな〜」

「つて、おい！」

なぜか健太は数人の女子に囲まれて引き止められてしまう。健太を陸たちに近づかせないつもりなのだろう。しばらくして、そのうち一人が薫へ向けて拳をギュツと握り締めた。

『薫ちゃん……、ガンバ！』

そんな心の声が聞こえた。ような気がした。薫は真つ赤な顔でこくりと頷く。想いはちゃんと伝わっているようだ。

ちなみに、薫は一大決心をして誘ったわけだが、陸の方はというと相変わらずの朴念仁である。この様子なら、今回の計画も空振りに終わってしまうかもしれない。

自宅へと向かう帰り道……。いつもと違いがあるとするならば、二日前に転入してきた神代陸が隣りを歩いていることだった。

不可思議事件で命を助けられ、薫のクラスの転入生として再会した。なにやら運命的なものを感じるのは気の所為ではないだろう。昨夜も陸のことが頭から離れなかった。陸ともっと仲良くなってみたい。そこで、薫は一つの計画を立てた。放課後、一緒に帰ってくるようお願いすることである。

勇気を出して誘ってみた結果、陸は快く受けてくれた。しかし、それから先が情けない状態となってしまう。

会話が続かない

緊張しているためもあるが、どうしてもぎこちないやり取りになつてしまう。不覚にも、誘つてからのことをまったく考えていなかった。これでは誘い出した意味が無いではないか……。

幸か不幸か、陸は一緒に歩いていては薫のことをまったく気にしていないようである。それではあまりにも哀しすぎる。哀しすぎて今晚も眠れなくなつてしまいそうだ。そうならないためにも、薫は必死になつて次の話題を考えた。

「と、ところで、陸くんの家つてどの辺りにあるの？」

我ながら上手い振りである。一緒に帰っているのだから、二人の共通している通学路を知つておくのは大切なことだ。

この金緑石に住んでいるのか、あるいは外から電車で通っているのか……。それによつても、目的地は違つてくるだろう。

「ああ。樹神社の近くに洋館があるだろ？ 幽霊屋敷つて噂のある洋館。じつは、あそこに住んでいるんだ。」

「えっ、それつてここから反対方向じゃ」

「まあ、そうなんだけど、長年の習慣でおもわず……な。」

そう答えて陸は困つたように苦笑する。そんな様子を見て、薫は真つ青な顔色をして落ち込んでしまった。

最悪だ……。誘い出すことを優先するあまり、陸の都合をまるで考えていなかった。これでは嫌われたとしても仕方ないかもしれない。それこそ、誘わなかったほうが良かった可能性すらある。

なんとかしなければならぬ。起死回生の一手を考えなければ、迷惑な女だと思われてしまつたら。薫は、必死になつて謝罪する言葉を考えた。

「あの、陸くん……」

恐る恐る声をかける薫だったが、その言葉は陸に届いていなかった。陸はある方向を凝視して固まっている。微かではあるが、その身体は震えているようにも見えた。

薫は陸の視線を追ってみた。視線の先　そこには二十歳前後の青年の姿があった。整った容姿をした青年で、微笑みながら陸を見ている。薫はその笑みにゾツと身震いを感じた。

怖い……。なぜだかわからないが、薫は青年に恐怖を覚える。まるで、抜き身の刃物を向けられて、いまにも殺されてしまうかのよう

「存在が消滅したっていうのに、相変わらず仲が良いよね。きみたち……」

青年は、顔見知りへ声をかけるように呟く。断っておくが薫と青年とは初対面である。だが、陸の方は違っていたようだ。

「藤永哲也、オレたちに何の用だ？　また、薫に何かしようというのなら今度こそ容赦はしないぞ」

「え……？」

「いったい陸は何を言っているのだろう。また、というぐらいだから以前に何かあったのだろうか……。まったく身に覚えの無い内容に薫は鳥肌が立った。いや、覚えていないのではなく、過去の記憶が削り取られているような　そんな気すらしてくる。」

「別にきみたちに危害を加えるつもりはない。ただ、同じゲーム、クリスタルアンタジー結晶幻想曲へ参加しているアヴァターとして挨拶に来ただけだよ。芹沢陸くん」

「芹沢……陸？」

その名前を聞いた瞬間、薫は丸太で強打されたような衝撃を後頭部に感じた。陸の名字は神代であって、決して芹沢ではない。しかし、どういいうわけだか、芹沢陸という名前の方がしっくりしているように思えた。

ズキツ！ 薫は突然の頭痛に襲われる。心臓の鼓動と共に繰り返される頭痛は、だんだんと激しさを増してくる。薫はこめかみを押さえながら、気を失いそうになる激痛になんとか耐えていた。

「アヴァターになつて何をするつもりだ？ まさか、また……」

「よしてくれ。正式にアヴァター契約をしたんだから、ちゃんとルールは護るよ。人は絶対に殺さない……」

「殺さ……ない？」

「口先だけなら何とでも言える。信用できないな」

「信用するもしないもお前の勝手だが……、もし同じことをすれば管理者アドミニストレータによって今度はプレイヤーがゲームから除外される。プレイヤーのいないアヴァターがどうなるか知っているか？ アヴァターとなった者はプレイヤーの分身としてこのクラリオンアースに存在している。すなわち、プレイヤーがいなくなれば、アヴァターの存在している価値はなくなる。オレたちに待っているのは本当の意味での消滅デリートだけだ」

「い、いつたいなにを……」

わからない、わからない、わからない！ 激しい頭痛に耐えながら、薫は藤永の言葉を聞いていた。

どれだけ考えても理解できない内容……。だが、そこに大切な何か、忘れてはならない真実が隠されているように思えてしまう。

「うう、わあああ……！」

あまりの激痛に、薫は頭を抱えながらしゃがみ込んでしまう。そのときになって、陸ははじめて薫の状態に気づいた。

「お、おい、薫？」

「痛い……、痛い！」

「しつかりしろ、薫！」

泣き叫ぶ薫の様子に陸は慌ててしまう。陸はどうすることもできず、薫の肩を支えながら必死に呼びかけるしかなかった。

狼狽した陸の姿に、藤永は嫌味な笑みを浮かべる。表情から察すると、ざまあみろとも思っているのだろう。

「ん〜。そっちのお嬢さんが調子悪そうだから、詳しい話はまた次の機会にしようか……。できれば、今度は奇数月側のクリスタル管理者にも同席してもらいたいね〜」

そう言って、藤永は身を振り返す。そして、何事も無かったかのように立ち去って行った。藤永にしてみれば、薫がどうなるうと関係無いことであるからだ。

程なくして、激痛に耐えられなくなった薫が気を失う。薫を抱き上げた陸は、どこへ連れて行くべきか悩んでしまった。

病院？ いや、藤永の話を聞いておかしくなったのだから、これは結晶幻想曲関連の問題なのかもしれない……。病院では手に負えない可能性が考えられる。そうなれば、連れて行く場所は一つしかない。

陸は、アヴアター能力を少しだけ解放させて、来た道とは逆方向へ走り出した。

その途中、フリーハンド通信で菜月へと連絡を入れる。藤永と接触したことも含めて、薫をこのまま洋館へ連れて行くと報告した。

洋館に戻ってきた陸は、薫を抱えたまま自室へと駆け上がる。なにやらサファイが騒いでいたがそれに構っている余裕など今の陸にはなかった。

ベッドに寝かしつけ、薫の額に手を当てる。それほど違いは感じられないため、熱があるわけではなさそうだ。続いて陸は首筋の脈を測ってみる。多少速くはなっているものの、こちらも許容範囲だといえる。そこまで確認して、陸はやつと一息吐くことができた。意識は戻っていないが一先ずは安心だろう。後は、菜月が戻ってくるのを待つて、詳しく調べてもらえば大丈夫なはずだ。

そのときである。下の階からサファイのとんでもない叫び声が聞こえてきた。

『あつ、ナツキお姉ちゃん。リクったらね、女の人を自分の部屋に連れ込んだんだよ〜!』

「って、何言つてやがるんだ。あのちびっ子はー!」

どか、どか、どか……。なにやら、怒りに満ちた気配がゆっくりと階段を上ってきている。怒りの主は、間違いなく菜月であろう。

陸は本能的に逃げ場所を探そうとする。出入り口は一つしかなく、二階であるため窓から脱出することはできない。いや、アヴァター化してしまえば、飛び降りることも簡単。って、ちょっと待て……。よくよく考えてみたら、別にやましいことをしているわけではない。ちゃんと説明をすれば、菜月もわかってくれるはずだ。

「ほ、本当にわかってくれるんだろうか……」

そんな結論に辿り着き、陸はゾツと身震いをする。思い込みの激しい菜月がちゃんと話を聞いてくれるかは謎である。陸はがたがた

と身体を震わせながら　審判の時を待つことしかできなかった。
ばたん！　大きな音と共に扉が開かれ、真顔の菜月が部屋の中へと入ってくる。

「いやっ、菜月姉え……これは！」

言い訳をする陸には目もくれず、菜月はベッドに寝かされている薫の下へ駆け寄った。

「で、彼女の具合はどうなの？」

「……え？」

「え、じゃないでしょ。あいつと再会して、突然気を失ったって聞いたけど……違うの？」

「いや、違わない違わない！　まったくもってその通り！」

どうやら菜月は、ちゃんと状況を把握できていたようである。陸は額に流れた嫌な汗をそつと拭った。

「彼女、確か陸くんの幼馴染みの……」

「ああ、オレン家の向かい側に住んでいる白檀薫だ」

「リクの恋人だよ」

「ちげえーよ！」

ひょっこり現われたサファイがまたとんでもないことを口にする。それを聞いた菜月の表情が若干引きつったように見えたのは気の所為だろうか……。

「でも、本当にどうしたの？　カオリ、大丈夫なの？」

サファイが心配そうに薫の顔を覗き込む。陸視点で会ったことはあ

つたが、直接顔を合わせるのはこれが初めてだ。

「ああ、いまは落ち着いていると……思う」

不可思議事件の殺人鬼、藤永哲也がアヴァターになったことをサファイに知らせるべきだろうか。陸は意見を求めるため、菜月へと視線を向けた。それを受けて菜月はこくりと頷く

「いずれ知られてしまうことになるだろうから先に話しておきましょう。サファイちゃん、落ち着いて聞いてね……」

そして菜月は、アヴァターとなった藤永哲也が来週から教育実習生として白鳳学園にやって来ることを説明した。続いて陸が、藤永と再会したこと。薫が気絶した原因であろう会話の内容を聞かせる。サファイは神妙な面持ちで二人の話を聞いていた。

「相手の出方次第では、また戦いになるかもしれないんだ」

「そんなことって……。アヴァターになったから、人殺しの罪も消えちゃうなんて絶対におかしいよ！」

「まさにサファイちゃんの言う通りね。管理者能力を使って生き返らせたから実際に犠牲者は出ていないけど、それで殺人の罪が無くなるわけじゃない。だから優子さんは、情報を改竄して藤永哲也が殺人者として逮捕されるように仕向けたわけだし」

「今回の一件、もう一人の管理者ヘリオドールの仕業じゃないかと思っただ」

「そんなはずない！ だって、ヘリオドールは惑星クラリオンアースを創造したプラネットクリエイター野乃原真菜さんのことなんだよ！ 真菜さんが自分の創ったクラリオンアースの世界を混乱させることって絶対ないよ！」

おそらく真菜とも知り合いなのだろう。サファイは今回の事件に真菜が関わっていないと断言した。

そうはつきり言われると陸たちには何も答えることができなくなってしまう。何しろ、惑星クラリオンアースの創造主、野乃原真菜については何も知らないからだ。

そのとき、サファイの大声に反応したのか、薫が目を覚ます。朦朧としている頭を押さえながら、薫はゆっくりと半身を起こした。

「ううん……。わたし どうしちゃったのかな？」

「薫！ 大丈夫か？」

「ああ、陸くん。大丈夫かって……。何が？」

「薫さん。あなたは帰宅途中に倒れて、今まで意識を失っていたのよ」

「か、神代菜月先輩！ 先輩がどうして って、ここは……。どこ？」

「落ち着け、ここはオレの家だ！」

「……。あははっ、何言ってるのよ陸くん。陸くん家のはずないでしょ。あれ、陸くんって神代先輩と知り合ってたの！」

「なんだ、気づいてなかったのか？ 菜月姉えは、オレの……。姉さんだ」

それを聞いて薫の動きが固まる。確かに直接言った覚えはなかったが、あれだけ騒ぎになったのだから、陸にしてみれば気づいていなかったことのほうが驚きであった。

「お姉さん……。って、そんなわけないよ。いや、わたしが知らなかっただけで、まさか神代先輩はおじさんの隠し子！」

「おいおい、なにわけのわからんことを……。本当に大丈夫なのか。薫、試しにオレの名前を言ってみる。ちゃんとフルネームでな」

「え……。陸くん、芹沢陸くんですよ。わたしが陸くんのこと忘れるはずないよ〜」

「ふむ、ちゃんと覚えているようだな。まあ、若干記憶に混乱が……。えっ、芹沢？ いま芹沢って言ったか！」

「ちよっ！ どうしたの陸くん。なんだかおかしいよ〜？」

突然、両肩をつかまれ前後に揺すられた薫は、びっくりした様子で陸の顔をジッと見つめる。陸は何をそんなに焦っているのだろうか

「ま、まさか……。薫、オレは誰だ。お前にとって、オレは何者だ！」

「わ、わたしにとって……。って」

何か勘違いしたのか、薫は真つ赤な顔をしてもじもじする。チラリと陸の様子を窺い、真剣な眼差しに照れながら、その問いに対しての答えを口にした。

「陸くんは……。陸くんはわたしの大切な 幼馴染み……。だよ」

自分の言葉に薫はがっくりと頂垂れてしまう。心の中で何かと葛藤し、最後の最後で負けてしまったようだ。しかし、問題にすべき内容はそこではない。薫は陸のことを幼馴染みと言った。それは、薫の記憶に芹沢陸という存在が確実に残っているという証拠ではないのだろうか。

その瞬間、陸と菜月が揃って後ろを向く。しゃがみ込んで顔を突き合わせ、薫に聞こえないような小声で内緒話を始めた。

『神代先輩、いったいどういうことですかー！』

『陸くん、お姉ちゃんと呼びなさい！ って、そんなことより……。』

どうやら何らかの原因によって、あなたがアヴァターになる前の

芹沢陸についての記憶が戻ったと考えるべきね」

「記憶が戻った？ アヴァターになっただけなら存在が消滅して、クラリオンアースに生まれてこなかったことになるんだろ。最初から無い記憶がどうして戻るんだよ！」

「うーん……。プログラムのバグ　かしら？」

「ば、バグ……だと？」

はたしてそんなことがあるのだろうか

もし、バグによって記憶が戻ったのだとしても、今では何かと問題が出てくる。第一、神代陸になったこの状況を、リアルネットゲームクリスタルファンタジー結晶幻想曲の説明も無しに納得してもらうことなんてできない。説明したとしても信じてもらえるかどうかもわからないだろう。

陸は大汗を掻きながら振り返ってみる。すると、ニコニコ顔のサファイアが、状況も掴めずに啞然としている薫の前に立っていた。

「はじめましてカオリ。リクの妹のサファイアです」

「り、陸くんの　妹！」

「って、おまえもややこしいことを言ってるんじゃないか……！」

薫の記憶が戻って喜ぶべきか、それとも悲しむべきなのか……。

この後、薫が理解できるような説明をするため、軽く三時間ほど必要となるのだった。

第9話 異物を排除する者

時刻は午後八時過ぎ……。薫を自宅へと送り届けた陸は、夜道を一人、郊外の洋館へ向けて歩いていった。

記憶を取り戻した薫には、リアルネットゲームクリスタルファンタジー結晶幻想曲や神乃化身システムアター、現在の陸の立場について説明をした。この世界はシミュレーションシステムによって発生した擬似現実である……。という、より複雑な部分は秘密のままに

さすがに何も関係ない者へ『あなたも含めてみんなゲームキャラクターなんですよ』とは言えないだろう。自分の時もそうだったが、己の人生を全否定されるのと同じであるからだ。

事実を知らなければそのまま平穩に暮すことができる。薫には惑星クラリオンアースのごたごたとは無縁に過ごしてもらいたい。自分のように無意味な戦いへ巻き込まれて欲しくない。陸はそのように考えていた。

何気無く夜空を見上げてみる陸……。周りの光源によってそれほど多く見えないが、満天には星々が広がっている。この星空もやはりシミュレーションシステムによって創られたものなのだろうか……。陸がそんなことを考えていると、視界の端を黒い大きな何かが横切った。

慌てて確認してみると、金緑石の上空に細長い何かがつごめいていた。

その動きは、まるで蛇が空中を泳いでいるかのようである。どう考えても自然現象ではないだろう。

なら、あれは一体何だというのか。夜空を見上げなければ気づかなかったはずだ。陸はアヴァター能力を少しだけ開放させて、高速で空を翔る何かの後を追う。謎の影は金緑石の中央部、白鳳学園高等部のグラウンドへと舞い降りた。

校舎の陰に隠れた陸は、グラウンドへ降りたソレにそっと視線を

向けてみる。その姿を見て、陸は啞然としてしまった。

「おいおい嘘だろ。管理者ってのは、あんなまで相手にしなければならぬのか？」

星明りに照らされたのは全長五メートルほどの龍……。いや、限りなく生物のようではあるが、実際は龍の形をした機械である。そして、その近くには白い陶器のような仮面をつけた陸と同じ年ほどの少年の姿があった。おそらくこの少年が龍の背に乗ってここまでやって来たのだらう。

「そんなところに隠れてないで出てきたらどうだ。サファイアのアヴァター 芹沢陸よ……」

それを聞いて陸はおもわず苦笑してしまう。どうやら相手の目的は陸であり、まんまと誘い込まれてしまったようだ。

観念した陸はグラウンドへ向けてゆっくりと歩き始める。その手は無意識のうちに胸へかけたジュエルタイプの携帯端末に伸びていた。

「こちらの自己紹介は必要ないみたいだな……。で、おたくはいつたい何者なんだ？」

「惑星クラリオンアースの管理者ブルースピネル。神乃化身ではなく、本物の宝石騎士だ。まあ、十四創神ではないがな……」

「ふむ、管理者ねえ。つまり、藤永哲也にアヴァター能力を与えたのはあんたってことか」

「ブルースと呼んでくれ。そして、こいつはオレのパートナー、超龍神リーンウィックだ」

『よろしく頼む……』

「いや、そういうことじゃなく　って龍喋るのかよー！」

なにやら毒気が抜かれてしまう態度に、陸は警戒することも忘れてつつこみを入れてしまった。ちなみにリーンウィックは、今の中型形体の他にも、衛星軌道上に現われた聖獣機サイズや三十センチほどのぬいぐるみサイズにもなれる。この物語には直接関係ないが、時空族トラピッチェ・クリスタルの創造した超獣神の一体であった。

「で、いったい何の用だ？ まさか、自己紹介のためだけに現われたわけでもないだろ？」

「ああ、少し確かめたいことがあって、おまえが一人になるのを待たせてもらった」

「確かめたいこと……だと？」

その瞬間、場の空気が一変する。サツと身構えたブルースは、虚空より長槍を取り出す。ぐるぐると振り回しながら風を斬り、低い態勢で切っ先を陸へと突きつけた。

ジュエルナイト

「宝石騎士サファイアの神乃化身、その資質を……。リーンウィック！」

ク！」

『了解した。フィールドを展開する！』

「なっ！」

慌ててブルースから距離を取る陸……。しかし、一瞬にして変化した景色から考えると、既にバトルフィールド内へ取り込まれてしまったようだ。つまり、術者自らが解除しない限り、相手を倒さなければバトルフィールドから出られなくなったわけだ。

陸は己の判断の甘さに舌打ちをする。相手は、得体の知れない管理者であり、藤永哲也に再びアバター能力を与えたジュエルナイト宝石騎士である。その用事が単なる話し合いであるはずもなかった。

心の中でサファイに通信を試みるが、異次元であるためかそれすら

叶わない。以前とは違って相手は本物の宝石騎士……。陸は避けることのできない戦いを覚悟した。

そう、このときはまだ　　陸も『充分戦いになる』と信じて疑わなかった。

「氷槍ひょうやう

はつかんじく八寒地獄……」

ブルースが氷槍を前後左右に振り回すと、強烈な冷気が発生して辺りの温度を一気に下げる。真夏になれば冷房要らず　などと考えたことを、陸は間も無く後悔する羽目になった。

大気が一瞬にして凍てつく……。地面に含まれる僅かな水分すら凍りつき、バトルフィールド内は極寒の地へと変貌した。

軽装の陸にしてみれば、たまったものではなかった。全身に刺すような痛みが走り、呼吸をするたび肺が焼かれたように感じてしまう。当然、ダメージを受けた肺は、酸素を取り込むことも困難となる。陸は、寒さと息苦しさによって身体を激しく震わせながら、ジュエルタイプの携帯端末を強く握りしめた。

途端に陸の身体が眩い光に包まれる。ペンダントの宝石が霧状に分解され、光の粒子となって陸の額で再構築される。その瞬間、陸の身体に変化が訪れた。

見た目にそれほど変化があるわけではない。だが、その身体能力は格段に上がっていた。

内から湧き上がる力によって冷気が遮断される。傷ついた肺も急速な新陳代謝によって回復を始めた。試してみるつもりはないが、アヴァター化した陸なら深海や宇宙空間でさえ平気に活動できるだろう。

アヴァターになりさえすれば能力は互角。管理者同士、簡単にやられることはないはずだ。しかし、そんな甘い考えは瞬時に打ち碎かれることになった。

「そのまま死んでいればよかったものを！」

ブルースの肩がキラリと光る。いや、正確には顔の側面を凄まじい冷気が通り過ぎた直後、光ったように感じられた程度であった。後方では大爆発が起こり、飛び散った石つぶてが陸の背中に叩き付けられる。陸は恐る恐る後ろを振り返ってみる。そして陸が眼にしたもの……。凍てついた崖が氷槍八寒地獄の一撃によって砕け散っている光景であった。

「じよ、冗談……」

あまりの事に陸は愕然としてしまう。もし、いまの攻撃がまともに当たっていたとするなら、陸の身体は消し飛んでいたはずである。

「避ける……」

氷槍を振り回したブルースは、刃先をそのまま地面へと突き立てる。

「八寒地獄

虎虎婆！」

先の鋭く尖った巨大な氷柱が地面から生えるように伸びてくる。まさに一撃必殺。陸は形振りかまわず身体を投げだして氷柱から逃れた。

氷柱が地面に突き刺さった瞬間、これまで以上の冷気が発生する。そして、ピシピシと音を立て始め、凍りついた地面も含めて氷柱が粉々に砕け散った。全てのモノを凍らせて破壊する。それが虎虎婆という技のようであった。

「な、なんだ、これは……」

理解の範疇を超えた現象の数々に、陸は頭を抱え込んでしまう。これは本当に現実なのであろうか

ありえない、ありえない、ありえない。いくらエターナルアース側のプレイヤーだといっても人間業ではない。これではまるで漫画やゲームに出てくる登場人物のようではないか……。そんな非常識な相手を前に、五日前までただの人間だった陸が適うはずもない。陸は、がたがたと身体を震わせながら、知らず知らずのうちに後退りしていた。

「^{アヴァター}神乃化身になれば、対抗できるとでも思っていたのか……？」

動揺している陸の心を読むようにブルースが問いかける。

「知っているか？ 宝石騎士 いや、十四創神とは、七つの聖界を創造せしエターナルアースの神々……」

ゆっくりと陸に近づくブルース
不覚にも、そんな動きに陸はビクツと身体を震わせてしまう。

「このゲーム……^{クリスタルファンタジー}結晶幻想曲では、プレイヤーにそんな神々の御名が与えられている。そして、その神乃化身^{アヴァター}であるお前たちは、この惑星クラリオンアースにおいて神そのものだと言えるだろう」

「なにが……、いったいなにが言いたい！」

「お前には、神の資質があるのか？」

「か、神の資質……？」

「そう、お前たちは単にプレイヤーの代わりというだけの存在ではない。アヴァターとなった者がこのクラリオンアースの神！ 神の力を手に入れたお前は、このクラリオンアースで何をする！」

そんなことを聞かれても直ぐに答えられるはずがない。それに、クラリオンアースの神になったと言われても、いまいちピンとこなかった。そもそも神などというあやふやな存在になっただからといって、いったいどんな意味があるというのだろうか……。陸には、妖しげな宗教を立ち上げる気などまったく無いからだ。

「神なんて関係ねえ。オレは薫を助けるため、アヴァターになっただけだ！」

「そうか、ならばお前に価値は無い」

「な、なんだと……」

明らかにブルースの気配が変わる。殺気とでもいうのだろうか心臓を握りつぶされそうなほどのプレッシャーが陸だけに向けて放たれた。

凄まじい重圧に耐え切れず、陸は両腕で頭を庇う。ブルースは氷槍を振り回しながらニヤリと笑い、内なる精霊力を錬りながら高めた。すると、空中に無数の氷刃が現われる。ブルースは氷槍を天高く突き上げ、陸めがけて一気に振り下ろした。

「八寒地獄

尼刺部陀にいふだ！」

その叫び声と同時に氷刃が陸へ向かって放たれる。

一つ一つが刃物より鋭い凶器……。真の戦いを知らない陸には、その攻撃を避けることができない。ただ、迫り来る氷刃で貫かれる瞬間とせきを待つしかなかった。

DEAD END……

………

『って、勝手に終わったらマズイでしょ！』

突然、そんなことを叫び出す優子に菜月は啞然としてしまう。本当に意味不明である。

現在、菜月はバトルフィールドの気配を辿って、夜の街を白鳳学園へ向かって駆けていた。

その道中、優子によって介入してきた規格外プログラム『^{ブル}Blue Spine 1』の説明がなされていた。

『ブルスって、元々はプラネットメーカーを監視させるために組み上げたプログラムなの』

「監視させるって、いったいどういう意味なんですか？」

『え〜っと、プラネットメーカーって惑星を創造するためのやっぱりゲームなのよ。で〜、発売から二十五年も経っているものだから、中にはシミュレーションデータを改竄して不正に惑星創造しようとするユーザーも現われてくる。そういったユーザーのシステムに侵入して、元データから破壊してしまおうというのがブルスってわけ』

「穏やかではありませんね……。っていうか、メーカー側がそんなプログラムを創って大丈夫なんですか？」

『いや、改竄されることを想定して組んだプログラムなんだけど、ブルスが使われたことは今まで一度も無かったわ。よくよく考えてみれば、ただの人間族に古代精霊言語を理解して、ブラックボックスに収められている時空石をどうこうできるはず無かったのよ。プラネットメーカーって下手にいじると全てのデータが消去される』

ような仕様になっているわけだし……」

「なるほど、だから規格外プログラムとして凍結されていたわけですね」

「そんなブルースがこの惑星クラリオンアースにインストールされてしまった。ブルースの行動理念はシステム内に取り込まれた異物の排除……。で、今回の異物っていうのが、本来クラリオンアースに存在するはずのない宝石騎士ジュエルナイトの神乃化身アヴァターってことになるわけ」

」

「つまり、ブルースの狙いは結晶幻想曲に参加しているわたしたちアヴァターデライトの消去ってことですね……」

「そう……。そして、もしアヴァター消去が達成できなかった場合、ブルースは不正なシステムとしてクラリオンアースそのものを破壊しようとする可能性がある」

「このクラリオンアースを……破壊！」

「そうだったら、アヴァターだけの問題じゃなくなる。惑星クラリオンアースの全てが消滅してしまう。そうなる前に、ブルースを倒さなければならぬ」

」

あまりの内容に、菜月は駆けることも忘れて呆然と立ち尽くしてしまった。言葉通りだとするのなら、これは世界崩壊の危機である。ベタな展開ではあったが、このクラリオンアースの命運は菜月たちにかかっているといっても過言ではなかった。

「それにしても、ブルースとは融通のきかないプログラムのようですね。この凄まじい気配から考えても、いま陸くんが戦っているのはそのブルースで間違いない。陸くんは大丈夫なのでしょうか？」

「ブルースが本気を出せば陸くんに勝ち目はないわよ。なんとたつて、ブルースの基となったのは、エターナルアースの七つある聖界の中でも最強と謳われた勇者なんですから」

「ゆ、勇者？ システムを破壊してしまうプログラムのモデルが

勇者なんですか？」

『うつ……、そんな細かいことは気にしないの！』

菜月のつつこみに優子は言葉を詰まらせる。しかし、ブルースピネルの創造主が言うのだから曲げようのない事実である。

ブルースの基となったのは右手の甲にアウインの紋章を持ち、後に奇数月十三月の宝石騎士クリスタルとなった人間族の勇者 如きさ月翔らめしゅうのことである。それは、エターナルアースの崩壊を阻止するため、十八歳で命を落とすことになった優子の実兄でもあった。

ちなみに、本来は宝石騎士サファイアの名を受け継ぐはずの優子がどうしてクリスタルを名乗っているかという点、彼女が極端なブラザーコンプレックスだからである。故に、シヨウをモデルとしたブルースピネルには過大なブラコン補正のようなものが掛かっており、はつきり言ってしまうえばほとんど無敵であった。当然、アウアターになりたての陸が適うはずもない。

優子に言わせれば、ブルースに勝ちたければ本物の宝石騎士シヨウの師でもあるエメラルドかダイヤモンドを連れてこいということらしい。その辺のなんちゃって勇者では、到底太刀打ちすることが出来ないのだという。

倒さなければならぬ相手は素敵に無敵……。まったくわけのわからない状況に菜月は大きなため息を吐いてしまう。優子がブルースの創造主というのであればこの状況をなんとかして欲しい。菜月でなくてもそんなふうを考えてしまうことだろう。

目前に迫る無数の氷刃。陸が死を覚悟したとき、凄まじいエネルギーの壁が展開された。飛んできた氷刃は、エネルギーに触れた瞬間、蒸発するように消滅してしまう。陸はそんな光景を呆然と眺めていた。

一体何が起こったのだろうか……。陸は光り輝くエネルギーの塊

りを凝視する。エネルギーの壁を発生させているもの。それは菜月から預けられた聖剣クリソベリルであった。

聖剣の出現にブルースはなぜか微笑を浮かべる。懐かしいものを見つけたような、そんな感じの笑みであった。

「ほお、お前が所有していたとは驚きだな……。しかも、クリソベリルが自ら護ろうとするとは。お前にもアウインの勇者としての素質があるということなのか？」

「アウインの勇者、だと？」

「まあ、素質が有ろうと無かろうと関係はない。その剣はオレのものだ。返してもらおう」

不意にブルースが右手を構える。すると、右手の甲に翼を広げた鳥のような紋様『アウインの紋章』が浮かび上がった。その途端、聖剣クリソベリルがブルースへ向かって超速で移動する。ブルースは飛んできたクリソベリルの柄を掴み、感触を確かめるように一振りした。

刀身から光の粒子が溢れ出る。ブルースが手にしたことで、聖剣クリソベリルには見たこともない変化が現れた。菜月が手にしていたとき以上に光り輝く刀身は、まさに聖剣と呼ぶに相応しい美しさがある。ブルースが本当の所有者というのも間違いではないかもしれない。しかし、聖剣クリソベリルは菜月から預かった大切なもの……。勝手に奪い取られるなど絶対にできなかった。

「てめえ、それを返しやがれ！」

陸は不意を衝いてブルースに飛びかかる。いや、叫んでいては不意打ちもなにも無いだろう。案の定、ブルースは飛びかかってくる陸めがけて、氷槍八寒地獄の一撃を喰らわせた。

鋭い切っ先が陸の左肩に突き刺さり、内部から爆発したかのよう

に血肉を飛び散らせる。後方へ吹き飛ばされながら、陸は左腕の感覚が完全に失われてしまったことを理解した。

激しく地面に叩きつけられながら、まるで壊れた人形のように力無く転がる。全身を強打して動くことすらままならない。肩骨の碎けた左腕は、辛うじて繋がっているものの激痛を伴ってぴくりとも動かすことはできなかった。

「ち、ちきしょ……」

今のままの陸ではこのような化け物を相手に太刀打ちすることはできない。そして、唯一対抗できるかもしれない聖剣も奪われてしまった。武器も無く純粋な戦闘能力でも負けている。名だけの神乃化身である陸には、この状況を打破する手立てがまるで無かった。

そもそも陸は戦い方を知らない 戦闘に関しては素人である。その反面、ブルースは戦い慣れているように見受けられる。それこそ、世界の危機を幾度も救ってきた勇者であるかのように……。

しかも、ブルースは間違いなく本気を出していない。それが証拠に、ブルースは呼吸が乱れるどころか汗一つ掻いていない。どういう理由か知らないが、陸はブルースに遊ばれているようだ。

だが、そんなお遊びもこれで終わりのようである。期待はずれ……とても思っただろう。ブルースは、がたがたと震える陸の様子に大きなため息を吐く。静かに、冷たい口調でそつと呟いた。

「……死ぬ」

それは断ることできない いわば命令であった。

本当にそれで良いのか。自分が死んでしまったら、後に残された

ものはどうなるのだろうか……。ふと、陸はそんなことを考えた。

もしかしたら、今度こそ存在が完全に消滅してしまつて、クリスタル結晶幻想曲シニ関係者の記憶にも残らないかもしれない。だが、惑星クラリオニアースの管理者である菜月は、陸の存在を忘れることはないだろう。陸が死んだら菜月は哀しむだろうか……。管理者代行を任せたことに後悔する可能性も考えられる。

また、陸をアヴァターに選んだサファイはどう思うのか……。やはり、アヴァターとして選んだことで、陸が死んでしまったと悔やむような気がする。

哀しそうな表情の菜月とサファイが脳裏に浮かぶ。その瞬間、動かなかったはずの陸の身体に力が戻ってきた。

「こんなところで……死んでたまるか……！」

よろよろと立ち上がる陸を見て、ブルースの口元が僅かに緩む。もはや満身創痍の陸に何かできるとは思えない。それでもブルースは、陸が立ち上がったという事実には微笑みを浮かべた。そして、仁王立ちのように両手を広げて、陸を叱咤激励するかのよう大きく叫んだ。

「ならば見せてみる！ クラリオニアースの神としての お前の 資質を！」

「うるせえ……！ 今すぐぶつ殺してやるから、覚悟しやがれっ！」

身体を半身にずらした陸は、大地へ踏ん張るように腰をしっかり下ろす。動く右手を腰の位置まで持つてきて、全身に力を込めるように唸りはじめた。

「うおおお……！」

格闘技ができるわけではない。剣技ができるわけでもない。もちろん、それらが可能だったとしても、ブルースに勝つことは難しいだろう。これは、いわば最後の足掻きである。窮鼠却って猫を噛む。このまま殺されてしまうというのなら出来ることをやるだけだ。

今の陸に出来ること……。それを考えたとき、陸は恥かしさのあまりおもわず頭を抱えそうになった。アレを使うには、あのポーズと掛け声をやらなくてはならない。それに、片腕だけで本当に出るのだろうか……。いや、そんなことを考えている場合ではない。とにかく、無心で身体を動かし、アレが出るイメージを脳裏に思い浮かべなくてはならない。本当に情けなくはあるが、陸に出来るのは以前にサファイが使ったアレを真似ることだけだった。

大きく深呼吸して力を込めると、手の平に謎のエネルギーが集まる。ような気がする。それを掛け声と共に解き放てば、嫌味な笑みを浮かべているブルースに一泡吹かせられる。覚悟を決めた陸は、じっとブルースだけを見据え、腰に構えた右腕をおもいつき突き出した。

「は……、波動おーー拳！」

やっぱりなんか出た

謎のエネルギー弾ではあったがその威力は絶大である。直撃を受ければブルースとて只では済むまい。惜しむらくは、その動きが単調であること。ブルースなら簡単に交わせるはずだ。

しかし、陸の予想に反してエネルギー弾はブルースへ直撃する。ブルースに着弾した瞬間、エネルギー弾は大爆発を起こす。凄まじい爆音や爆風はバトルフィールド全体を振るわせた。

「や、やったのか！」

土煙によってブルースのダメージまでは確認できない。だが、フィールド展開しているリンウィックはまったく動じていなかった。それは、ブルースが無事であると確信しているからなのだろう。それを証明するかのように、土煙の中からブルースの声が聞こえてきた。

「ふっ……。アヴァターというなら　これぐらいのことをやってみせる！」

ブルースの身体から放たれる謎のエネルギーによって土煙が吹き飛ばされる。漫画やアニメなんかでよく見る全身を包み込むような光である。そのプレッシャーに、陸は無意識のうちに後退りしてしまった。

仮面の額に光り輝く宝石が浮かび上がる。すると、ブルースの髪が漆黒から金色へと変化した。それに伴い、ブルースの雰囲気ガラリと変る。まるで人間から肉体を持たない精霊にでもなったかのように

凄まじいエネルギーがブルースの右手に集中する。見るからにヤバ気なそれは、ぱちぱちと放電を繰り返しながら、解き放たれるときを待っていた。

不意にブルースが右手を腰の位置に構える。次の瞬間、空手の正拳突きのように、陸へ向けて右手を突き出した。

「ライトニング　ドラゴン！」

精霊神ファリスの五精霊の一人、光のシヨウ最大級の技　ライティングドラゴン。陸のちゃんゲーム技とは比べ物にならない、まさに一撃必殺の大技であった。

突然の地震……いや、時空間同士の干渉による大振動が発生した。その震源と思われる白鳳学園高等部のグラウンドでは、普通では考えられない現象が起こっていた。何も無い空間に割れたガラスのようなひびが現われ、爆発するように内部から何かが飛び出してくる。稲妻で形創られた光の龍　ブルースの放った必殺技ライトニングドラゴンであった。

超龍神リーンウィックの展開したバトルフィールドが一部とはいえ突き破られたのだ。それは、ブルースの放ったライトニングドラゴンがリーンウィックの力を遙かに超えている証だといえるだろう。その光景を眼にした菜月は愕然としてしまう。力の差からどうやっても入り込むことができなかったバトルフィールドを、ブルースは内側からいとも簡単に破壊して見せたのだ。聖剣クリソベリルを持っていたときの　管理者の力を失う前の菜月であってもブルースには適わないかもしれない。

そんな敵を相手に陸は一人で戦っている。アヴァターになりたての陸が勝てるはずもない。菜月には、今の一撃が止めでないことを祈るしかできなかった。

『しめた！　あの技、ライトニングドラゴンが治まったら、空間が修復される前に飛び込むわよ！』

「それで、フィールド内へ入れるのですか！」

『そのはず……。でも、直ぐに空間の裂け目が閉じてしまうから、急いで飛び込まないといけない！』

菜月は指示された通り空間の裂け目へと近づく。だが、雷撃が治まって飛び込もうとした瞬間、何者かの体当たりによって弾き飛ばされてしまった。

「誰っ！」

慌てて体勢を立て直した菜月は、空間の裂け目へ侵入しようとしている人影を凝視する。それは、菜月の無様な姿に嫌味な笑みを浮かべている二十歳前後の青年。額に宝石が付いてアヴァター化している不可思議事件の殺人鬼 藤永哲也であった。

「邪魔はさせねえ……」

そんな不気味な言葉だけを残し、藤永はフィールド内へと飛び込んでしまう。その途端、裂け目は修復され、何も無いただの空間に戻ってしまった。

『うーん、まずったわね……』

「ゆ、優子さん、どうしましょう！」

『優子じゃなく、クリスって呼びなさい……。って、いまはそれどころじゃなかったわね』

優子は後手に回った状況を打ち破ろうと唸りながら考え込むが、ブルースを超える力の持ち主や時空間干渉能力者のいない現状ではさすがにどうすることもできなかった。

そのとき、菜月の端末に通信が入る。それは、洋館でみんなの帰りを待っているサファイからの通信であった。

『ナツキお姉ちゃん聞こえる！』

『サファイ、今は忙しいから後にしなさい』

『リクと……、リクにシステムが繋がった！』

「本当なのサファイちゃん？ 陸くんは大丈夫！」

『かなりヤバ気だけどちゃんと生きてるみたい……。でも、何度も呼びかけているのに返事が無い。このままじゃリクが死んじゃうよ……』

サファイの慌てようから考えてもかなりまずい状態であることがわかる。しかし、陸と回線が繋がったという事実は優子を歓喜させた。

『サファイ良くやった！ さつき空間の裂け目ができた一瞬、陸くんとリンクの連結が成功していたみたいね。よしっ、いまから洋館そっちへ向かうから、サファイは引き続き陸くんに呼びかけてみてちょうだい。菜月は、何が起こるかわからないから、この場所で待機していてね。』

「ゆ、優子さん？」

『くつくつくつ……。誰がこの結晶幻想曲クリスタルファンタジーを創ったのか 思い知らせてあげる……』

そんな不気味な言葉だけを残し、優子との通信は途切れてしまう。おそらく、大急ぎで樹神社から洋館へと向かっているのだろう。

あまりの展開の速さに、菜月は呆然と立ち尽くしてしまう

『優子さん、味方……っていうより、ラスボスな感じだよね？』

「あ、やっぱりサファイちゃんもそう思っちゃった？」

二人とも、去り際に優子が残した言葉を思い浮かべ 陸がピンチであるにも拘わらず苦笑してしまう。現状を知らない人が聞いていたら、まるつきり悪人のセリフであると思われても仕方なかったからだ。

ブルースの放った必殺技ライトニングドラゴン。辛うじて交わしたものの、その余波によって陸は深刻なダメージを負っていた。

雷撃によって全身が焼け焦げている。もし直撃を喰らっていたら、陸は消炭となっていたことだろう。上手く避けられた いや違う

……。ブルースの嫌味つたらしい表情を見ればわかる。陸が簡単に死なないうよう、僅かに雷撃の軌道が外されていたようだ。

そうすることがどんな意味を持つのかはわからない。だが、弄ばれていることは間違いないだろう。

圧倒的な力の差を一方的に見せ付ける戦い……。いわば蹂躪である。普通の者ならもう心が折れていることだろう。しかし、陸は呆れるほど諦めが悪かった。既に痛みすら感じない身体を動かそうと必死に四肢へ力を込める。ブルースを睨みつけるその瞳は、まだ輝きが失われていなかった。

「ふむ、意外としぶといな……。アブラムシほどのしぶとさだ」

この場合のアブラムシとは、植物に集る小さな虫ではなく、扁平で幅広く黒光りして触覚の長い　いわゆるゴキブリのことである。生命力の強さでは定評のある害虫である。

そんな害虫に例えられてさすがに怒り出すと思われたが陸は平静を保っていた。すでに怒る気力すら無いのか、単にゴキブリの別名を知らないだけかもしれない。それでも、嫌味を言われたことだけは雰囲気理解することができた。

『こ、こいつ……。いったい何が目的なんだ……。』

信じられないスピードで回復が始まっているものの、今の陸はほとんど身動きできない。微かに鼓動する胸を一突きするだけで、陸の生命活動を停止させることができるだろう。それなのに、ブルースは行動を起こそうとしない。まるで、回復した陸の行動を楽しみに待っているかのようであった。

これまでのやり取りから、陸を殺すことだけが目的ではないように思われる。だとするなら、やはり神の資質とやらを陸が示さなければならぬというのだろうか

そのときである。陸は、背後からこちらの様子を窺っている不気味な気配に気づいた。首も動かさないため確認はできないが、確実に何者かが近づいて来ている。陸の異変に気づいた菜月が駆け付けてくれた……。いや、発せられるのが殺気であることを考えると、少しばかり樂觀過ぎたといえるかもしれない。

「くくつ、無様な芹沢陸……………」

「そ、その声……………。藤永哲也か？」

倒れている陸を通り越し、ゆっくりと視界に現われたのは紛れもなく藤永哲也であった。藤永はブルースの近くまで進み、振り返るようにしてずたぼるな陸を睨みつける。

「こいつはオレの獲物だ。止めはオレに刺させてくれ……………」

「ちよつ！ もう人は殺さないんじゃないのか！」

「ああ、人間は殺さない……………。オレが殺すのは神乃化身^{アウアター}だけだ……………」

してやつたりといった様子で藤永は嫌味つたらしい笑みを浮かべる。それは、かつて金緑石中を恐怖に陥れた殺人鬼^{かお}の表情であった。藤永はどこからかサバイバルナイフを取り出す。刃に舌を這わせて己の感情を高揚させる。何度も刃先をチラつかせながら、動けない陸の恐怖を煽った。

次の瞬間、藤永の身体がすつと下へ沈み込む。素早い動きで身を翻し、手にしたサバイバルナイフを勢いよく突き出した。

「ふむ……………。なんのつもりだ？」

予期せぬ体当たりを喰らい、ブルースは藤永を睨みつける。その胸には深々とサバイバルナイフが突き刺さっていた。

「ヤツはオレの獲物　必ずこの手で殺す。だが、こんな形で決着を付けたくないんでね〜」

「そうか、それなら話は早い……。お前も死ね　」

その途端、藤永の背から血しぶきが飛び散る。サバイバルナイフの攻撃と同時に、氷槍八寒地獄が藤永の身体に突き刺さっていたようだ。

「げほぐほっ！」

八寒地獄により肺が傷つき、藤永は大量の血液を吐き出す。アヴアター化していなければ、身体の半分が吹き飛ばされていたことだろう。

すると、ブルースは八寒地獄に力を込めて、軽々と藤永の身体を持ち上げる。暴れる藤永を尻目に、凄まじい勢いで八寒地獄を振り下ろした。

近くの岩壁に叩き付けられる藤永……。全身から血が噴出し、生きていたことの方が不思議なほどである。しかし、藤永は生きている。八寒地獄で付けられた胸の傷も、アヴアター能力によって自己治癒が始まっていた。

それを見たブルースは、無表情で胸に刺さったサバイバルナイフを抜き取る。氷槍八寒地獄を振り回し、藤永めがけて突っ込んだ。

「八寒地獄

摩訶鉢特摩！」

その叫びと共に、ブルースは八寒地獄を藤永に突き立てる。すると、槍先の刺さった箇所から氷が溢れ出し、みるみるうちに藤永の身体を包み込み始めた。

「な、なんだこれは……！」

理解を超えた現象に、藤永は悲痛な叫びを上げる。だが、それも僅か数秒のこと。藤永は、全身を氷柱に取り込まれ、身動きすら出来なくなってしまうた。

第10話 誕生！天空神サファイア

洋館の一室……。モニターへ映し出されるバトルフィールドでの戦いに、どうすることもできないサファイアは途方に暮れていた。

メインシステムは間違いなく陸とリンクしている。陸の残り少ない体力がみるみる減っていくのもモニターできる。だというのに陸と通信することができない。こちら側からの操作もまったく受け付けてくれなかった。

このままでは陸がブルースに殺されてしまう。そんな光景を、サファイアは黙って見ていることしかできないのだろうか

そのとき、部屋の扉が開いて、息も絶え絶えな優子が飛び込んできた。

「ゆ、優子さん……」

おもわず涙ぐんでしまうサファイアを見て優子は苦笑してしまう。優子はサファイアの頭を優しく撫でた後、やたらアナログ的な外部入力装置をメイン端末へ取り付ける。そして、サファイアに代わって席に着き、信じられないスピードでシステムチェックを始めた。

「やっぱり……。想定外な異物の介入によってアヴァターシステムがハングアップしている。これじゃあ、陸さんと通信できないのは当然よね」

「一度システムを落して再起動しちやえば、リクと通信できるようになるの？」

「うん、再起動したらせつかく繋がった陸くんとの連結も切断してしまうことになる。フィールドに侵入できない以上、再び連結することはできないでしょうね」

「じゃあ、どうすれば……」

「少し落ち着きなさい。そのためにわたしがいるんだから」

にっこりと微笑んだ優子は、複数のモニターを起動させて
ハ
ングアップしているシステムの修復を試みる。

程なくして、サファイのアヴァターシステムが完全に復旧した。

「さて、これからが問題ね」

モニターから視線を外さないまま優子は不意に呟く。

「え？ 問題って……何が？」

「陸くんとのリンクは完全回復したけど、それだけではブルースに
勝つことなんてできない。それは、あなたが陸くんを操作して戦っ
ても同じこと……」

確かに優子の言うとおりである。規格外とはいえ相手は結晶幻想
曲クリスタルファンタの管理者、本物の宝石騎士ジュエルナイト……。一般プレイヤーのアヴァターで
ある陸に勝ち目はない。それこそ、冒険を始めたばかりのレベル1
のキャラクターがいきなりラスボスと闘うようなもの……。どう足
掻いても瞬殺されるのがオチである。

もちろん、このまま陸が殺されるのを黙って見ているなんてでき
ない。通常の方法がダメでも、結晶幻想曲クリスタルファンタジーの開発者である優子なら、
裏技的な解決策があるはずだ。

「で、でも、優子さんなら　なんとかできるんですよね？」

サファイは期待を込めて問いかける。その問いに優子は押し黙って
しまった。

瞳を瞑りながら優子はしばらく考え込む。覚悟を決めたように頷
き、懐から小さな何かを取り出した。それはサファイアの埋め込ま

れたペンダント。アヴァターとなった陸に渡されたのと同じ、ジュエルタイプの携帯端末であった。

優子は、手にした携帯端末を翳しながら、サフィの瞳をジッと見つめる。

「方法は二つある……。一つは、サフィ クリスタルサァンタ あなたがこの結晶幻想曲のプレイを止めること。その場合、陸くんの存在は開発者の名にかけてわたしがなんとかする……」

まさに予想もしていなかった衝撃的な内容である。ここにきて、優子はサフィにゲームの退会を提案してきたのだ。

もし、そうしなければ陸が助からないというのであれば、サフィも即決していたかもしれない。だが、優子は方法が二つあると言った。それほど時間に余裕は無いが、結論を出すのはそれを確認してからでも遅くないだろう。

「それで、もう一つの方法とは……?」

「もう一つは結晶幻想曲のプレイ環境を大きく逸脱した行為になる。想定外のことだから、わたしにも何が起るのかはわからない」

「えっ、いったい何を?」

「この携帯端末を依り代にして、あなたと陸くんが一体化する。平たく考えると、融合するってことね」

「融合?」

「今まではモニター越しに見ていただけでしようけど、この方法ではあなたと陸くんが一体化することになる。だから、陸くんが怪我をすればあなたにも痛みが伝わるし、陸くんが殺されればあなたも死んでしまうことになる……。ぶっちゃけてしまうと、あなたが融合することで、陸くんは神乃化身ではなくジュエルナイト宝石騎士そのものに転生する。そうすれば、勝てないにしてもブルースとまともに戦えるようになるでしょう」

「そ、そんなことが 本当に可能なんですか？」

「一応は可能よ。少し違うけど、お兄ちゃんとアリスの事例もあるわけだし……。でも、上手く融合出来たとしても、その後の方が問題かもしれないわね。戦いが終わった後、ちゃんと元の陸さんとサフィちゃんに戻れるかどうか……」

瀕死の陸を助ける二つの方法は、どちらを選んでもただではすまないようである。しかし、二つの方法を聞き終えたサフィの考えは、既に固まっていた。

「わたしは、自分自身の手でリクを助きたい。そして、これからこのゲームを続けていきたい……。だから融合することでリクを助けます！」

何があるうとも自分の力で解決したい。このときのサフィの意思は、もはや誰にも変えることができなかった

「そう、あなたがそこまで言うのなら、融合を試してみましよう。あ……、でも本当にどうなるかわからないから、覚悟だけはしておいてね」

「……………え？」

そんな最終宣告を聞いて、サフィがほんのちよっぴり躊躇いを感じてしまったのは内緒であった。

突然、反旗を翻した藤永ではあったが、ブルースの超必殺技によって氷柱へと取り込まれてしまう。二人で戦えばあるいはなんとかなったかもしれないが、こうなってしまうては後の祭りである。もちろん、瀕死の状態の陸がまともに戦えるとは思えないのだが

「ふむ、どうやら他の管理者が何かを企んでいるようだな……」

突然、ブルースがそんなことを呟く。その瞬間、陸の意識は、肉体を離れて別の次元へと飛ばされてしまった。

『じ、ここは……どこだ！』

さきほどまでいたバトルフィールドとは違い、見渡す限り光に満ちた空間に陸の意識は浮かんでいた。一瞬、力尽きて死んでしまったのかとも考えたがどうやらそうではなさそうである。目前に巨大なモニターが現れて、同じ年ほどの可愛い女の子が映し出されたからだ。しかも、その女の子の背には、一對の純白な翼が生えていた。まるで宗教画に出てくるような天使の姿。やはり、陸は死んでしまったとでもいうのだろうか……。

『陸くん、ちゃんと生きているようね』

『って、おまえ優子なのかよ！』

『そうよ。優子ちゃん天空族バージョン。これからの実験で大量の天空力が必要になるから、久しぶりに本来の姿へ戻ってみました』

メガネを外した優子はまるで別人のような可愛さがある。さらに背中に翼が生えているとは。どう考えても人間族ではなさそうであった。

『で、あなたが鳥人間だってことはわかった。けど、いったいここはどこなんだ。ここってブルースの張ったフィールド内じゃないのか？』

『え〜っと、説明するのはかなり面倒なんだけど。バトルフィールド

ドへ強制的に発生させた特殊空間ってとこかしら。ドラク工風に言えば錬金釜みたいな感じ〜?」

「釜……はっ?」

「じつは今から次世代のアヴァターシステムの先行実験をすることになってね、陸くんとサファイちゃんはその実験体選ばれちゃいました」

「ちよつ、なに勝手に決めてるんだよ!」

「勝手にじゃないわよ、これはサファイちゃんの意味でもある……。サファイちゃんがあなたを助けるため、あなたと融合することを選んだ。あなたもサファイちゃんのアヴァターなら覚悟を決めなさい!」

既に話は決まっているようで陸の意見が入り込む余地はなさそうである。なんとも勝手な言い分ではあるが、陸を助けようとした結果であるため文句は言えない。つまりはそういうことであつた。

「ちつ、わかつたよ。それで……オレは何をすればいいんだ?」

「たった今、ジュエルタイプの携帯端末を依り代にして、そっちへサファイちゃんを送つた。あなたはお兄さんらしく、ちゃんと受け止めてあげなさい」

「……。意味わかんねえぞ……」

「意味なんてわからなくてもいい。要はあなたがサファイちゃんを受け入れられるかどうか……。もし失敗すれば　これは聞かないほうがいいかもね」

「つて、おい!」

そのとき、光の空間へ何かが侵入してくるのを感じた。陸はこの感覚に覚えがあつた。そう、サファイと神乃化身契約をしたときの

陸の存在がクラリオンアースから消滅したときの感覚である。

違いがあるとすれば、現われたサファイは光の塊りではなく生身であつたこと。そして、それとは逆に陸自身の姿が消え、意識だ

けの光の塊りになっていたことだった。

『いま、陸くんの身体はDNAレベルまで解析されてデータ化している……。さあサファイちゃん、データ化した陸くんを自らの身体に取り込んで、融合合体しちやいなさい！』

『って、なににーにーにー！』

なにやら聞き捨てならない言葉が優子の口から発せられた。陸がサファイを受け入れるのではなかったのか……。これは、少し話し合いの余地があるかもしれない。

しかし、そうこうしているうちに、虚ろな瞳のサファイが近づいてくる。サファイは、まるで優子に操られているかのような動きで、光の塊りとなった陸を愛おしそうに抱きしめた。すると、光の粒子となった陸はサファイの身体に吸収されてしまう

以前のアヴァター契約と完全に真逆であったが、いったい何が違ってくるのだろうか。そんなことを考えているうちに、陸の意識は深い闇の底へと落ちて行く。

どんな実験なのかいまいわからない。本当に成功するのか妖しいところである。

数秒後、悪い予感は見事に的中してしまうことになる。陸の身体には、まさに信じられない変化が訪れることになるからだ。

突如現われた光の球体　中には意識を失った陸の姿がある。そんな光景を、ブルースは何もせずただジッと見つめていた。まるで、陸が変化し終えるのを待っているかのように……。

そこへ外界からの通信が入った。エターナルアースの優子から謎の管理者ブルースに向けての通信である。

『ブルース……、あなたはどういうつもり？ このイベント、クリスタルアンタジー
結晶幻想曲には、宝石名ブルースピネルは設定されていない。確かに、あなたにはプラネットメーカーアタミリストレタの管理者権限が与えられている。でも、このイベントでの管理者はクリスタルとヘリオードールの二人だけ……。あなたは管理者じゃない！』

「……………」

『ちよつと聞いているの？ ちゃんと答えなさい お兄ちゃん！』

優子の叫びにブルースは僅かに口を開かせる。しかし、その口から言葉が紡がれる前に、陸を取り込んだ光の球体に変化が現われた。まるで卵の殻がひび割れるかのように、球体の表面に亀裂が走る。その刹那、球体が砕け、中から凄まじい力の渦が溢れ出る。エターナルアースに存在する七つの種族のうち、もつとも神に近いとされる天空族の力であった。

「ほう、なるほど……。プレイヤーとアヴァターを融合させて、このクラリオンアースに十四創神を誕生させるつもりだな」

無表情だったブルースの顔に変化が現われる。

十四創神の誕生……。確実に不利となる状況だが、ブルースはそれを楽しむように微笑んでいた。

身体の奥底から力が漲ってくる。激痛により動かなかった身体が、今では翼が生えたかのように軽い。これが融合合体の効果なのだろうか

これなら勝てる……。などという希望的観測を持つのはもう止めておこう。融合という言葉の意味が正しければ、もはや陸だけの問題ではなくなくなってしまっからだ。

何かあれば、サフィの身にも危険が及ぶことになる。まずは、ブ

ルースから逃れることを考えなくてはならない。なんとしても、サファイだけは護らなければならなかった。

とはいえ、このバトルフィールドから脱出するためには、術者自らが解除するか相手を倒すしかない。どうしてもブルースとは戦うことになるのだろうか……。いや違う。バトルフィールドを展開させたのはブルースではなく、あの奇妙な喋る龍リーンウィックだ。それならば、わざわざリスクを犯してブルースに戦いを挑まなくても、リーンウィックさえなんとかすれば脱出できる可能性がある。この場を乗り切ることさえできれば……。後はなんとでもなる。まずはバトルフィールドからの脱出が先決だ。

そんな思考に辿り着くまで僅か一秒程度……。変化を終えた陸とサファイの融合体は、天空力の爆風からゆっくりと現れた。

神々しいまでのその姿は、まさしく肉体を持たない神のようである。額には大きな宝石が付いており、背から一對の純白な翼が生えている。それは、古い宗教画に描かれている天使のような姿……。唯一、おかしな点があるとするならば、現われたのがさきほどまで戦っていた陸ではなく、十三歳ほどの小さな女の子だったことであろうか……。そう、その姿は陸ではなく、エターナルアース側のプレイヤー、サファイのものであった。

「って、なんじゃこりゃー……！」

サファイの姿をした陸が、可愛い声で悲鳴を上げる。その声も、紛れも無くサファイのものであった。

「あ〜っはっはっは……」

『あらら、面白い形で融合しちゃったわね。まあ、お兄ちゃんとアリスが融合してクリスになるときも、性別が男だったり女だったりしていたから、別に失敗ってわけじゃない……。のかな？』

ブルースが呆れたように笑い、優子は無責任なことを呟く。アヴァター契約したときのように、姿はそのままパワーアップすると考えていた陸は驚愕するしかなかった。

アヴァター化して身体のコントロールを奪われたときの逆と考えて良いのだろうか。手足は短くなっているものの、サファイの身体は陸の思い通りに動く。なんとも不思議な感覚であった。

「おいサファイ……。いったいどうなってるんだ？」

そんな問いかけに、サファイはまったく反応しようとしなない。まるで、サファイの意識だけが消えてしまったかのように

「ちよつ、サファイ！」

『陸くん、避けて！』

「えっ？」

視線を上げると、目前には八寒地獄の鋭い槍先が迫っていた。

陸は無意識のうちに後方へステップして氷槍の脅威から逃れる。

次の瞬間、視界が超速で流れ始めた。近づいていたブルースが前方へとぶつ飛んで行く。いや、そうではない。軽くステップしたことによって、陸が真後ろへすっ飛んでいるのだ。

その勢いは治まることを知らず、重力の影響など受けないかのようには地面へ近づくことはない。前方には崖が聳え立っており、このままでは間も無く激突してしまうことになるだろう。陸は無理矢理身体の向きを回転させて、少しでも勢いを殺すため 両腕を地面へと突き立てた。

腕は簡単に地面へと突き刺さる。例えるのなら、豆腐に指を押し付けたような感覚だろうか……。地面本来の硬さはまるで感じられない。当然のことではあるが、そんな状況で勢いを消せるはずもなく、陸は超速のまま崖の側面に突っ込んでしまった。

凄まじい衝撃音が響き、砕けた岩が崩れ落ちる。普通なら即死するほどの勢い。だが、融合して十四創神となった陸には大した衝撃ではなかった。崖に埋もれた陸は、伸し掛かる岩を退かそうと身体を起こす。その瞬間、陸の埋まっていた崖が木っ端微塵に吹き飛んだ。

「うん、力の使い方がなっていないわね」

「突然、神の力を手に入れたんだ。仕方ないだろう……」

すると、何を思ったのか、ブルースは手にした氷槍八寒地獄を虚空へとしまう。その様子からは、さきほどまでであった陸への敵意が完全に消えていた。

「けほ、けほっ……。てめえ、いったいどういっつもりだ？」

「まさか本物の十四創神 天空神サファイアになるとは思わなかったが……。お前の資質は確認させてもらった。一応は合格だ」

「なに！」

「それに、そんな可愛い女の子を攻撃できるわけもないし……。いや、本当に可愛いよ。」

「うんうん」

「って、オレは男だ！」

「そんな荒っぽい言葉は使うな……。女の子だろ？」

「ちがーうー！」

サファイの姿をした陸をからかい続けるブルース。これ以上戦うつもりは無さそうだ。

「お兄……ブルース、あなた

アトミリストレータ

「ゆう、オレも今後は偶数月の管理者としてこのゲーム

クリスタル
結晶幻

シタジー
想曲に参加させてもらう……」

『えっ……？』

「奇数月を束ねるゆうとはライバル関係になるわけだが……まあお手柔らかに頼むな」

『ゆう……って。ちよっ、あなた本当にブルースなの？』

優子のことを『ゆう』と呼ぶのは、彼女の兄シヨウだけである。

確かにブルースピネルはシヨウをモデルに組まれたプログラムではあったが、凍結する前はちゃんと『優子』と呼んでいたはずである。しかし、今のブルースは、まるでシヨウが生き返って仮面を被っているだけのように感じてしまう。それほど、以前のブルースとは雰囲気違っていたのだ。

そんな優子の問いかけにブルースが答えることはなかった。ブルースは近くに立つ氷柱を砕き、その中から藤永の身体を取り出す。念動力のようなもので藤永の身体を浮かせ、成り行きを見守っていたリーンウィックに視線を向ける。すると、周囲の空間に歪みが発生し、景色は荒野から学園のグラウンドへと戻る。どうやら、リーンウィックの展開していたバトルフィールドが解除されたようだ。

「ジュエルナイト宝石騎士サファイアのアヴァター芹沢陸……。いや、もはや十四

創神サファイアと呼んだ方がいいか。とにかく、次会うときまでにその力を制御できるようになっておけよ。さもなければ、速攻で殺すからな」

そんなことを言い残し、ブルースはリーンウィックの背に飛び乗る。そのまま上空へと駆け昇り、夜空の彼方へと消えてしまった。

「な……、なんだっただ？」

いったいブルースは何がしたかったのだろうか……。なんにしても、大した犠牲を払うこともなく、陸は命拾いしたようであった。

張り詰めていた神経が解放された陸は、力を無くしたようにその場へ座り込む。そこに、フィールドの外部から侵入を試みていた菜月が駆けつけてきた。

「えっ、サファイ！ どうしてサファイちゃんがここに？」

戦いの様子知らない菜月に見れば、どうしてサファイがクラリオンアースにいるのか不思議で仕方ないことだろう。しかも、サファイの背中には純白の翼が生えている。明らかに普通の状態ではない。

「あっ、菜月姉え……。菜月姉えも来てくれていたんだ」

苦笑するサファイに違和感を覚える菜月……。優子から詳細を説明され、絶叫したことは言うまでもなかった。

陸とブルースの戦いが終わって数時間後……。一人の少女の元へ一通のメールが送られてきた。この時代にしては珍しい文字だけのメールである。

差出人は不明 間違いなく迷惑^{スパム}メールであろう。

普通なら直ぐに削除してしまうところだが、少女は送られてきたメールに興味を覚えてしまった。少女の使っているメインシステムはセキュリティ対策も万全である。仮にウイルスが仕込まれていたとしても、駆除されてシステムには影響を及ぼさない。少女は、軽い気持ちでその迷惑^{スパム}メールを開いてみた。

『わたしのアヴァターになりませんか？』

メールの中身はこれだけ……。意味不明の内容であり、特にセキユリテイソフトに引つかかることもなかった。

なんとも肩すかしを喰らった少女は、直ちに着信拒否の設定を行い、届いたメールを削除してしまう。これで、同じ差出人から二度と迷惑メールが届くことはないだろう。

少女はメインシステムをスリープ状態にして机から離れる。洋服ダンスから着替えを取り出し、入浴のため部屋を出て行った。

シンと静まりかえる部屋の中、机に付いているLEDがパカパカと点滅を始めた。メールの着信を知らせる合図である。

届いたメールは、さきほどと同じ神乃化身選定メールであろう。

彼女もまた、エターナルアース側のプレイヤーが行っているリアルネットゲーム クリスタルザンタジー 結晶幻想曲に巻き込まれることになるのだろうか

……。

彼女の名は白檀薫。奇数月九月の宝石騎士天空神サファイアのアヴァターとなった芹沢陸の幼馴染みであった。

人生とは何が起こるかわからない。想像もつかないようなことが突然起きてしまうことだってある。

世界の秘密を知らされ ジュエルナイト 宝石騎士のアヴァターとして第二の人生を送っていた神代陸は、再び驚愕の状況へと追い込まれていた。

『大丈夫だつて。システムをちょこつといじってみたら、他の人 プログラマー にはちゃんと陸くんに見えているはずよ』

今朝、陸を送り出す時の優子の言葉である。

本当に大丈夫なのだろうか……。この状況で学園へ行くなど、どう考えても無理があるように思えてしまう。

最初は問題が解決するまで学園を休もうとしていた。しかし、我らが生徒会長、神代菜月がそれを許そうとしなかった。

『家に閉じこもっていても問題が解決に向かうわけじゃないでしょ。だったらちゃんと学園に行って授業を受けなさい!』

菜月は、相変わらず無駄に堅い性格をしているようである。

普通に考えれば、学園になど行っている場合ではない。そう、現在の陸は、本来の神代陸ではなかった。エターナルアース側のプレイヤー、サフィの 十三歳の女の子の姿をしていた。しかも、背中に翼の生えている鳥人間状態……。なんとも頭の痛い状況に追い込まれていた。

昨晚、ブルースとの戦いでサフィと融合したまではよかったが、その後、元に戻ることができなくなってしまった。想定外の融合によって不具合が起こったのか、サフィの意識は心の奥底で眠ったままになっていた。

優子の調べによると、サフィが目覚めない限り、融合の解除が出来ないのだという。いや、正確には、目覚めない間の融合解除は、サフィの命に危険が及んでしまう可能性があるということだ。

そのため、昨晚から陸はサフィの姿での生活を余儀なくされている。これがなにかといういると、精神的にもキツイ状態なのであった。

そして、現状はというと……。サフィの姿をした陸は、クラスメイトの反応に怯えながら、自分の席で縮こまっていた。

組み上げられた誤認システムによって、他の者にはちゃんと陸の姿に見えているらしい。同じく声も陸のものに聞こえているという。それでも陸にしてみれば落ち着くことはできない。今の身体は、間違いなくサフィのものであるからだ。

「おはよ〜」

そこへ、幼馴染みの薫が登校してくる。陸は薫に視線を向けて、

おもわず表情を引きつらせてしまった。

「よ、よう、薫。おはよう……」

無視することも出来ず、陸はいつものように挨拶をする。薫といえば、アヴァターになる前の芹沢陸を思い出したというこれまた頭の痛くなるような問題も残っている。早いうちに口裏を合わせておかないと、他の生徒たちに学園生活での矛盾が知られてしまう。直ぐにでも話しておきたいが、今はそんな気分にはなれなかった。

「あ………れ？」

席に座っている陸の姿を見て、薫は小首を傾げる。陸は、その態度にギョツとしながらも、薫が何に驚いているのかを尋ねた。

「どどど、どうしたんだ？」

「え〜っと、たしか サフィちゃんだったよね〜？ どうしてサフィちゃんがここにいるの？ それに、その羽根って……」
「なっ！」

^{ビバ} Viva 誤認システム。どうやら薫には、ちゃんとサフィの姿に見えているようである。驚いた陸は、薫の手を取り、引きずるようにして教室を飛び出した。その様子を見て、クラスメイト 特に女子たちが色めき出す。そして、薫に好意を寄せている菱木健太は、悲しみの涙を流すのだった。

薫の手を握ったまま、陸は屋上までの階段を駆け上がる。いまだ^{サファイア} 宝石騎士の姿であるためか、身体は羽根のように軽かった。そんな陸とは違い、薫は全力疾走して息も絶え絶えとなっていた。

「はあ、はあ、はあ……。サフィちゃん、いったいどうしたの？」
「薫、落ち着いて聞いてくれ……。こんな姿をしているがオレは陸なんだ」

「えっ……。そうなの？」

「で、あのへっぴばこ優子の中途半端な誤認システムによって、お前以外の人にはちゃんと神代陸に見えているらしい」

「ふ、ふん……。これも、リアルネットゲームのイベントか何か？」

「そ、そうなんだよ！」

もし自分が聞かされたら絶対に信じないような与太話……。ちやんと納得してくれたかどうか疑問である。だが、少しは結晶幻想曲クリスタルファンタジーの現状を知らされた薫なら、信じてくれるかもしれない。

陸は、期待を込めて薫を見つめる。すると、薫はわかったと言わんばかりににっこりと微笑んだ。

「うふふつ。陸さんの代わりなんて、サフィちゃんも大変だね」

「ち、違っ！」

「うんわかった。どういう理屈かはわからないけど、他のみんなにはサフィちゃんが陸くんに見えているわけだね。でも、どうしてわたしには陸くんに見えないんだろう……。？ とにかく、サフィちゃん。困ったことがあったら、何でもわたしを頼ってね。男の子役をするっていつでも、サフィちゃんは女の子なんだから」

「だから、オレが陸なの！」

哀しいかな　どうやら信じてもらえなかったようである。まあ、今の話を簡単に信じてしまうのもどうかとも思っわけだが……。

立て続けに発生するトラブルの数々に、陸は空を見上げて大きなため息を吐く。

いったいいつになったらサフィは目覚めてくれるのだろうか。いや、優子の話によると、無事に目覚めてくれたとしても、ちゃんと元の二人に戻る保証は無いという。

特に、クラリオンアースのプログラムである陸は、身体データを強引に書き換えられてしまっており完全な復元は難しいとかなんとか……。最悪は、このまま一生サフィの姿に固定されたり、元に戻れたとしても性別が替わってしまったりすることがあるという。

昨晩は、説明という名目で、優子に散々からかわれてしまった。もちろん、復旧に全力を尽くしてくれるとも約束してくれたわけだが

とにかく、頭の痛くなるようなことが続いている。来週には、不可思議事件の殺人鬼、藤永哲也が教育実習生としてこの学園にやってくる。その監視も陸が任されていた。

また、姿をくらませたブルースピネルの動向も気になるところである。しばらくは、慌ただしい日々が続きそうだ。

そして、近い将来、神代家に新しい家族が増えることになる。その家族とは、アメジストとアヴァター契約してしまうことになる誰かさん。

そのときのお話は、また次の機会に語られることになるだろう。なにしろ、惑星クラリオンアースで行われているリアルネットゲーム結晶幻想曲は、まだ始まったばかりなのだから

第10話 誕生！天空神サファイア（後書き）

あとがき

えゝ、長らくお待たせしました。クラリオンアースでの陸たちの物語は一応の完結です。

久しぶりの新作だったんですが、どんなものでしょうか？ 何も考えずに書いたのでかなり読みにくいですがお許しください。

相変わらず、書き終わってみると「なぜこんな物語になったのだろっ？」と思ってしまうですね。最初はもつと痛い話にするつもりでしたが、書いているうちにほのぼの系になってしまいました。ラスト付近のブルースとのバトルは、陸が弱いもんだから全然話が進みませんでしたね。陸くん、次までにはちゃんと修行してください。文字だけ4コマ劇場の方で……（笑）

そう、最終話のアップがこんなに遅れたのは、頭が4コマを考える状態になってしまい、小説への切り替えが難しかったからです。

『ラズベリル ショート劇場』では、なるべく笑いを入れないといけないものですから（苦笑）

さて、しばらく先になるとは思いますが『クラリオンアース』はこれからも続きます。クラリオンアースは『Crystal Legend』と同じようにシリーズものですから

忘れたところに書き始めると思いますので、これからもちよくちよくとアクセスしてくださいね

今後とも、よろしく願います（ぺこり）

2009/11/01 Crystal

クリスタル

「クラリオンアース」 2009/02/15～2009/11/

01 連載作品

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1626g/>

クラリオンアース

2010年10月9日16時15分発行